

評 林

第17号

—震災の記録—

1995

西宮市立西宮高等学校

震災文庫

8

185



段違いになってしまった校舎

00096109198



震災文庫 8 - 185

は し が き

学校長 大 森 良 剛

平素の教育実践を記録し、ときには振り返りながら明日の教育実践に挑戦していく、そんな主旨で本校の研究紀要を発行してきました。平成7年1月17日の阪神・淡路大震災後もそれまでに用意していた原稿で、少し遅れたものの第16号は発行することができました。

平成7年度は、震災後の事後処理に追われる中で、教育活動の復興を最優先させてきました。プレハブ校舎の整備、備品類の移動、解体工事と慌ただしさや淋しさなど輻輳した気持ちを抱きました。生徒達も、仮の住まいから通学する状況が一向に改善されない状況ではありましたが、次第に明るさと活気を取り戻していったのが何よりの救いでした。

教職員もまた、自らの住宅問題の悩みを持ちながら教育活動に奮戦してくれました。今回の「評林第17号」は、決して忘れることのない大震災に関して、本校の記録として後世に伝えることの意味をもたせて、図書館教育部が企画・編集にあたってくれました。

その中で、地学科の課題として校区それぞれの地域で生徒自身が“揺れ”をどう感じたか、144名の生徒のレポートを掲載しています。こういう調査は学校だからこそできる貴重なものだと思います。

また、PTAでも市内8校合同研修会を機に保護者・生徒・教職員にアンケートを実施し、まとめました。

このような記録を通じて、大災害の時にはどう行動すべきか、後のケアをどう考えるべきかなど様々なことが読めてくるように思いました。

今回は、教職員の研究紀要の枠を少し広げて記録集的な小誌となりましたが、何かの参考になれば幸いです。

評林特集号 ― 震災の記録 ―

も く じ

はじめに	学校長 大森 良剛	3
未曾有の震災	学校長 大森 良剛	5
写真で見る被害の状況	写真撮影 大森 良剛	7
震災日誌抄	教頭 山下 忠男	10
兵庫県南部地震の概要	地学科 川瀬 信一 田村 昌広	17
校区各地の被害状況	地学科	22
学校現場に於ける危機管理について	教頭 平 源光	46
震災後の心を支える学校保健活動	北口 和美	51
震災後の心の変化についての アンケート調査結果	P.T.A.	57
建石から高座へーそして今	森本 宏	66
震災に想う	正田 慎	68
部活動の活動状況	飾森 宏	69
資 料 生徒の住居の損壊状況・震災後の生徒の状況調査		71

未曾有の震災

学校長 大森 良剛

午前5時46分、突然床下から突き上げられるような激しい衝撃に目が醒めた。ユラユラ、ガタガタという地震の常識を超えた、隕石か飛行機が落ちたのではないかと思われた激しい揺れであった。家族の安全を確かめ、着替えを済ませ、貴重品をまとめてすぐ外に出る用意をするように指示をして、一足先に私は玄関を開けた。まだ夜が明けていない暗がりなのに、いつもと様子が違う。前の家の土蔵が無い。ブロックの塀が倒れている。火災を心配して表通りへ走った。案の定、少し遠いが北、東の方角の2〜3ヶ所から火の手が上がっている。しかし不思議にざわめきが聞こえてこない。静かであった。すぐ引き返し、家族を車に乗せて表通りまで移動した。

近所を見てまわったところ、古い木造の家が軒並みに倒壊している。空の白みが増すにつれて、被害の大きさが想像以上であることを知った。ようやく倒壊家屋の周りに人々が集まり、下敷きになった人の救出作戦が始まったが、なかなかはかどらない。学校のことも気になりだして、近所のことは人に任せて学校へ向かうことにした。

単車に乗ってバス通りへ出た。アパートがばたばたと倒れている。倒れた電柱を避けて、散乱した瓦を踏み越えながら、普段なら10分足らずで行けるところを30分以上かかった。新池の東側の道路も大きく陥没している。まさかと思っていた校舎の一部が大きく崩れている。門からのコンクリートのアプローチが割れて波打っている。警備員が無事だったことでひとまずホッとした。しかし事務室へ入って惨憺たる様に驚いた。500キロ余りの金庫が倒れている。事務机は大きく動き、机上の書類や保管庫から飛び出した書物が足の踏み場も無いほど散乱している。

続いて校長室に入った衝立二つが倒れ、ガラスが散乱している。隣の職員室に足を踏み入れ、愕然とした。職員室の後ろ半分が2メートル程落ち込み、職員の机、キャビネット、書類が折り重なるようにずり落ちている。地震発生が教育活動中であつたらと思うとゾッとした。

急ぎ校内を見て回った。A棟1階の調理実習室の天井が崩れ落ち、中央廊下のジョイント部が完全に離れてしまっている。B棟の進路指導室も柱、壁が大きく崩れている。体育館のガラスがほとんど割れている。体育館のコンクリート柱が一本激しく座屈している。テニスコートのフェンスの基盤になっている石積みが川の中に崩れ、コートに亀裂が何本も走っている。グラウンドの東端、昔の池の

水辺あたりに幅50センチ、高低差40センチの亀裂が走っている。少し離れた所に、地域の方々が10人程避難してきておられる。寒そうである。どこか部屋を、という要請もあったが、校舎の損傷の度合い、コンクリートの通路の亀裂や凹凸を見るとかえって危険であると考え、他の学校へ行っていただいた。

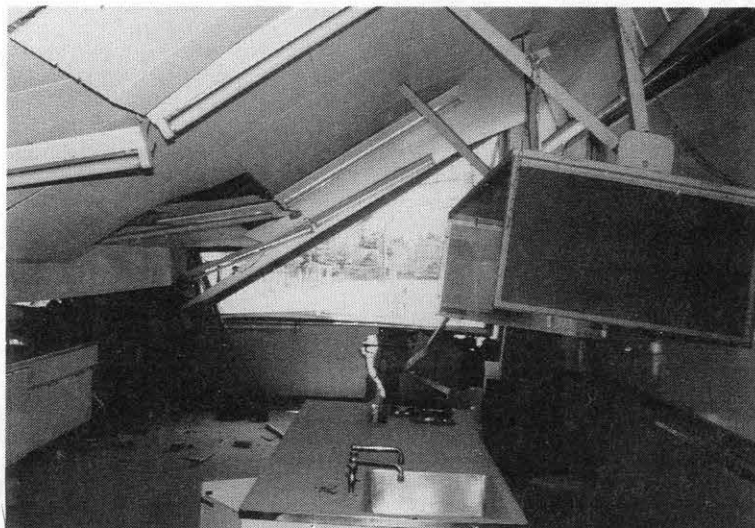
次々と職員も集まってきてくれた。「大変なことになったな」というのが全員の思いであつたろう。何から手をつけたらいいかわからない、茫然自失といった様である。

とりあえず出勤してきた職員だけで打ち合わせをした。今後の打ち合わせは毎朝9時に中央廊下の事務室前で行うこととし、さしあたって、生徒の安否を掌握すること、21日午前10時に召集をかけることにした。阪急電車が不通だから来られる生徒だけでいい。電話がなかなか通じない。家庭訪問をしたがさっぱり家が判らなくなっていると言って帰ってくる職員もいる。職員の提案で電柱に召集案内のビラを貼ることにし、早速に手配をした。

21日午前10時にどれだけの生徒が集まってくれるだろうか、不安であつた。生徒同士お互いに無事を喜び合っている姿があちこちで見られる。グラウンドにクラスの数だけ机を出し、担任が安否、家屋の損壊状況、避難先を聞き取り、名票に記入してくれている。明るい笑顔が見えるのが救いであつた。この日は約6割の生徒が集まり、生徒同士連絡を取り合っていたおかげで、9割の生徒の無事が確認された。担任はあと1割の生徒の安否を追いかけた。1032名の生徒が全員無事であることが確認できたのは24日の朝だった。不幸にして保護者で4人、兄弟が1人亡くなられたことも判った。

校舎のほとんどが使用不可能になった。大学等受験シーズン真只中、3年生の学年団、進路指導部の職員は一時もゆるがせにしないでよく頑張ってくれた。2月15日から小講堂での学年単位での授業再開、2月28日の同じく小講堂での卒業式、3月1日から仮設校舎の使用開始、そして16日の入学者選抜学力検査と慌ただしい平成6年度末であつた。

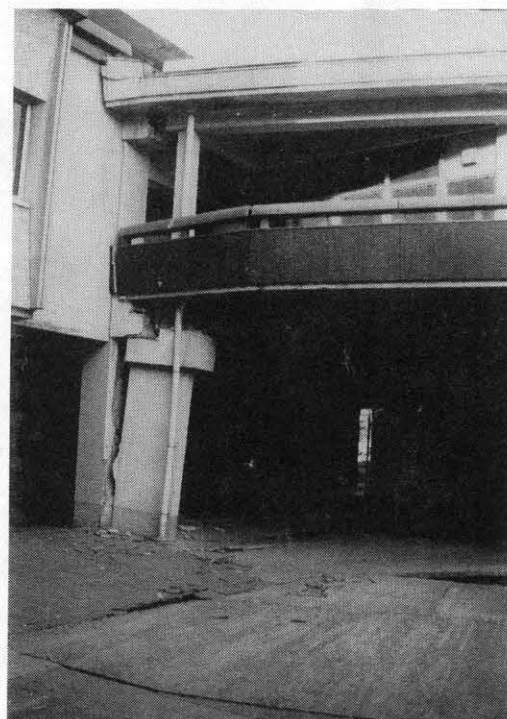
写真で見る震災の記録



押しつぶされた
家庭科調理実習室



亀裂が入り陥没した
テニスコート

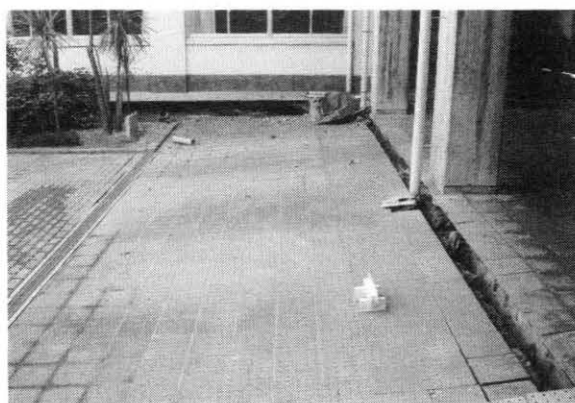


今にも崩れ落ちそうな
体育館の支柱



座屈したA棟東側部分

全体が沈下して
しまった中庭



中央で段差ができてしまった
職員室から書類を運び出す職員

校舎から教科書類を
運び出す職員

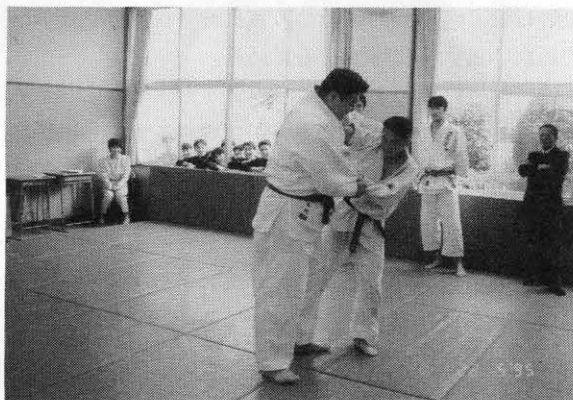


プレハブの仮設校舎
運動場が半分になっ
てしまった



運動場で行った
新入生物品販売

慰問に訪れてくだ
さったオリンピック
選手の小川直也さん



段差のついた校舎を背に
夏の高校野球プラカード
の練習をする女生徒

震災日記抄

—校舎全壊から授業再開・仮設校舎完成まで—

教頭 山下 忠男

1月17日(火)

大学センター試験の自己採点を終えた翌早暁の大震災。その時点ではあまりにも甚大な被害の全貌が知られず、道路を声高に叫びながら行き交う人も無く、静寂にも似た、未だ明けやらぬ街の一種異様な雰囲気。しかし、学校周辺の道路には倒壊寸前の家屋があちこちに軒を傾け、折れた電柱が頭を垂れ、なによりも道路そのものが縦横に走る大小の裂け目や陥没で寸断状態。その寸断された交通路を迂回に迂回を重ねて、迷路の中のただ1本通じていた道路を見つけて、校長以下の職員は早い者は7時前から出勤。

職員の中には自分の家屋も全半壊のものも多く、また出勤途上で倒壊した民家やビルなどを含め大きな被害を受けた街中を通過して出勤したはずだが、ようやくたどりついて、目に入った自分の職場である市西の状態を見て暫し茫然自失。

鉄筋5階建ての管理棟東端部は1・2階が完全崩壊、3階以上も職員室の前半を境に5階まで半階づつの落差。普通教室棟も基礎部分が崩れ、体育館を支えている太い柱も数本が座屈し、ガラス片が一面に散乱。グラウンドは液状化を呈し、東側には南端から校舎に達する一直線の長く深い裂け目。もし、地震の発生があと3時間遅かったら……想像するだに背筋が凍る。

グラウンド中央部には、自宅から逃れて来たものの、崩れかけた校舎内に入る気にもなれず、身を寄せ合ってうずくまる子供や虚ろな目でベンチに腰掛けるお年寄りを含む数家族の避難者。その人たちに学校ができる事は僅か数枚の毛布の提供のみ。

時間を追う毎に出勤する職員も少しずつ増え、そうした職員で取りあえず臨時職員会議。終了後、手分けして生徒と職員の安否の確認の連絡。追々に出勤不可能な職員との連絡が付きだしたが、とにかく電話が通じるまでにダイヤルをすること数回、時には数十回。それでも連絡できない場合もしばしば。損壊した自宅や幼少の家族を抱えての避難先から職場に必死に連絡をとる職員も同様の状態であろう。

最終的には、本日の出勤教職員36名(臨時職員や時間講師を含んで全教職員数は89名)、連絡がつかなかったのは20名。当日判明の教職員被害状況は負傷2、家屋全壊2、半壊8、両親を失った者1名といった処だが、この数字は大幅に増加する見込み。

臨時休校措置にもかかわらず近くの生徒などが数人ずつ学校の様子を見に来て、その惨状に驚愕の表情。登校した生徒やようやく電話連絡がついた生徒からの情報で生徒及び家族の安否や自宅などの被害状況も若干判明したが、生徒全員の安否確認は担任団の必死の努力にもかかわらず17日段階では不可能。

とりあえず、大型金庫以下ほとんどの書類棚が倒れ、書類と備品・雑貨・小物類に加え、倒れたり前面の戸が弾け飛んだ戸棚のガラス片や割れた食器類に植木鉢の土などが散乱した事務室と校長室から片付け作業開始。次いで、職員用メールボックスが倒れ、ショックでボックスのすべての蓋と中の書類とが吹き飛んでしまい、出入り口が塞がれた職員室通路などを通行可能なように片付け作業。

1月18日(水)

本日の出勤職員は50名。自宅が全半壊しているにもかかわらず出勤してくる職員も多い。出勤できない職員は交通途絶、自宅全半壊、近隣で危険物爆発などの恐れがあり避難勧告が出たなどの理由で遠方の実家や知己を頼って行ったり、避難先の施設で職員不足を補ってボランティア活動をしているなど次第に事情が判明。

本日より、9時と12時の職員会議を定例とする。職員室が半ばから崩れ、会議室も崩壊の危険があり、職員は出勤後に全体会議を中央廊下で行い、その後、緊急度の高い場所から学年単位の集団で応急対策や片付けなどの作業。

毎朝まず取りかかるのがトイレへの水の運搬。教職員のほか、断水で自宅のトイレを使用できない近隣の方も夜間などに使用されるのでこの作業は欠かせない。最初はグラウンド南の新池からバケツリレー式で運んだが、後には新池に注ぐ小川からポンプアップした水を長いホースで繋ぎ、校庭に臨時に作ったビニール張りの即製小プールに溜込んで使用。

これはなかなかのアイデア。

大学への願書提出締切日の迫った生徒や卒業生が諸々の相談に電話してきたり、電話が通じないためか交通機

関も不通で道路事情も最悪の中、危険をおかして登校するものも多い。出勤できた担任団や進路指導部を中心に必死の対応をするが、大学との連絡も電話がなかなか通じない。職員の声や顔にも焦りと疲労の色。

1月19日（木）

出勤職員数49名。前日と同じく、まさに足の踏み場もないほどに書類棚・器材・書籍などが散乱した職員室・コンピュータールーム・理科や芸術など特別教室・図書館など校内各室の後片づけ作業と校内各所の危険箇所の応急処置。こうした作業はその後も連日継続。

1月20日（金）

相変わらず交通機関不通の中、明石から片道5時間要して車で出勤したり、神戸市最西部の垂水から自転車を飛ばしたり、避難先の奈良から電車を乗り継いで来る職員などもあり、出勤者も55名まで到達。職員会で明日の生徒召集（但し、登校できるもののみ）を決定し、その旨を電話連絡の他、避難所や主要駅などに職員が手分けして掲示。

3年学年団や進路指導部教員はセンター試験結果の集約とデーター収集など受験生徒へのケアにも奔走。

1月21日（土）

職員も大半が出勤。10時の生徒召集に備えて、グラウンドにクラス毎に机を並べ、必要な書類を揃えるなど準備をしている間にも生徒が続々と登校し、あちこちで友の無事を確認し合っただけの歓声。

本日の登校者は全生徒（1032名）の58%、無事を確認できたのは926名で89%。避難した生徒や家族のうち判明した数は322家族。担任たちは安否不明生徒の所在確認や連絡に懸命の奮闘。あちこちに散在する避難所巡りを徒歩とする者、バイクや自転車で走り回る者、かかりにくい電話にしがみつく者……。

学校よりの次回情報発信を1月27日とし、それに備えてテレホンサービス体制を復活、また、生徒用の通常連絡網が機能しないので特別連絡網を作成。

1月23日（月）

本日より毎日運営協議会を開催。職員会議はすでに毎日2回が定例化。

期日が迫っていた3年生の後期期末考査は中止と決定。

1月24日（火）

職員は自宅に戻れず遠隔地に避難している数名を除きほぼ出勤。避難所や電気・ガス・水道が不通の地域から出勤する職員も多い上に学校でもガスは出ず断水が継続。しかし、遠距離通勤する職員の夫人が連日数十人分の握り飯を作って超早期出勤する夫に託して届けて下さったり、同じく震災を免れた地域の職員からの差し入れの多量の材料を使って校内で携帯燃料による炊き出しをしたりの助け合いも始まり、束の間の休息を取る職員にもようやく笑顔が回復。

臨時休校が続く間も、教員は生徒の安否確認に懸命だったが、本日、事務室前に設置した全クラス生徒情報板の未確認欄がゼロになる。しかし、その間も、生徒の居所や連絡先などはしばしば変わり混乱は継続。

テレホン案内などを通じての学校からの生徒への連絡内容は以下の通り。

*休校継続 *進路相談を担当と密にとる *修学旅行中止 *転校などの相談受付 *住居変更の届出 *PTA同和研修（新谷英子さんの一人芝居）中止等。以上の情報を新聞・テレビにも配布。

職員の日課は、3年担任団は生徒個々の進路検討会を開くなど進路関係中心で、他はグループ毎に器物・器材・書類が散乱した校内整理。床が急傾斜したり、天井に文字通り手が届くような危険箇所もヘルメット着用で着手。県教育委員会より入試日程変更通知。

1月27日（金）

職員会議で校長より校舎被害状況についての西宮市教育委員会の一次調査結果発表。それによると、A. B.

C棟校舎は使用不可能で、直ちに第一次仮設校舎（40教室）建設に着工、2月末に完成予定。

外部の会議により得た情報では、市内南部の高校は被害が少なく休校措置を解除し、自主登校あるいは授業再開している学校もある様子。比較的被害が大きい北部地区にあってもやはり本校の被害が最大の模様。

本日より3日かかりで生徒の震災被害を再調査の結果、以下の数字が判明。

本人の安否 死亡 0 同負傷 1

家族の安否 両親共死亡 1 父のみ死亡 0 母のみ死亡 2 その他の家族死亡 7
同居家族負傷 13

住居全壊 57 半壊 172 避難所等に避難生活を送る生徒数 313

※ 住居関係被害は、この段階での生徒申告によるもので、その後の調査で拡大

1月29日（日）

本日の朝刊は、市内公立学校園の大部分が「明日から授業再開」と報じている。本校も、授業再開への思いは募るが、校舎の大半、特に教室の全部が市教育委員会から使用禁止の指示を受けている現状では如何ともしがたい。運営協議会でも、限られた条件下での授業再開に向けて可能な方策を検討していたが、良策もなし。

S衆議院議員、本校の被害状況視察。国会議員の視察も学校再建に対して長期的・全体的に支援を得られ有り難い。それとともに、震災直後から日本はおろか世界の有縁無縁の人々から本校への激励や見舞いの電話、手紙、あるいは心温まる品々まで送ってきて頂いている。今日も休日にも拘らず、遠方の職員が奥さんや小学生の皆さんまで動員して重い慰問の品を背に電車を乗り継いで来られたり、旧職員が数十キロの飲料水を阪急北口駅から文字通り肩に担いで慰問に来られたり……こうした有形無形の励ましが職員の志気を大いに高揚。

理数コース志願者受付も近いが、日曜日のためか、学校の状態を自分の目で確かめに来られたり、今後の見通しを聞きに来る受験希望者や保護者が結構ある。震災の被害が本校志望者に悪影響を与えないことを祈念。

1月30日（月）

運営協議会および職員会で以下のことを決定。

* 休校を暫く継続するが、その期間中も毎水曜日に1・2年生を登校させ、教科毎に課題を課し回収・点検する。

* 被害の少ない食堂または図書館を学習場所として1・2年生の自主登校生徒に提供し、教員も交替でその場に詰めて質問等を受ける。 * 3年生については、担任がきめ細かく連絡を継続する。 * 1・2年生の後期期末考査は実施する。

1月31日（火）

全壊して出入すら危険な進路指導室を図書館の一部に移転を決定。本校の進路指導の重要さを認識する全職員の協力で、本日に主要作業を行い、以後も担当者や3学年教師団で膨大な資料の移転と、生徒に利用可能ならしめるための作業を継続。

2月1日（水）

登校可能な生徒を召集。本日より学習課題を課し、教師が点検する。

保護者宛の文書（別紙1）を配布。内容は * 仮設校舎建設予定 * 当分の間、休校は続けるが、被害の少ない図書館を自主登校（1・2年生、各隔日）生徒に開放することなどを通知。

K党国会議員団、本校被害状況視察。

2月1日付け生徒被害調査（生徒総数1,032名）

本人の安否 死亡 0 同負傷 1

家族の安否 両親共死亡 1 父のみ死亡 0 母のみ死亡 2
妹死亡 1 祖父母死亡 7

自宅の被害 無事 733 半壊 192 全壊 62

※ 家屋被害の数字に付いては未確認も多く、また公式認定ではなく生徒の自主による申告のため今後も増大の可能性大

2月2日(木)

生徒が教室等に残置している副教材や文具・体育時用トレシャツや靴類を生徒の手で校舎外に持ち出させることは危険と考え、職員の手で整理。登校した生徒に引き渡せるように、各学年毎に、全教員でリレー式に比較的安全な場所に搬送。

2月6日(月)

P T A総務会開催。総務役員の中にも死亡者が1名あったほか、ほとんど全員の家屋に大小の被害を受けた中、震災後は初めての会合。会合前に(室内の倒れた書類棚などは職員の手で起こしてあったが)、散乱した書類や割れた湯呑み類、その他床に広がった雑多な物品の整理。

2月10日(金)

理数コース入試願書受け付け締切。定員40名に対し、出願者59名で、校舎の被害が与える影響を心配していた教職員も一応の安堵。

2月15日(水)

本日より部分的ながら授業再開。とにもかくにも生徒への義務と責任が果たせる喜びが職員の表情にも窺える。およそ1カ月に及ぶ休校の後だけに、生徒達も登校し授業を受ける「普通の学校生活」を渴望していたことだろう。ただし、教室は使用不可のため、被害の少ない小講堂での一斉授業。それも、万一に備え、避難誘導用のホイッスルやハンドマイクを何時でも使えるように用意の上。

食堂の営業も不可能のため本日は1年生のみ午前中一斉授業。2年生は自主登校し図書室で学習。

17日より全校生徒を対象に教育活動再開を決定し、保護者に通知(別紙2)。但し、1・2年生を隔日毎に午前の部・午後の部に分けた二部授業。

2月16日(木)

午前中、2年生一斉授業。1年生は自主登校し図書室で学習。

職員会に続いて、成績・卒業判定会議。

2月17日(金)

本日より全面的に教育活動再開。午前中は2年生、午後1年生の授業。

2月19日(日)

文部省より委嘱された「日本建築学会調査団」一行10余名が本校の被災調査に来校(一行の調査は21日まで継続)。その後も、市教育委員会委嘱の調査団や大学建築学関係者など多くの調査団が来校し綿密な調査。本校の被害甚大を再確認。

2月20日(月)

午前中、3年生登校。3年生は、震災後初めての全体登校。彼ら彼女らは、センター試験自己採点終了の翌日に阪神大震災に見舞われ、震災の中で命を守り、大半の者はその後の大混乱の中で受験に立ち向かい、また、一部進路の決定していた者はもちろん受験を控える者も健気にボランティアとして地域に奉仕。

3週間ほどお互いに顔を合わせる機会がなかった生徒達は、まるで十数年ぶりの親友との再会かのようにあちこちで手を握り合い、歓声をあげる。この3週間は、彼ら彼女らの想いでは十数年の時間に相当か。

2月22日（水）

理数コース適性検査無事終了。例年と異なり、使用可能な施設が図書館など限られるため職員一同の心配も大きかっただけに無事終了の合図に緊張が解けて安堵。

2月26日（日）

休日にもかかわらず、3年生担任団有志と卒業予定生有志が登校し、47回卒業生一同より学校へ贈る石造記念品（日時計）が仮置きされている周囲に花壇を手作り。その場所は、やがて行われる校舎解体に際し真っ先に移転しなければならないと知りながら「明日の除幕式だけでも花で美しく囲んでやりたいから……」と黙々と勤労奉仕。それは、母校が全壊し、街全体が壊れた家屋や瓦礫で覆われている今回の大震災の中で巣立っていく卒業生への教師の深い愛情。

2月28日（火）

第47回卒業証書授与式挙行。来賓も招くことが出来ないうえに余震の危険も去らない本校での実施に対しては不本意な気もするが、市内公共施設の借用が避難者の問題などで不可能なこともあり、さらにこうした非常時こそ3年間学んだ母校で卒業させたいとの学年教師団の思いがあり、教師団の心を込めて紅白の幕で精一杯飾った本校小講堂で実施。

定員480名の部屋であるだけに、卒業生（354名）と在校生及び保護者代表、それに中学校来賓も代表だけに制限しての例年より規模を縮小した式典であったが、卒業する者、送る者、各々に思い万感。

この未曾有の混乱の中で高校生活の最終コーナーを終えた卒業生たちは、その中に秘めていたエネルギーを発揮し、それぞれの進路で大きな成果を獲得。

3月1日（水）

特別教室などを後回しにしての必要最小限ながらも、冷暖房を備えた仮設校舎が突貫工事で予定通り完成。早速、机・椅子や必要な備品類を搬入。明日から平常授業が可能。なお、仮設校舎が完全に完成するのは夏季休業前の予定。

いずれにしても、大震災直後の、資金・資材・人手・時間と、すべてが不足する中での迅速な対応をしていただいた市教育委員会の努力に感謝。

【追記】

この度の阪神・淡路大震災にもかかわらず、千百余名にのぼる生徒や教職員に（怪我をした人はあったが）一人の死者も出なかったことはまさに僥倖としか言いようがない。

しかし、本校関係者でも両親を始めとしたご家族を失った人も二桁を数え、家屋に至っては全半壊や焼失の被害を受け、まさに塗炭の苦しみを経験した人は数え切れない。幸い、そうした直接の被害を免れた人も、それは紙一重の僥倖によるものであり、また、親類や知人にまで範囲を広げるなら、人的に物的に被害を受けなかった人など皆無と言ってよいだろう。まして、精神的打撃や電気・ガス・水道・交通機関不通などに伴う生活の混乱については、程度の差はあっても、全員が大きな苦しみを味わった。

とにかく、今回の大震災に際しては、本校関係に限っても、生徒と教職員の数だけのトラジディがあり、ドラマが存在した。

そうした中で、教職員・生徒が一丸になって、「学校再開」にむけての努力が行われ、続けられた。今回の拙文「震災日誌抄」は、そうした教職員と生徒による校舎全壊から授業再開・仮設校舎完成までの歩みを出来るだけ客観的に書くつもりで始めた。しかし、出来上がった文は、客観的とは言えず、視野も文字通りの管見になってしまった。

それでも、当時の学校の雰囲気的一端は書き残せたと思う。

本来は、こうした文章は（そうしたことがあってはならないが）、万一、再度の大災害などに遭遇したとき、適切に対処するための「危機管理」のマニュアルであるべきかも知れない。だが、それは今回のテーマとはせず、震災を体験した人がそれぞれに自分の頭と心と身体の中に会得していると思い、また、信じたい。

平成 7 (1995) 年 2 月 1 日

1・2 年生の保護者の皆様へ

西宮市立西宮高等学校
校長 大 森 良 剛

阪神大震災に伴う休校について（お知らせ）

1 月 17 日早朝に発生した阪神大地震は、甚大なる被害をもたらしました。その後皆様いかがお過ごしかと案じております。1032 名の生徒は全員無事であったことを何よりも喜ばしく思います。しかし、保護者で 4 人、兄弟で 1 人、この地震で亡くなられたことは深い悲しみであります。生徒の家も全壊・半壊合わせ 3 割弱に及び、不自由な生活を強いられていることとお察し申し上げます。教職員の方は 1 名のけが人がでしたが、そのほかは家族共々無事であり、安堵しております。21 日の招集日には、亡くなられた方々のご冥福を祈って、全員で黙祷を捧げました。

さて、本校の校舎も大きな被害を受け、余震が続く中で危険が予想されますので、17 日以降休校を続けてまいりました。地震予知連絡会も今後マグニチュード 6.0 程度の余震がありうるとの見解を示していることもあり、西宮市教育委員会としても安全という観点から、現校舎の建て替えの方向で検討に入っています。したがって、その間仮設校舎で凌ぐこととし、去る 1 月末から工事に入っています。この工事は突貫工事をしても約 1 カ月かかるとのことであります。現時点では 2 月末まで引続き休校とせざるを得ない状況にあります。

しかし、その間家庭学習を続けてもらいたいので、本日生徒を招集し、学習課題を課しました。今後とも定期的に指示・指導をいたしますので、招集日には可能な限り登校させてください。また、本校校舎の中で、比較的損傷の少ない食堂・図書館・小講堂のある C 棟を、自宅の損傷により学習場所を失った生徒諸君に開放したいと思います。

年間計画として 3 月 1 日から後期期末考查を予定していますが、多少日程がずれても実施する予定ですので、今後担任の指示をよく聞くようにしてください。

なお、登校する際は制服着用とし、通学路の安全確保について各自で十分注意をしてもらいたいと思います。

最後に、余震が続き、断水も続いているような事態でもあり、生徒の安全を第一に考えての措置でありますので、休校を継続することをご理解ご了承くださいようお願いいたします。

記

1 学習場所がなくて困っている生徒への図書館等の開放日

1 年生 月・水・金曜日の 9:30～12:00
2 年生 火・木・土曜日の 9:30～12:00

なお、質問のある生徒も上記の曜日に登校して指導を受けてください。

2 2 月 1 日の次の招集日は、2 月 8 日（水）の 10:00

3 今後も、学校からの連絡は、① 1 月 21 日の招集日に決めた学級毎の連絡網または②テレホンサービス（電話番号 72-0124）を利用してください。

平成 7 (1995) 年 2 月 15 日

1・2 年生の保護者の皆様へ

西宮市立西宮高等学校
校長 大 森 良 剛

教育活動の再開について（お知らせ）

2月1日付文書でもお知らせしましたように、阪神大震災発生以来本校は休校を続けながらも、2月1日の第2回目登校日から学習課題を課し、指導してまいりました。その間、街の復興も徐々に進みつつありますし、阪急今津線の復旧もなりました。また、近く学校の水道も一部復旧する見通しです。

つきましては、2月15日の1年生の登校日、16日の2年生の登校日をもって本校教育活動の再開といたします。17日以降は使用可能な小講堂と図書館を使って学年単位の学習活動を、午前と午後の二部授業のかたちで下記の日程で行います。

なお、これは、仮設教室が使用可能となれば、そこでの通常の授業に切り替えますので、それまでの暫定措置であります。また、2月22日の理数コースの適性検査、3月16日の学力検査当日は登校禁止とします。

記

〈午前の部〉	9 : 20	出席点呼
	9 : 30 ~ 10 : 35	1 時間目 (65 分授業)
	10 : 50 ~ 11 : 55	2 時間目 (65 分授業)
〈午後の部〉	12 : 50	出席点呼
	13 : 00 ~ 14 : 05	1 時間目 (65 分授業)
	14 : 20 ~ 15 : 25	2 時間目 (65 分授業)

注 1 授業科目、午前・午後の学年の指定等については、別途生徒に直接指示します。

注 2 登校日は制服を着用するものとします。制服の追加購入の必要な場合は業者が学校へ配達してくれますから利用してください。

兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の概要

地学科 川瀬信一・田村昌弘

平成7年（1995年）1月17日午前5時46分、淡路島北端付近（北緯34.6° 東経135.1°）の地下14kmを震源とするマグニチュード(M)7.2の地震が発生した。六甲活断層系の活動による内陸直下型地震であった。（図1,図2,図3） 淡路島北部には破壊面が地表まで達する地震断層が野島断層上に長さ10kmにわたって出現し、北淡町平林付近では最大で水平方向に2.1m、同じく上下方向に1.2mの変位が見られ、右横ずれで東側が上昇していた。神戸側では地表には現れず、深さ1~2kmの所で止まったと考えられる。本震で動いた破壊面は南西方向には野島断層に沿って長さ約15kmほど、北東方向には須磨断層や諏訪山断層の下に長さ約30km程、上下方向には地表から深さは15kmくらいの鉛直な長方形であった。その後数多く発生した余震域と一致する。西宮市立西宮高等学校は震央から約33km離れているから、北東方向の破壊面の端に位置する。

神戸側では、従来から知られていた活断層の位置と特に被害のひどかった地域とがずれている。西宮市内を通る活断層として主なものをあげると北から有馬-高槻構造線（六甲衝上断層）、五助橋断層、芦屋断層、甲陽断層、伊丹断層があるが、いずれも地表部で大きな変位は見られない。市内では震度7（激震）の地域は、神戸-芦屋方面から帯状につづく西部地域と、それとは別にほぼ中央部を今津から仁川まで南北に点々と三カ所に分かれて存在する地域とがある。（図4） 前者は未知の伏在断層が活動したという説と地震波が六甲山の堅い岩盤にぶつかりはねかえって増幅する「なぎさ現象」が生じたという説とがある。また、後者はいずれも武庫川水系の過去の河床の位置と関係すると思われる。本校は震度6の地域とされるが、校区には震度7の地域もあり、多くの生徒、保護者、教職員が大きな被害を受けた。

本校A棟東側の大きな損傷（座屈現象）について、当初未知の断層の活動によるという考え（図5）と、また池を埋め立てたための地盤の堅さに違いによるという考え（図8）とがあった。しかし、関西大学のグループがボーリング調査などをして調べたところ断層は見つからず、後者の理由による不同沈下や液状化による土の流動が破壊につながったことを確認し、同年12月に報告している。（図6）

今回の地震は予知されなかった。前日の16日18時28分明石海峡で、前震としてM3.6（神戸で震度1）が発生、続いて18時49分（M2.5）、18時55分（M1.5）、23時49分（M2.1）がほぼ同じ位置で発生している。しかし、この時点で後に起こる大地震を予知できるかは疑問である。結果として前震といえるのであって、この地域では過去16年間にM1.5を越える地震が78個あり、うちM3.0を越える地震は6個起きているが、その後に大きな地震を伴っているわけではない。内陸の直下型地震はプレート境界部の巨大地震に比べて予知が難しいとされるが、前兆現象として報告されているものの中には今後、予知につながる可能性のあるものも少なくない。元本校教頭済川要先生（理学博士、スミカワ研究所代表）は長年「宮水」の研究をされているが、平成6（1994）年から市内産所町で調査を始めた地下水中のラドン濃度が地震の10日ほど前から急上昇し、直前に急激に減少するという変化を見つけられた。済川先生は広島大学と岐阜大学のグループと共同で研究され調査結果は地震予知連絡会でも報告され、地震予知に結びつくものとして注目され、また期待されてい

る。(図8)

平成8(1996)年1月31日現在、この地震の最大余震としてはM4.9のものが4回記録されている。平成7年1月17日5時50分、同5時53分、同7時38分、および2月18日21時37分にそれぞれ発生している。しかし、これらが確実に最大余震といえるかは、今後の経過を待たなくてはならない。1926年以降のM7.0以上の内陸地震6個のデータをみると、時間差3000日以内つまり8年以内に、しかも震源からの距離50km以内で、M6.5前後の地震(広義の余震)を伴ったものが5回ある。よって、まだ数年間はM6.0程度の余震に対する注意が必要である。

参考文献

毎日ムック 阪神大震災全記録 1995.4.8 毎日新聞社
科学朝日 緊急増刊1995.3 地震最前線 朝日新聞社
月刊地球 号外 No13,1995 1995年兵庫県南部地震 海洋出版株式会社
理科年表 平成8年 1996 丸善
活動期に入った地震列島 尾池和夫 岩波書店

図のタイトル

- 図1 各地の震度
- 図2 気象庁神戸海洋気象台の強震計の記録
- 図3 余震活動(気象庁)
- 図4 本震直後の余震の震央分布と震度7の地域の分布および活断層
- 図5 読売新聞 1995年(平成7年)2月8日
- 図6 読売新聞 1995年(平成7年)12月22日
- 図7 読売新聞 1995年(平成7年)1月29日
- 図8 読売新聞 1995年(平成7年)2月2日

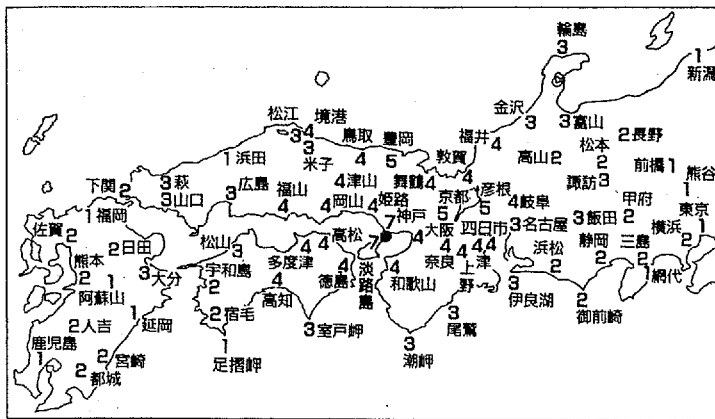


図1
「阪神大震災各地の震度」

図2
「気象庁神戸海洋気象台
の強震計の記録」

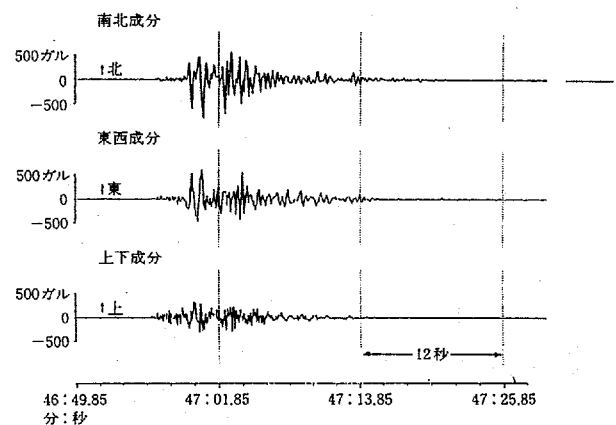


図3 「余震活動」

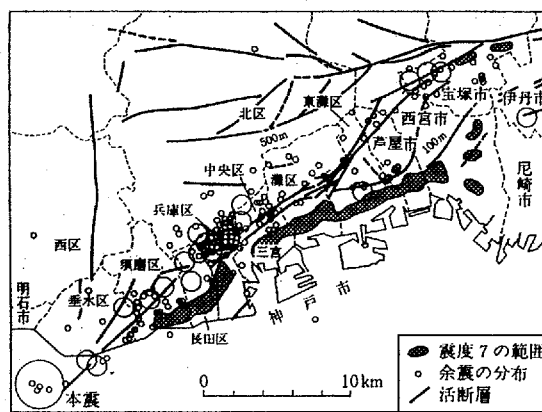
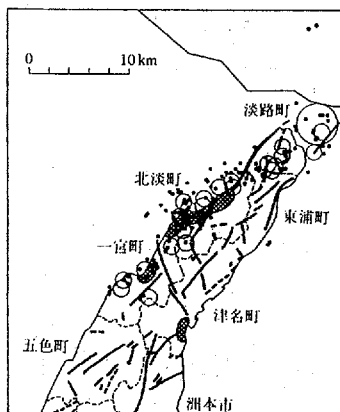
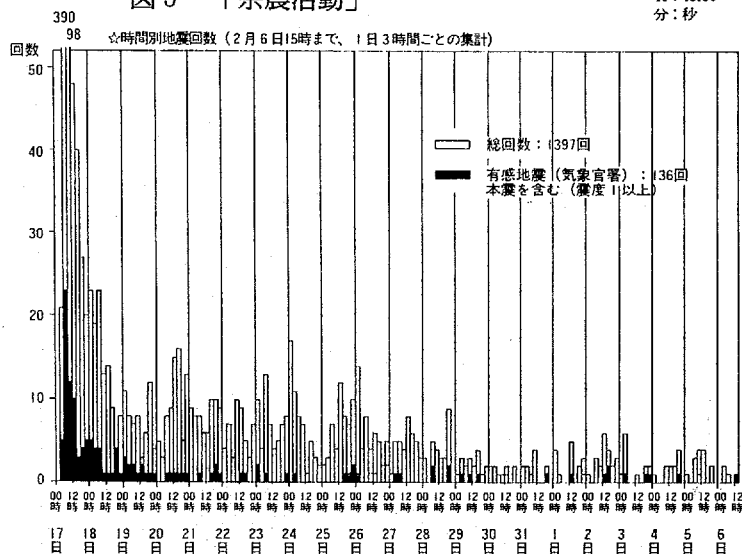


図4 左「震央分布」 右「震度7の地域の分布と活断層」

図6 1995.12.22 読売新聞

埋め立て地盤沈下ズレ

関大グループが調査

阪神大震災で校舎が崩壊した西宮市の市立西宮高校を継承した関西大の隣下池地震基礎地質研究所グループ(代表 西田 一彦・工學部教授)は、ため池の埋め立て地など、地盤が急変した場所について、地盤で不同沈下や液状化による土の流動が起き、破壊につながったことを確認している。

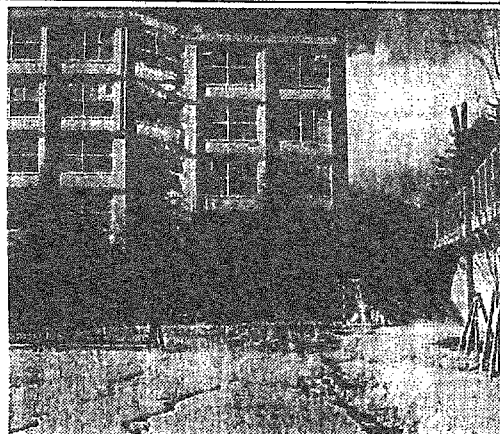
東と西で10^{メートル}以上

どの軟弱帯、この下は比較的
的地盤のしっかりした四百
千年以前の地層。東側ほど
軟らかい層が薄く、東端は
埋め立て土のない地山の部
分とわかった。

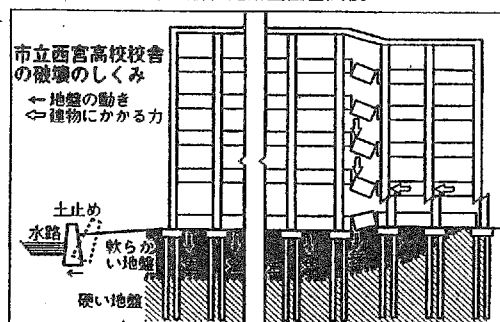
四、五層間隙で打ち込ま
れた蒸気機（深さ八尺）を
掘り調べると、東側の杭三
本と比べ、西側の杭の位置
が深く、西側の地盤が十丈
以上不同沈下。校舎西側を
流れる水路の壁は西側に二
尺も押し出されていた。

・工学部教授は「阪神間は埋め立て地をはじめ地盤が急変する場所が多い。建築物の配置を十分考慮、地盤改良や杭の強化などを行う必要がある」として

ループは地震動で西側の面が縦に埋め立て地盤が大きく沈下、堤防の杭と上部の壁が上動、破壊されたものが地下水面より深い砂層が液状化し、滑り面となり、歐らから古水跡のある西側に押し出される側方流動が起きる。右端の柱は、しわ寄せとして水平の力が働きます。上部が崩れたと分析した。



地盤の動きの影響で校舎東側部分が崩れた市立西宮高校



未知の関連断層動く？

西芦屋―甲陽断層南東に大被害

山陽新幹線 阪神線との間の落石を防止、車庫置屋から西宮市東部にかけての阪神大震災の被害が南
西・北東に走る線路上に並んでいることが、応用地質学会関西支部、関西地質家協会の七日までの合同調査
でわかった。六甲山系東部、中陽断層の南東約五十キロに並んでおり、並行して走る未知の関連断層が動い
た可能性も考えられるとしている。

[illegible]

えられる。ラインの南西方向は西宮南部から高塚川流注部に延び、北東方向は明陽園と離れ気味になっているが武庫川川地に続いている。西の地区は用土等の植物被害や瘻穴化調査でわかっていた。一方、明陽園の明土では自立した被害の分布



この被害ラインについてはなかつた。

て、応用化学会関西支部長の藤田忠・大阪大学教授は「中陽断層から枝分かれした断層が動いたことが考えられる。あるいは地下深くに走む中陽断層の動きが地表に現れる時、上を覆った地層や地層の影響を受けた、真上でなく、ずれた形で出た可能性もある」と説明している。

西宮市のラドン濃度

阪神大震災

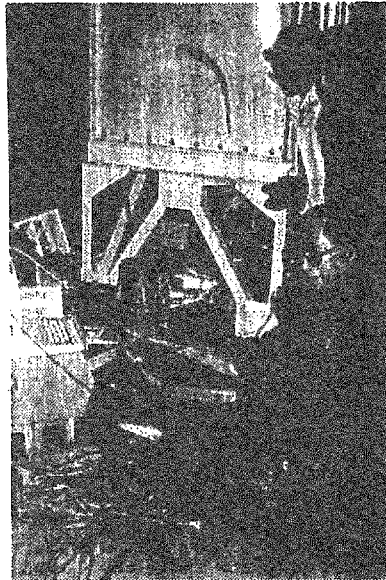


図8
1995.2.2.
読売新聞

急激なラドンの濃度変化を検出した地下水を調べる津川さん（手前）＝スミカワ研究所で

直前、20倍に急増

震源近くの地下水調査 前兆現象と確認

阪神大震災直前の今月上旬、兵庫県西宮市内で地下水のラドン濃度が急激に平常の二倍にも達していたことが二十八日、同市の民間研究所と広島、岐阜両大学の共同研究で明らかになった。調査結果は、地震予知連絡会の会合でも報告された。地震前のラドン濃度変化は、国内で伊豆大島近海沖地震（一九七八年）など三例で確認されているが、今回のように震源のすぐ近くで観測されたのは初例。専門家は「地震の前兆現象として、予知研究に極めて貴重なデータになる」としている。

地下水を調査したのは、十月二十七日から連続的に西宮市福所町で井の掘削工にラドン濃度を測定した。当初は一、四当たり二十に増え、三十一に達したが、徐々に増加。十一月末に約二百になり、その水が地表で湧き出た。一月八日に急増して最高値の約四百に達し、その後急激に減少した。

このように、いったん急増したラドン濃度が、平常の値に戻った段階で地震が起きたパターンは、福井県沖地震（八七年）、岐阜沖地震（九一年）でも報告されているという。

ラドンは放射線の希ガスで、水に溶けて移動しやすいため、地層にひずみが生じると濃度が変化する現象が知られており、前兆現象として、約四十年前から旧ソ連、中国などで研究が進められてきた。日本でも、地下水位や水漏れ、地盤沈下などとも重要な観測項目として注目されている。

ラドン濃度は、地下水の流れなどの研究にも利用され、約五年前に岐阜大教育学部が自動連続測定装置を開発。津川代表がこの装置を導入、検出した結果を広島大学理学部が分析した。

震源近くの地下水調査 前兆現象と確認

このように、いったん急増したラドン濃度が、平常の値に戻った段階で地震が起きたパターンは、福井県沖地震（八七年）、岐阜沖地震（九一年）でも報告されているという。

ラドンは放射線の希ガスで、水に溶けて移動しやすいため、地層にひずみが生じると濃度が変化する現象が知られており、前兆現象として、約四十年前から旧ソ連、中国などで研究が進められてきた。日本でも、地下水位や水漏れ、地盤沈下などとも重要な観測項目として注目されている。

ラドン濃度は、地下水の流れなどの研究にも利用され、約五年前に岐阜大教育学部が自動連続測定装置を開発。津川代表がこの装置を導入、検出した結果を広島大学理学部が分析した。

グラウンドに亀裂 地盤の硬さに違い

市立西宮高 阪神大震災で兵庫県西宮市の市立西宮高校のグラウンドに最大五センチもの亀裂が走り、亀裂を境に液状化と座屈現象が同時に起きていることがわかった。亀裂は学校全体を切り裂くように南北三百メートルにわたり縦断、弾火線のような不気味な姿を呈している。

西側のグラウンドが液状化して沈下、硬い地盤の東側の校舎二階部分だけが東側の校舎二階部分だけが

液状化と座屈現象同時に

べしやんこにつぶれたのめ立てるなどして建設地盤の硬いところと軟らかい部分とにまたがって建てたため、こうした現象が起きたらしい。

本校校区のそれぞれの地域の被害の実態

地学科課題－生徒作文より－

これは、地学科が生徒に課したレポートの生徒の生の声の記録である。

生徒の生の声をそのまま記録している。

(表)

地学科より第1学年生徒諸君へ

1995. 5

この度の震災により、物心両面にわたり多大の被害を被った生徒諸君、心からお見舞いいたします。震災によって計り知れない不幸にみまわれた者にとっては思い出すのも辛い出来事だと思います。

しかし、この想像もしなかった震災を経験したものにとって、記憶をより正確なものにするために、記憶の新しいうちに整理しておくことが必要だと思います。

また、同様にこの震災により大きな災難にみまわれた西宮市立西宮高等学校の地学科としても、生徒一人一人の記録を収集し、後世に伝え、また授業に生かすことはたいへん大事なことです。

したがって、この課題提出については、強制はしませんが、主旨を理解の上、できるだけ多くの者が正確なレポートを提出してくれることを望みます。

地学科特別課題

1995(平成7)年1月17日(火)午前5時46分に淡路島を震源としてマグニチュード(M)7.2の兵庫県南部地震(阪神大震災)が発生した。この地震についてあなたの行動を記録しておこう。また、今回の地震に関する新聞・雑誌の記事を収集し、保存しておくとういだろう。

あなたはどこで、どのような事態におちいり、どのように感じ、判断し、行動したかについての記録をレポートにまとめ、提出しなさい。

まとめるポイントは次の項目に分けよう。

- ① 地震発生時、地面が揺れている間……詳しく
- ② 揺れがおさまった直後……詳しく
- ③ 夜明けまでの間……詳しく
- ④ 夜明け後その日1日について……おおまかに

1年 組 番

(裏)

西宮市内の揺れ方(揺れの感じ方)の細かい分布から今回の地震の特徴や傾向を少しでも明らかにできればと思っています。データの補充をしたいので以下の項目について答えて下さい。また、前兆現象についても答えて下さい。

- I 建物は木造ですか。コンクリート造りですか？(木造・コンクリート造り)
- II 地震発生時にいたのは何階建ての何階ですか？(階建ての 階)
- III 畳の部屋ですか、フローリングですか？(畳・フローリング)
- IV 地震が起こる前から目が覚めていましたか？(覚めていた・地震で覚めた)
- V 寝床にいた人に聞きます。ベッドですか？(ベッド・違う)
〔2段ベッドの人は上段か下段かも答えて下さい〕(上段・下段)
- VI 寝床から出ていた(起きあがっていた)人に聞きます。
地震が起きたとき、何をしていましたか？
()
- VII 上下動を感じましたか？(はね上げられるような強い上下動を感じた・
それほど強くはないが上下動を感じた・
ほとんど上下動を感じなかった)
- VIII 家具の倒れ方に特徴がありましたか？
(特にない・東西方向に多く倒れている・南北方向に多く倒れている)
- IX 前兆現象と思われるものがありましたか。あれば具体的に書いて下さい。

高座町	24
愛宕山	25
大社町	26
一ヶ谷町	26
五月ヶ丘	27
新甲陽町	27
甲陽園目神山町	27
上ヶ原三番町	27
上ヶ原四番町	27
上ヶ原八番町	28
上ヶ原十番町	28
神呪町	28
門戸西町	28
門戸東町	29
門戸岡田町	30
門戸荘	30
能登町	31
丸橋町	32
甲風園3丁目	32
森下町	32
北口町	33
伏原町	33
野間町	33
林田町	33
門前町	34
若山町	34
樋ノ口町1丁目	34
樋ノ口町2丁目	35
下大市東町	36
下大市西町	36
上大市1丁目	36
上大市2丁目	37
上大市3丁目	37
上大市4丁目	37
上大市5丁目	38
段上町1丁目	38
段上町3丁目	39

段上町8丁目	40
田近野町	40
仁川町3丁目	41
仁川町6丁目	41
屋敷町	41
川東町	41
宝生が丘1丁目	41
宝生ヶ丘2丁目	42
生瀬東町	42
生瀬町1丁目	43
生瀬町2丁目	43
生瀬高台	43
花の峯	44
青葉台2丁目	44
清瀬台	45
東山台2丁目	45
名塩	45
山口町	45

高座町

【男】下から突き上げるような衝撃とともに、朝早く目が覚めた。上体を起こすとすでに横に強烈な揺れを感じ、それと同時に家族の叫び声、そしてタンスや食器棚の倒れるものすごい音が耳の中に入ってきた。そして警報ベルの音が響きわたった。揺れがしずまらない内に自分の部屋を飛び出した。廊下に出ると水の出ている音が聞こえ、とりあえず止めようと台所に向かった。台所では次々と食器が落ちて、冷蔵庫の中身もほとんど出てしまった。止めようと思ったが、手がつけられなかった。⇒ 揺れがおさまった後、冷静に辺りを見渡した。自分の目を疑った。昨日まで綺麗だったリビングルームが、全てきちんと収納されていた食器、スプレー、本、洋服、ありとあらゆるものが、たった一瞬のうちに。僕は自分に、これはひどい悪夢だ、夢なんだと言い聞かせようとしていたが、辺りを見る度にこれが現実なんだと思い知らされた。とにかく夜のかすかな光しかないので、懐中電灯をつけ、ラジオを探し、今さっきの地震でどうなっているのか聞こうとした。そのとき、窓の外ではすでに煙が立ち上り、火の手が上がっていた。

【女】父が仕事でいなかったのも、母と私が和室で寝ていたとき、地震が起こった。縦に揺れててすぐに頭をかばった。そのときは真っ暗で何かわからなかったが、和ダンスの二段になっている上の方が倒れてきて下敷きになった。⇒ 姉と兄の声が聞けたので一応安心した。母と私は動けないので助けを求めたが、真っ暗で何も見えず、水槽も割れていたので水浸しで通ることができなかった。私はタンスの隙間があったので、なんとか抜け出し、姉と二人でタンスを持ち上げ、そこから母を助けた。懐中電灯を探し出し、上にはおるものを着て、市西に逃げようとした時、父から電話がかかってきた。みんなの無事を知らせ、逃げた。

【女】自分は半分眠っていた。夢かと思った。けど体ですごい揺れを感じた。すごかった。眠っているながらも布団にしがみついていた。それ以上は半分眠っていたのでよくわからないが、母が言うには上に飛んだらしい。そして物が倒れる音、皿が壊れる音がしたらしい。らしいとしかわからない。⇒ 母が安否確認というか、生きてるか確かめに来たとき、やっと本当に目が覚めた。起こされなかったら眠り続けていたと思う。そして地震が起こったことを確信した。

【女】発生する前に柱や壁、ガラス戸に“ドーン”と音が聞こえて、その後すぐに激しく横に揺れた。幸い私はじっと横になってベッドで布団にくるまっていたので、けがはなかった。本棚が上からドサッと倒れてくるのや、上に掛けていた時計が飛ぶように落ちてきたのが恐ろしかった。地面が揺れているのと同時に、向こうのダイニングの方で、食器類などほとんど割れていくのが一番恐怖だった。⇒ 揺れがおさまると停電のため、すぐに懐中電灯を探し始めた。辺り一面床にはガラスの破片が部屋の隅まで落ちているのでスリッパや靴をはいて行動した。懐中電灯は見つかったのだが、肝心の携帯ラジオがなかったので、停電中情報など何も分からないままだった。各部屋を見ると妹の部屋は家具が全部倒れており、部屋は殺風景だった。台所は冷蔵庫の中身がほとんど床に落ちていたり、戸棚の中身も全部落ちていたので、もう足の踏み場もなく、むちゃくちゃに荒れていた。

【女】私は寝ていて、最初の揺れで目が覚めた。その瞬間は「どうせ小さい地震だろう」と思い、布団を頭からかぶった。それと同時に体全体が左右に揺すられ、ベッドから振り落とされそうになった。かぶった布団の上に、物が次々に落ちてくるのがわかった。「何だ、これは!？」という感じで、怖いというより、わけがわからなくなった。この時、「逃げよう」と考えることもできず、ただ揺れがおさまるのを、布団の中でじっと待っていた。(すごい音がしたとは思うけど、私には聞こえなかった。)⇒ 何がなんかわからず、しばらく布団の中で動けなかった。自分では気付かなかったが、緊張していたのか、呼吸が速くなっていた。すぐに親が私の部屋に入ってきた。私は布団をめくって部屋を出ようとしたが、まず、その真っ暗さに驚いた。だから部屋もまわりもどんな状況か予想もつかなかった。何時かも分からなかった。窓の外を見ると、真っ暗な中に遠く煙が上がっているのが見えた。「これはただごとじゃないのかも」と初めて思った。

【女】私はそのときまだ寝ていたのではじめは夢の中でジェットコースターに乗っているのかと思いました。でもこの揺れが本当だと分かったとき、(私はベッドの Spredd がばねになっていて、かなり激しく上下に揺れていました。)何か落ちてくるのかもしれないと思って布団をかぶりました。でも一回目の地震で部屋

の中のタンスなども全て倒れていて、後からは何も落ちてきませんでした。しばらく余震が続いていたときは、(姉と一緒に部屋に寝ていたので) 姉と少し話をしました。⇒ まず電気が付かなくて暗いので、懐中電灯を持ってこようとしたのですが、この部屋にはなかったもので、しかたがなく、暗い中で服を着替えました。(その前に父の安否を確認する声が聞こえたので、返事をしました。) 朝で寒かったのでできるだけそこにあったものを重ね着して、沢山着ました。それから破片などが落ちている可能性があるので、靴下を何枚か重ねてはくことにしました。ドアの前にあるものをかき分けて、隙間からやっと廊下に出ることができたのは、それから30分ぐらいしてからだと思います。

【女】グラッと大きい揺れで目が覚めた。その後、激しく大きい揺れが続くので布団で全身を覆った。何が起こったのか分からなかった。本棚が倒れて本が飛び出し、机の引き出しも落ちたが、揺れを感じている間、驚きと不安で耳に入ってくるはずの音が消えていた。その日の予定やこれからことが頭を駆け抜けた。一瞬死ぬかと思った。揺れの間いろんなことを考えていたけど、頭の中は真っ白だったという感じがある。死を考えても恐れはなかった。死ぬまでの苦しみは想像もできないぐらいだったから。⇒ 揺れが小さくなると不安が消えていって混乱も治まった。それとともに父の声が聞こえた。名前を叫んでいた。再び不安になった。返事をしたが、父には聞こえないらしく、また名前を叫んだ。不安がこみ上げて泣きなくなった。隣の部屋の姉が返事をしながら出てきた。私が叫んでも父には届かないようなのでリビングの方へ行こうとすると、じっとしているように言われた。姉に頼んで私の部屋で一緒に布団にくるまって待機していた。

【女】ドンという音がして下から突き上げられるような感じがして、その後すぐにすごい横揺れがあった。物が倒れる音や、ガラスの割れる音がしたのですぐに布団をかぶって、揺れがおさまるのをそのままじっと待った。⇒ 揺れがおさまった後、ゆっくり布団から出ると、真っ暗だったので電気を付けようとしたが付かなかった。真っ暗で怖かったが倒れている本棚や散らかっている本などをどうにか乗り越えて家族みんながいる部屋へ行った。すると、食器棚の食器が全て割れていた。テレビも落ちていた。

愛宕山

【男】まず、上下にドーンと揺れ、横に激しく20秒ぐらい揺れ、最後の方になると小さくこきざみになった。⇒ 揺れがおさまり、外を見ると、火が三つぐらいの場所に出ている。揺れがおさまった直後、シーンとしていた。

【女】家で寝ているとき、ステレオが足の近くに落ちてきた。自分が急に小さくなったように感じた。ガスなど消しに行けず、ただ、布団をかぶってました。⇒ カーテンを開けて着替えを済まし、ドアまでがガラスだらけだったので厚手の靴下をはきました。その間ずっと怖くて机のそばにいました。私たち一家はすぐ家を出ました。

【男】地震が発生し、僕はすぐ目が覚めた。真っ暗だったのでどっさに布団をかぶってじっとしていた。すると「バタン」とか「ガタン」とか「ガチャーン」とかというような何かが倒れたり、割れたり、つぶれたりするような音が聞こえた。はっきり言ってとても怖かった。⇒ おさまったと思ってから、辺りを見たが何も見えなかったのですぐに枕元のペンライトを取ろうとしたが、本棚が倒れていて、どこにあるか分からなかった。それから親父が来た。親父はカーテンを開け窓を開けてベランダから妹の部屋に行き妹を連れてきた。その間に母も僕の部屋に来ていた。窓を開けたとき、とてもガス臭かったのが印象的。余震がとても怖かった。

【男】ドンといっていきなりすさまじい揺れがきて、タンスが倒れてベッドに五月人形が飛んできた。ベッドの中でただ揺れがおさまるのを待ってうずくまっていた。⇒ 外に出て社宅の人と話していた。小学校に様子を見に行った。

【女】地震発生時、私は寝ていた。私は寝ぼけていたせいかわこれは夢だと思い、そのまま寝ていたらタンスが落ちてきて、タンスの下敷きになってしまった。それでも私は寝ていたようで、母の「早く出てきなさい。」という声で姉にタンスを持ち上げてもらって、そこから出た。⇒ テレビや食器棚は倒れて冷蔵庫の中身が出てしまって、そこら辺がぐちゃぐちゃになってしまった。前の日にきれいなコップを出したばかりだっ

たのに、全部割れてしまった。私の部屋は、さほどひどくなく、倒れている物はなかった。東西に置いているものは全て倒れていた。ある部屋は電気まで落ちていた。CDが一枚割れてしまった。家には所々物が当たって破れているところもあったけど住める状態だった。

【女】家で寝ているとき、下からドーンと突き上げるような感じがして横揺れが激しく続いた。横揺れが終わる頃、やっと地震だという事に気がついた。⇒ 父親が私の部屋に「大丈夫かー？」と助けにきて、頭からかぶっていた布団から出ると両側のタンスと本棚が倒れてきてその間に自分がいたことに気付いて大変なことになったと思った。そしてガラスが散らばる廊下を歩いて居間に家族が集まった。

【男】激しい揺れだったのですぐ目が覚めたけど、最初は何が起こっているか分からずそのままの状態でした。⇒ 安否の確認をして皆の所へ行こうとしたらガラスの破片でけがをした。その後僕はろうそくを持って懐中電灯と電池を自分の部屋に取りに行った。電気が通っていなかったのでラジオを聞いていた。しかし京都などの震度は分かってもこの辺の震度が全然分からなかった。

【女】1月17日（火）午前5時46分に私はクラブの朝練に行く準備をしようとベッドから起き上がろうとしているところでした。いきなりゴッゴッゴという大きな音がしてだんだん大きくなりそして家が揺れ初め、初めはゆっくりだったのに急に暗闇の中でガタガタと物が落ちてくるほどひどく揺れ、しばらく私はベッドにもぐりこんで過ごした。結構長かったような気がする。⇒ 揺れがおさまってからすぐに妹が「大丈夫？」と声をかけ、そしてまず部屋の電気がつくかどうか確認しました。電気がつかなかったので机の中に入れて置いた懐中電灯を取り出し、まず上の部屋にいるお父さん達の部屋に妹の手を握っていった。

【女】ベッドに寝ていたのでトランポリンの様に体がはねて起きられなかった。⇒ 懐中電灯、携帯電話、貴重品、防寒具を持って外に出た。自分の家の周りは瓦が落ちたり壁の一部が倒れる家しかなかったので「あー地震だったんだ。」としか思わなかった。車の中で親戚に電話をしたが通じなかった。

【男】布団の中でじっとしていた。何が起きたのかわけがわからなかった。ガラスの割れる音とかが聞こえた。⇒ ふすまがはずれていて本棚の本が散らばっていた。電灯をつけたがつかなかった。家族みんな無事か見に行った。

大 社 町

【女】午前5時46分、私は二階にある自分の部屋にいた。運良く目が覚めていて布団から出ようとした時だった。突然からだが何センチか浮き上がり、どすんと背中を打った。痛いと思った瞬間、洋服ダンスが倒れてきたのでとっさによけた。最初は寝ぼけていたせい、この揺れが“地震”ということさえも分からなかったし、恐怖感も全くなかった。その後やっと自分のおかれている事態を理解し、揺れがおさまるまで動いては行けないと判断して、ずっと布団をかぶってじっとしていた。今までにない恐怖を感じた。⇒ 一人でいたので家族の安否がとても気になったので、まず二階の父の部屋に行くとそこは私の部屋以上で、父ももう起きていて何かが当たったらしく頭から少し出血していた。私と父は一階に寝ている母と妹のことが心配だったので、一階に下りた。するとまた揺れだしたので、リビングの大きなテーブルの下に隠れた。母と妹は押入の中の物が落ちてきたとはいえ、けがもなく無事が確認できたので、私はとてもほっとした。私はこの時死という恐怖にとらわれながらも、案外冷静に物事を考えられたと思う。

一ヶ谷町

【女】地震発生の前日寝たのが午前3時ぐらいだったので、5時46分といえば本当に熟睡していた。目が覚めたのは地震の揺れではなくて、その揺れによってタンスから衣装ケースが私の顔の上に落ちてきたからだ。はじめは何で落ちてきたのかわからず、とりあえずそれをどけて、やっとはっきり目が覚めた。揺れていることはわかった。でもあまりにも激しい揺れで地震だと認識するのに時間がかかった。私は揺れている間はベッドの上に座って壁にしがみついていた。部屋は真っ暗で私一人でどうしようもなく怖かった。とにかく早くこの状態から解放されたいと思った。⇒ 部屋から出ようと思ったけど、ドアの前にタンスが倒れていて出られない。タンスは重くて起こせないし、そのときは一瞬閉じこめられた・・と思った。それからまた怖くなって寒気がして吐き気もした。体はふるえて力が入らず、いっそ泣いてしまおうかと思ったけれど、涙

は全く出てこなかった。それから家族の声がして、私は初めてこんなに怖い思いをしたのは自分だけではないということに気がついて幾分か安心した。閉じこめられたと思ったのは早とちりで、ベランダから兄の部屋に入りそこから出れば何ともないことだった。そして家族の姿を見て、やっとこの事態を冷静に受け止められた。

五月ヶ丘

【女】家の二階の自分の部屋で寝ていた。その日は学校でテストがあるので夢の中でいややなーと思っていた。そしたら顔に何かいっぱい物が当たって、私は起こされたと思ってイライラしながら起きて、ベッドにマンガの本がいっぱいあるのを見ると同時にすごい音がしたかと思うと、むちゃくちゃに揺れて自分で自分の体がコントロールできなかった。何かすごいびっくりしてこわい乗り物に乗っている時みたいに「ギャー」って叫んだ。⇒ しーんとして静かやった。びっくりしたことはびっくりしたけどまだ暗かったし、私は目が悪いから部屋の様子が何も見えないので、とりあえずマンガを全部ベッドから下ろしてもう一度寝ようと横になった。全然事の重大さが分かってなくてももしかしたら今日学校なかったらラッキーやなと思ってた。そしたら隣の部屋で寝てたおばーちゃんが助けて〜お兄ーちゃん痛いーとか聞こえてまた目が覚めてベッドから出ると電気がつかない。びっくりして見まわすと自分の部屋がめっちゃくちゃでドアが開かなくて部屋から出られないことに気付き、怖くなって「こわいよー」って泣いた。

新甲陽町

【女】廊下で立ってられないほどで家がばらばらになってしまいそうな感じがした。外に出た方がいいかなと思ったが、ますます危険そうなので廊下でしゃがんだままだった。⇒ 両親の所に行って大丈夫だったかどうか聞いた。頭を打ってないか、骨折してないか心配した。余震が続いていたときだったので怖かった。

甲陽園目神山町

【男】地震発生と同時に飛び起きて、布団を頭にかぶって、上からの落下物に警戒した。⇒ 揺れがおさまるとすぐにラジオをつけて、地震の情報を聞きながら、家に異常がないことを確かめてもう一度寝た。

上ヶ原三番町

【女】ベッドの上で私は熟睡していた。初めの方の強烈な揺れは寝ていて分からなかった。タンスの上の物が落ちた音で目が覚めた。「あっ、地震だ」と軽く思ったので布団をかぶって、そのうちおさまるだろうと思ってじっとしていた。その間、ベッドと一緒に縦に何度か浮いたような気がした。なかなか最後の微震が止まらなかったように思う。⇒ 父が、「大丈夫かーっ」と呼びに来た。その声が真剣だったので、感じたよりすごかったのかと思った。揺れがおさまった頃には、完全に目が覚めていた。結構冷静だったが、やっとおさまったという安心もしていた。

上ヶ原四番町

【男】二段ベッドの二段目で寝ていた。急に起きたために貧血みたいな感じになり気分が悪くなった。寝ぼけていたために何がなんだか分からなくてただ布団の中にもぐりこみました。⇒ すぐにベッドを飛び降り、履き物を履いて避難場所の上ヶ原小学校に逃げた。

【男】地震の起こり初めはたまに起こる地震かと思っていたが、だんだん揺れが激しくなっていくのがみえ、たえきれず布団を顔までかぶり揺れがおさまるのを待っていた。⇒ 何も見えないほど真っ暗だったので、懐中電灯を取ろうとしたけど入れていた棚が倒れていて中が飛び出していたようだったので、結局見つからず仕方がないので家族そろって家を出た。そうしたら外で大勢の人が大騒ぎしていた。

【女】揺れてるのはわかったけど、夢のような気がして寝てた。で、お母さんが叫んでいるから目覚めたらタンスとか倒れてた。⇒ 誰かが「ガス漏れやー、避難しろー、爆発するぞー」と聞こえてきたんで、コート着て近くの公園に行った。前の道路が飛び出でて、渡ろうとしたらまた地震がきてこけそうになった。まわりの景色を見てびびった。横の団地が1mぐらい前にきていて、道が狭くなった。自転車置き場真っ二つ。兄ちゃんがガス吸って死にかけてた。そしてあとから「もうおれダメかと思った」と言ってた。

上ヶ原八番町

【男】寝ていたからよく分らなかったが、すごい音がしてタンスが倒れてきて下敷きになった。なんとか脱出して外に出たらアスファルトが割れていた。数時間停電したが元に戻った。⇒ タンスの下敷きになっていたのによく分らない。

上ヶ原十番町

【女】就寝に入ってからだいたい2時間程度だったので、まだ眠りが浅かったのか、最初に外からゴーッという広がりながらだんだん押し寄せてくるような重い音が響き、次に窓がガタガタとするので「強い風かな。でも何か変だなー。」と目を開けた瞬間もう考えられないぐらいのとてもつもなく大きな揺れがおそってきた。目を開けたときにはすでに停電していて何も見えないのがとても恐ろしかった。大きく円をかくような揺れで、その時は2階だったので、もう1階と2階がずれたのではないかと思った。不思議に声を出そうにも出ないし、体も動かないから、寝ているすぐ横の母の嫁入りダンスが今にも倒れて、自分は死ぬんだなと思った。けっこう長かったので（約20秒間と後で聞いた）台所の皿が何枚も当たって割れる音や、ドスンドスンと家の中全部の物が次々と落ちる音がそういえば聞こえた気がする。おそろしかった。⇒ 下から父がそれぞれの部屋の戸を開けにきた。（その時まで少し揺れが残っていた。）そして、やっとのこと私は起きあがり（タンスは倒れていなかった。）隣の祖母を呼びに何も持たず急いで部屋を出たが足元は箱だらけでなんとか前に進めた。声あまりでなかったが祖母を必死に何回も呼ぶと部屋から無事に出てきた。手助けをして急いで祖母と一緒に下へおりて、裸足のまま靴をはいて（母が並べていた）外へ出た。しかし周りを見ると近所の誰もが外に出ておらず、何もなかったようだった。その時、自分はコートをきて、手にはガウンと家族の貯金通帳とやらを持っていた。

神 呪 町

【男】地震発生時は、家でベッドの上で寝ていた。そして地震が発生した。はじめは少し揺れているのに気付き、すぐおさまると思って、また寝ようとした。でもその直後に大きな揺れがきて、すぐ布団をかぶった。そのままずっと地震がおさまるまで待っていた。幸いベッドの近くに落ちる物がなかったのだけがはしなかった。それと揺れているときにベッドが東西に激しく揺れた。⇒ 揺れがおさまった直後は何が何だったか、さっぱり分かんなかった。そしたら2階で寝ていた父が、僕たちに大声で「大丈夫かー」と声をかけてくれてやっと気がついた。親が懐中電灯を探しに来て、つけて見たらいろんな物が倒れていた。そして、すぐに服を着替えて車に乗って、祖母の家に行った。

門戸西町

【男】僕はまだ気持ち良く寝ている時にそれはやってきた。揺れで目が覚め、おさまるまで待とうと思ったが、本やらとけいやら間断なく襲いかかってきて立ち上がるすきを与えない。それらを防ぐことに徹していたので、揺れがおさまるまでベッドに横になったまま、腕を顔の前で十字にして耐えていた。⇒ 本の山から脱出して、このままでは再度寝ることができないので片づけようと思い、電気のスイッチを押したが『パチッ』という音がむなしく響いただけだった。仕方がないので寝るのをあきらめ、部屋から出ようとしてベッドから下りると足に冷たい水の感触が伝わる。何なのか確かめたいが、真っ暗で何も見えないのでまんして部屋から出ると、親が家から出るという。揺れがおさまってから出ても仕方がないと思いつつ、とりあえず着替えて外に出た。さっきの水は、割れた水槽の水だった。

【男】最初、下から押し上げられたように体が跳ねた。その後、僕は起きました。最初は何が起きたか分からなくて、ただ頭に手をやっていただけでした。僕はベッドなので通常よりも揺れたみたいだった。とにかく地震と気がついたのは半分ぐらいすぎてからだった。⇒ 揺れが止まったとき、ものすごい轟音からいきなり静まったので寒気が起こった。とにかく自分の部屋をぬけて家族の安否を確かめようと必死だった。しかし、そうしようにも部屋のドアが開かず、仕方がないから窓を開けたら、薄暗い景色であたりから白いほこりのようなものが出ていた。そして部屋の中を見て驚いた。タンスや鏡台などが倒れ、本はぐちゃぐちゃ、ガラスの破片がいっぱい。

【女】布団で横向きに寝てて、気がついたらもう揺れてて、すごい音がして、何が起こったかわからへんかって、何かもうあかんかもしれへんとか、その揺れてる間に思った。それで最初揺れ初めて何やろう、何がおこったんやろうと思うまもなく、足とか体全体が重くなって、周りからタンスとか勉強机とかバサバサってすごい音で落ちたり倒れてきたりして、えー、どーなってんの、どーしょー、と思って、頭が混乱した。お母さんが私の名前を呼ぶ声がした。⇒ お母さんが私の部屋まで来て、私が机とかにうずまってて出ようとするところを手を引っぱって助けてくれた。それでとにかく机の下にかくれとことゆーことで、食事してるテーブルの下に隠れて、お母さんがお兄ちゃんを呼んで、テーブルの下からいつも懐中電灯を置いてたはずの場所を、みんなで何も見えないくらい中、探した。それでライターとかマッチとか少しずつ火をつけて、明るくなるにしたがってまわりを確かめていった。

【女】約20秒間中の10秒間は寝ていた。目が覚めた後は、机の下にもぐりことも忘れてベッドの上でボーゼンとしていた。⇒ 家族の無事を確かめた。そばに懐中電灯がなかったので探した。

【男】上に「ボン」と跳ね上がった瞬間に目が覚め、どうすることもできなくて布団に入り込んだ。本棚が布団の上に落ちてきて、それに時計のガラスが割れて布団に突き刺さり、たくさんの物が落ちてきて、次にドンという音を立ててタンスが落ちてきた。本当に怖かった。縦に揺れて、次に横、どうしようもなく揺れた。⇒ とにかく起きようとすると、起きあがれないほど物が落ちていて、怖くなって父を呼んだ。布団からでた後、ラジオを出した。「落ち着いてください」と何回も叫んでいた。次に懐中電灯を取り出し、家の中を見た。ピアノが動いていた、コップがたくさん割れていてびっくりした。太陽が出るまで外に出ないようにした。

【男】自分の部屋で寝ていると上から物が落ちてきて、目を開けたら天井の電気が振り回されていて落ちてきそうだった。そしてすぐ布団をかぶった。⇒ 音が止まって布団から顔を出した時は、こんなにすごい地震だったとは思いませんでした。

【女】すぐ目が覚めた。「あぁ、地震やぁ」「結構大きいなぁ」「うわぁ、止まらへんやん」「死ぬわ」ーと、思いながらじっとベッドの中にねころがったまま。⇒ 起き上がろうとしたら、本棚が上に倒れててびっくりした。急いでパジャマの上に服を着た。下に降りてみんなの無事なのがあったので、部屋に戻って貴重品と鳥かごを持って外に出た。

【女】寝てるときに地震がきて、まるでゴジラが何かにマンションを揺さぶられてるみたいで怖かった。こんなに大きい揺れが広範囲で起こってるなんて信じられなかったから、最初はポルターガイストかと本気で思った。クローゼットの中身が飛び出して本棚が倒れて本が降りかかってきてあんまり怖くて叫んでみたけどすごい音に消された。⇒ お母さんが来た。揺れが止まってもベッドの上から動けなかった。部屋の出口の前にクローゼットの中が出て、その上に本棚が倒れてて出るのが大変だった。ドアの外の廊下にあった棚がドアの所まで来ててドアが1/3くらいしか開かなかった。

【女】布団にもぐっているとベッドが勝手に動き出し、本棚の上のラジカセ、CDや本棚の中の本などあらゆるものが床に落ちた。クローゼットも開いたり閉じたりしていた。⇒ 服を着て、靴下をたくさんはいて、スリッパをはいて、玄関まで行って靴をはいて外に行った。

門戸東町

【男】どうせすぐやむと思っていたが、ものすごく揺れたので布団にもぐった。直下型とはわからなかったが、ものすごい揺れで夢かと思った。世界の終わりかと思った。⇒ 何が起こったのか夢なのかわからなかったが、とにかくまわりが散らかっていた。そしてまわりはシーンとしていた。家が崩れたり傾いたりしなかった。

【女】5時に起きて自分の部屋の中でお布団に入って本を読んだりしていたら、最初震度3ぐらいの地震が起き、すぐやむと思ったら棚に入れてあったカセットが横に舞って、それだけ見るとすぐ電気が消え真っ暗になった。真っ暗の中、ものが倒れたり食器やガラス、壁の割れる音がした。けど、何が起きているのか、何の上に倒れてどうやって抜け出たのかわからなかった。⇒ すぐ父と母が懐中電灯を持って二階に上がってき

た。弟の部屋のドアだけが開かず、私は私の部屋からすんなりでれた。ひとまず防寒をしてすぐに外に出た。隣の家もその隣もだいぶん傾いていたためドアが開かなかったが、蹴って出てきた。うちの猫は二階で腰を抜かしたため鳴き声はするけども降りてこなかった。隣の猫はすぐ家を飛び出し見つかっていない。

【女】寝てたから揺れてる間は無意識に体が固まって布団をかぶった。夢の中かと思ってしまった。⇒ 真っ暗で部屋から出ないといけないと思って、ドアまで行こうとしても、いろんなものが倒れてて、ドアを開けるのもやっと出れるくらいまでしか開かなかった。

【女】はじめドンッ突き上げられた感じで何となく目が覚めた。次の瞬間からものすごい揺れだった。その時は怖いと思う暇もなかったし分からなかったけど、縦揺れで次ぎ横揺れだったと思う。最後の方はおさまりつつもけっこう長い間揺れていたように思う。⇒ 親に呼ばれて返事してすぐに移動したら天井が落ちてきた。暗くて見えないけど、入り口までにいろんな物をまたいだ。うちの家の前をバイクが1台ゴトゴトいいながら通った。

門戸岡田町

【男】寝ぼけていて“揺れ”を感じることができなかった。〔母の証言〕揺れたのでこたつから立とうとしたら、すぐに座らされてしまったと言っていた。⇒ 父が叫んでたたき起こしてくれた。自分の部屋はあまり物を置いていなかったのも、安全であった。ただ、本が散らばっているくらいだった。

【男】地震発生時、僕は自分の二階の部屋にいた。揺れで目が覚めたからよくわからないが、僕の場合は初めガラスの揺れる音が聞こえるぐらいで少しびっくりしたが、大したことはない判断し、また寝ようとした。さっきの揺れが止まった。しかし、今度も大したことはないなと思ったら、ガラスの揺れる音がどんどん増していき、ガラスが割れると思うぐらいの音だった。しかも、自分がゆらされるぐらいの激しい揺れだ。本棚、ふすまなどいろいろなものが倒れてきた。布団があったので助かった。僕はびっくりして声が出なかった。地震が止まったので早く逃げよう判断し、実行した。⇒ その時、二階の部屋ではいろんな荷物が布団の上にあった。さっきの地震が信じられなかった。早くこの部屋から出ようと思い、立った部屋を見るといろんな物が散らかり、足の踏み場もなかった。しかも停電だった。またさっきの地震があるのかなと思うととても不安になった。自分の部屋は傷がなかった。他の部屋に行くとても驚いた。玄関のガラスが割れたり、壁にひびが入ったり、戸が閉まらないこと、戸が開かないことなど、とりあえずとても驚いた。そしてさっきの地震はかなりのものだと感じた。電気も水もガスもその時止まってしまった。

【女】私はベッドで寝ていました。初めはあまり分からなかったんだけど、横揺れで目が覚め、何が何だか分からなかったけど、“こわい”と思い、布団をかぶり丸くなっていて、下からお母さんが“地震だ。”と言ってから「あっ、地震なんだ。」って、やっと分かったんだけど、まだすごく揺れていたのも、じっとしておこうと思いました。⇒ 私と妹たちは二階で寝ていて、親は一階で寝ていたんです。お父さんが「大丈夫か？ガラスとか割れてるから絶対に動くなよ。」って言うてくれました。返事しようと思ったんだけど、ふるえてて声が出なくて妹が代わりに言うてくれました。すぐに懐中電灯を持ってお父さんが来てくれたんだけど、ドアの前に扉が開いてて出れなくて、でもすぐに助けてくれてスリッパをはいて、一緒に下に降りました。

【男】17日早朝地震発生時には僕は自分のベッドの上で寝ていた。はじめ何が起こったのか分からなくて、家の隣のビルの非常ベルがけたたましくなっていた。頭の近くにあった本棚が倒れてこないように手で押さえるので精一杯だった。⇒ 地震がおさまってからすぐに父さんと母さんの寝ている所へ行こうと思って、自分の部屋を出ようとしたけど、ドアが何かにひっかかって開かなかった。強引にドアを押して廊下に出ると、壁の土が落ちていて足にくっついた。父さんと母さんの寝ている所に家族が集まって懐中電灯を探した。

門戸荘

【男】自分の部屋で一人寝ている間に、地震が襲った。いきなりベッドがグラグラ揺れ、その後、大きな揺れが起きた。その時は何が何だか分からない状態にあった。揺れている間、タンスやいろんな物が自分の所に落ちてきた。⇒ 揺れがおさまったら外がやけにうるさかった。とにかく自分の部屋から脱出しようと思い、自分の上にのっかっている物をどけ、足の周りにガラスが落ちていると思ったので、唯一倒れていない勉強

机の上にのぼった。ドアがどうしても開かなかったので、ベランダの方へ向かおうとしたが暗くて足元が見えず危険なので、足元に布団を引いてベランダまで行ってとなりの部屋に移った。

【女】揺れているときは、何が何だか分からなくて、自分は一人で少し離れた部屋で寝ていたの、とにかく「助けて!」と何度も叫びました。⇒ まだ朝早かったので、揺れている間もずっと布団の中にいて、部屋に置いてあったタンスが倒れてきたので、とにかく布団の中から出ること以外は何も考えられなくて、まず布団から出ようと必死だった。

【女】地震の揺れで目が覚めたのか何なのかよく分からないけど、すぐ起きて“フッ”と外を見たら“ピカッ”と光るのが見えた。その晩のニュースで雷が鳴るというのを聞いたので雷が落ちたのだと思った。とにかく言い表すことのできない程の激しい横揺れで、あちこちからドタドタと物が落ちているのがわかった。ただ布団の中で揺られるままに揺られていて、地震がおさまるのを待つしか他はなかった。⇒ 揺れがおさまってすぐ布団から出て電気をつけて周りの様子を確かめようと思ったが、私の部屋の電気は落ちていたし、スタンドをつけようと思ったけど、すでに電気はつかなくなっていた。それから窓から外を見たら、懐中電灯をつけて私のマンションを照らしていたり、家から出て来た人たちが何人かボーッと立っていた。そして外から“ガスの元栓を締めて下さい”と叫んでいる声が聞こえたので、家族にそのことを知らせた。

【男】地震発生の5時46分はまだ寝ていたが、母の叫ぶ声で起きました。起きたときはベットは斜め上に大きく揺れていて、食器、冷蔵庫など割れたり、倒れたりする音は全く聞こえず、地震の音と言っているのかわからないけどもゴゴゴという音だけ聞こえました。姉の話によると姉はコンクリートが壊れていく音がしたと言っていて、父と母はゴゴゴという音しか聞いてないと言っていました。⇒ 揺れがおさまったときはもう停電していたので真っ暗で、無我夢中で懐中電灯を手で探りながら見つけました。そして明かりを照らしてみると家の中にはいろいろな物でメチャクチャで、とても驚きました。そして急いで服を着て、いろいろな物の間を通り、犬を連れて急いで外に出ました。

【女】17日に社会のテストがあるはずだったので5時30分には起きていました。でも起きるととても寒かったのもう一度布団にもぐってCDをつけました。そして45分になったのでCDを消して台所に行こうとしたとき、突然すごい揺れがきたので布団の中に入りました。ベットの上につけてある棚の物が次々落ちてきて声も出ませんでした。ベットの上で自分の体が上下に移動している間、部屋のタンスや本棚が倒れていくのが分かりました。私このまま死ぬんじゃないかと頭の中で一瞬考えていたと思います。⇒ 15秒間ほど続いた大きな地震がおさまった後、泣いてはいたものの、“このまま寝ていいのかな”とか“今朝の地震のこと教室で盛り上がるやろうな”とか一瞬思いました。かなり冷静だったのかも…揺れがおさまったのを確認して私はまず窓から外の景色を見ました。すると外はまだ真っ暗なのに171号線の方で赤い光が見えました。『洋服の青山』あたりで火事があったみたいです。私はもうパニック状態でひたすら泣き続けました。

【女】ドーンという下から上に突き上げる振動がきてその後縦や横に激しく揺れた。どんどん揺れが強くなってタンスやテレビ食器など普通じゃ倒れない物までが寝ているところへ落ちてきた。揺れはずっと続いていた。本当は40秒ぐらい揺れていたみたいだけど自分には1分間ぐらい揺れているように思った。⇒ 停電になって辺りが真っ暗で何も見えなくなって、始めは家のドアまで開かなくなって外にも出られなかった。それでお父さんがドアを蹴ってなんとか開けて外へ出た。外に出たらマンションの人が大勢外に出ていた。地震があった間や止まってからもずーっと足のふるえが止まらなかった。

【男】ベットの上で揺れがおさまるのを待っていた。⇒ とりあえず部屋から出て外に出ようと思った。玄関にはわれた水槽の破片でいっぱいだった。階段を下りてマンションの前に行くとマンションの人が集まっていた。

能登町

【女】なぜかその時、ふっと目を覚ましていました。そして“ズズン、ズズン…”ときて「あ、地震だ。」と思ったらその瞬間“どっかーん!!”おもちゃみたいにかが揺れて、「家が壊れる!」と思った。何しろ生まれ

て初めての経験。恐怖でとっさに横に寝ている宝物の人形を抱きしめ、ベッドにもぐり込んで震えていた。「もう、やめて……。お願い……。」半泣きで、必死に大地に懇願することしか私にはできなかった。⇒ 別に大地が私の願いを聞いてくれたわけじゃないだろうが、とにかく地獄のひとつきは終わった。「もう信じられない。」このまま朝まで寝てやろうと思ったら、父が倒れた家具の上を乗り越えてみんなの無事を確かめに来た。ところが私の部屋のドアが開かない。なんと部屋のすみで寝ていたのに起きたら部屋の真ん中にいて、ベッドがドアをふさいでいたのだ。「はァ!？」ベッドをもとの場所に戻すと、父が着替えて外に出るぞと言うので「何でっ!!」と反抗して聞いた。「外は寒いやろ!」こんな時にケンカする親子って一体……。とにかく暗闇でクローゼットまでたどり着き、しっかり寒くないように服を選んで（こんな状態でこういう人も珍しいだろう）家族で連れだって家の外へ出た。

【女】ベッドの上で寝ていたら、激しく揺れたのでびっくりして布団の中にもぐり込んだ。⇒ ベッドからおりて両親の声が聞こえたのでコートを持って部屋を出た。

丸 橋 町

【女】激しい揺れで目が覚めました。はじめのうちは頭がはっきりしていなかったの「地震かな……？」と思いつつ半分寝たような状態でしたが、一階の食器棚が倒れた音で今度ははっきり目が覚めました。一瞬どうしようかと思いましたが動きたくても動けるような揺れではなかったのでそのまま布団をかぶってじっとしていました。二階だし二段ベッドの下なので物は降ってこないだろうと思ったので揺れがおさまるまでそのままでした。⇒ 揺れがおさまってもしばらくは怖くて動けませんでした。カーテンを閉めていて部屋が真っ暗だったので枕元の電気をつけようとしたら、つかないもんだからよけい怖くなって布団にもぐり込みました。だいたい外で声が聞こえ始めたのでやっと布団を出て、隣の部屋の弟のところへ行きました。一階に行く間にも何かわけの分からないものをいろいろ踏み踏みました。窓を開けて部屋の中の様子がわかった時は絶句してしまいました。

甲風園3丁目

【男】トランポリンみたいで楽しかった。⇒ お母さんが一人で騒いでいた。お父さんはまだ寝ていたのでビックリした。お姉さんは机の下敷きになっていたのでお兄ちゃんが助けていた。とりえず僕は新聞屋から新聞をもらって新聞を見た。

森 下 町

【女】寝ていたときに地震が起きたのでベッドが揺れてビックリして目が覚めた。いろんな物が家の中で倒れてきたり、電気が落ちてきてすごい怖かった。こんな事初めてだったのですごいあせった。すぐに家の外に出ようとした。パジャマのままで。でもドアがなかなか開かなかった。外に出たときはエレベーターを使わないで階段で下りた。⇒ 家の中がめちゃくちゃになっていた。タンスとか食器棚や電子レンジなどがみんな倒れてた。家の鍵もかけないでとにかく外に出たら、近くで火事が起こっていた。マンションの下でしばらくいたけど、また地震が来るかもしれないと言うことで近くの小学校に避難しに行った。

【女】私の家族でいつものように寝ていたのは兄だけで、私と妹はいつも一緒に部屋に寝るんだけど妹が風邪のため、父と母が寝ている部屋にみんな（兄を除く4人）で寝ていました。そのおかげで私と妹は助かったものの……。もし、あの日いつものように寝ていたら、私と妹は生きていられなかったかもしれません。兄は兄の部屋でいつものように寝ていたのでもしかしたら……。でも奇跡的にけが一つなく今もいつもと変わらずがんばっています。私達兄妹3人は本当に奇跡でした。⇒ 電気がつかなくて真っ暗だし、ベランダの戸が鍵をしていなかったため全開で嵐のように風が吹き込んできたり、すぐに家の中が冷え切ってしまい、とりえず家の外へ。（どこか何も倒れてこないような広場）避難しようということで外へ出ようと玄関まで行くのにもタンスや棚などいろんなものが倒れてきていてぐちゃぐちゃ。玄関の手前までやっと出て来たと思ったら下駄箱が倒れていて靴も出て来ていて外へ出るのも一苦労。やっと出れたと思ったら近所がオレンジ色にメラメラと燃えていました。すごく怖かったです。

北口町

【男】前に何回か同じ時間に地震があったので“またか”と思ったがかなり長い時間だったので体が固まってしまった。また体の上に本やテレビが次々に乗ってこれは人生の大ピンチだと思わずにはいられなかった。実際には20秒でも自分には5分ぐらいに感じた。⇒大ピンチだと思いながらもまだ6時前だったのでもう一度寝ようとしたが姉妹がいろいろ言ってきて家が傾いていると言ったので、絶望感がよぎって真相をつかむために外に出てみると大変なことになっていた。周りの家の2階が1階になっていた。

伏原町

【女】自分の部屋で寝ていた。私が感じた地震はS波の方だけでP波の時は眠っていた。その時私は耳を押さえて布団の中にもぐった。考えることなしにとっさにした。⇒自分の部屋のベットにまだ横になっていた。何が起こったかわからなかった。電気をつけようとしてもつかなくったので懐中電灯を探した。次にラジオともちろん電池のやつを、そして1階に家族みんなで行った。そして電話を探した。117の時報に電話をかけつながら確認を確かめた。

野間町

【女】私は自分のロフトベットで寝ていて、突然の大きな揺れに一瞬で目が覚めて何も考えずに布団をかぶって小さくなっていました。ロフトベットだけにガタガタ揺れるのが大きくて、東西に（左右に）動いていると思ったら、地震の揺れがおさまったと同時にベットの揺れもおさまって、気がつくのと体勢が斜めでした。⇒ロフトベットは見事に斜めになっていてかうじて壁に引っかかっていた。電気がつくのかとっさに試してみたけれどつかなくて、その場の状況がつかめなかった。そんなこんなを考えている間もまだ余震が続いていたので、だんだん怖くなってきて、別室に寝ていた両親を呼んでいました。両親のいつもと違う声を聞いて、初めて「あ、これはすごいことだ。」と自覚しました。

【女】一瞬何が何だか分からない状態になった。地震の間は布団にしがみつこうと思ったけどできなくて、台所からお皿やグラスの割れる音がしてきた。その時私は上から物が落ちてきても大丈夫のように布団をかぶっていた。⇒電気をつけようと思ったけどつかなくった。両親の応答に答えた。でも部屋から出るのに一苦労だった。タンスは倒れているし、机の本棚は落ちているし、ひとまず“懐中電灯”を探した。5分ぐらいしてまた震度3ぐらいなのがきた。外が騒がしかったので外に出た。

【男】はじめにどんどんと2回ぐらい下から突き上げるような揺れがあり、その後に左右の激しい横揺れに揺られていた。とっさに布団の中にもぐり込んだ。そして、揺れている間いろいろな所からガターン、ガチャーン、バリーンなどといった物が倒れたりする音がした。⇒親父達の呼ぶ声がしたので返事をした。でも上に何かがのっかっているようだった。少し動くとか何がジャラジャラいうので何かと思ったらガラスの山だった。どこのガラスかと思ったらサイドボードのガラスでその中にサイドボードの中のガラス製品も混じっていた。部屋から出ようとしてもドアが何かにつかかっているようでなかなか開けなかった。

林田町

【女】気付いたら私は布団を頭までかぶって大きく揺れていた。電気がガチャガチャ揺れている音がした。もしかしてこれは大きな地震なのかなと、まだ私はのんきに考えていた。その時私は一人で寝ていた。⇒揺れがおさまって仰向けのまま布団からのぞいてみたら電気はなんともなかった。暗くて周りが見えなく、どうなのかよくわからず「いつもの地震のちょっと大きめのやつ。」程度しか思わなかった。目覚ましはまだ鳴っていないしもう1回寝ようと思ったら、別の部屋に寝ていた家族の騒ぐ声をする。水槽が割れてリビングが水浸しになっているらしい。それでも私は起き上がる気にならなかった。親が私を呼ぶ声がしたが、めんどくさいので返事をしない私。そしたら父が「大丈夫か。」といいながら私の部屋にきてびっくりしたようだ。私はその時初めて左横を向いて驚きと怖さで動けなくなった。学習机と棚とが見事に倒れて上に置いてあったコンボも落っこちていた。私をよけるかのように倒れたり落ちたりしていて、私はギリギリセーフで助かったようだった。

門前町

【女】一瞬何が起こったかわからなかった。夢・・・?と思いながらも怖くて思わず布団をかぶった。揺れているのにその時はまだ“地震”とは分からず、自分だけが感じているのでは・・・?どこかおかしくなったのかも・・・等と思っていた。しばらくして揺れがおさまり、自分でも信じられないが、私はまたうとうとと寝てしまったのだ。心配して呼びに来てくれた母はさすがにあきれていた。私も自分の神経を疑った。母と弟は飛び起き、食器棚が倒れたり、皿が飛びかっている様子を見たという。⇒ 暗がりの中でやけにさっぱりしている机と足の踏み場もない荒れた部屋を見てやっと地震だという事が分かった。ピアノが・・・あの重いピアノが動いていた。弟の足に血が流れており、母も手をけがしていた。それを見て急に怖くなり足ががくがく震えて、早く外へ出なければならぬのに足が動かず大変だった。父はその時東京に出張でいなかったのも心細かった。

若山町

【女】私と第二人は二階で寝ていた。父も同じ部屋で会社に行く支度をしていた。母は1階でお弁当を作っていた。その時にはじめ2秒ぐらい小さく揺れたので目が覚めて、それからすぐものすごく大きく揺れだしてつけていた電気が消えた。私は父に守られていた。私は窓側にいたのでたまたま何も落ちてこなかった。私は何が起こったのか分からなくて頭が真っ白だった。だから自分の家がどんな状態になっていたか全然分らなかった。⇒ 母が1階から「助けてー、助けてー、お父さん助けてー!」と何度も叫んでいたのも、懐中電灯を探したが暗くて何も分からない。部屋の中は家具が倒れ手足の踏み場もなかった。私はともかく母に「すぐ行くから、待っててー、すぐ行くから!」と叫んだ。ところが弟の一人がタンスの下敷きになっていた。もう一人の弟とタンスを持ち上げて助け出した。父はすでに母を探しに行っていた。階段がなくなっていて下に降りられない。私は窓を手で割って弟達と2階を出た。外を見渡すと近所の家全部が全壊だった。もう夢だ、悪夢としか思えなかった。そしてやっと母を見つけ、私は大声で「誰か助けて、生き埋めになっているの、助けに来てー!」と何度も叫んでいると、近所の人たち10人ぐらいが来てくれた。母の上には壁が何枚ものっかっていた。母は無傷だった。すごくうれしかった。そしてすぐ近くの祖母の家に家族で裸足で向かった。

【女】何が何だか分からなくて隣にいた姉と抱きついてた。タンスが倒れて、ステレオが頭の上に・・・⇒ 下に降りようとしたらタンスが倒れていて道がふさがっていたのでタンスの上をのぼっていった。そしたら階段が壁が落ちてきて階段ではなく滑り台になっていた。

【女】地震発生時まだ布団をかぶって寝ていたのも、横揺れしてる時にとっさに布団を頭までかぶり、タンスの側で寝ていたのもタンスの方を向いて横向きの体勢で地震がおさまるのを待っていました。下から突き上げる直下地震で、体が浮き上がるのが分かるほどでした。⇒ とにかく真っ暗で、しかも私はタンスの引き出しの下敷きになっていたのも、大きな声で助けを呼びました。足で蹴ったり手で押したりしてもなかなか出られず、数秒後父に引き出しをどけてもらって出ました。そして外へ逃げようと1階に降りたとき、ガスの匂いがただよっていました。扉が開かず、窓から外に出ました。地震が起きてから外に出るまで2、3分ぐらいだったと思います。でも、もしタンス側に寄っていなかったら引き出しが直撃していたかと思うとゾッとしました。

樋ノ口町1丁目

【男】起きてすぐ布団をかぶった。上から何が落ちてきたかは見えないけれどすごく重い物が落ちてきた。⇒ 3部屋に分かれて寝ているので家族の安全を確認して外に出た。それでガスの匂いがしたので近所中のガスの元栓を閉めた。

【女】布団の中ではうような状態でもぐって「えっ、なんやこれは」って感じで状況をちゃんと把握できなかった。なんか乗り物に乗って揺られてる感じがした。部屋の中に置いてある机や本棚がバタンバタンといってたのでいつ倒れてくるかと怖くなって、どうすることもできなくて頭が真っ白になった。揺れている間は、ほとんど何も考える余裕がなかった。でも何か、あっ、死ぬんちゃうかってふと思った。⇒ 頭がくらくら

してるままで、またくるんちゃうかというのが頭にあったので少し興奮していたような気がする。それで家族の無事を確認しあって下に降りていった。その時何か大事な物を持っていけないかと思っていて、すぐ側に置いてあったカバンと何を思ったか目覚まし時計を持って降りた。今まで感じたことのないようなことだったのですごく気が動転していた。

【男】ゴーという音がしていきなりドスンと下に落ちる感じで本当はそんなに長く揺れていないかもしれないけど、すごい長い時間揺れているような気がした。⇒ 始めは家の中にいたけど、ガスが漏れている音と匂いがして家の外に出ようとしたけど、ドアに門柱が倒れかかって開かなかった。しばらくして誰かが門柱をどけてくれて外に出てみると、家のブロックが全部落ちて、まわりの古い農家の人のうちなんかはペッチャンコになっていた。

【男】地震発生時、2階にある自分の部屋で寝ていました。まず、1、2秒しかなかった初期微動で目が覚めた。その後とてつもない横揺れになった。揺れと「バリバリ、ガシャンガシャン」という音で体が硬直し起き上がることもできずに、ただただ何もすることができずに揺れのおさまるのを待った。すぐに地震と分かった。⇒ 隣の父と母の部屋にすぐ行ってみると部屋にある二つの大きなタンスが父と母が寝ている布団の上に倒れていて、びっくりして大声で呼びかけたが応答がなかったので「もうこれは死んだな」と思って、下の階に降りたら死んだと思ったはずの二人が台所にいたので「もう、ばけて出たんかい」と思って、2度びっくりしたがお化けではなかった。話を聞くと、その日は父が仕事で特別早く出なければならなかったもので、二人で台所で食事をしている途中だったので奇跡的に助かった。

樋ノ口町2丁目

【男】僕はその時間は家で寝ていました。するととても大きな揺れがあったので、目が覚めました。「地震だ」と思い、タンスの上の衣装箱などが落ちてきたので、布団をかぶってタンスが倒れてきても大丈夫のように体を伏せていました。⇒ 父に呼ばれて外に出ました。そしてラジオを聴いていました。近所の人たちも出てきていて、車を移動させてきてラジオを聴いていた。

【女】自室のベッドの上で、何かで目が覚めてと思ったら、部屋が激しく揺れていた。地震で目が覚めたことは今までに何回かあったけど、これほど大きな地震にはあったことがなかったからすごく怖かった。上の方に取り付けてある本棚から次々と本が落ちてくるのがわかった。揺れの激しさと長さに下手したら死ぬかもしれないと思ってゾッとした。とっさに頭まで掛け布団をかぶって、枕に向かって「キャー」と叫んでいた。⇒ やっと揺れがおさまったと思ったら、真っ暗な自室に一人にいるせいか、家族が全員無事か、家具の下敷きになっていないか不安になった。特に1階で一人で寝ている母の事が心配だった。隣の部屋からお父さんに呼ばれてすぐ返事をした。お父さんが一人ずつ名前を呼んで家族全員が無事であることがわかった。母が一階から懐中電灯を持ってきたが、廊下の本棚の本のせいで奥までこれなかった。父はベランダを使って妹の部屋に行きそこから降りた。

【女】この日はたまたまベッドで寝ていて、目は覚めていた。少し揺れたがすぐおさまると思い、また寝ようすると次はかなり揺れてきた。まだまだ大丈夫とまた寝ようとしたらガチャガチャ物音がしてきてむちゃくちゃに揺れた。何これ?!と思い目をつぶっていたら家族の呼ぶ声を聞き、よろよろと廊下に出た。母がすぐ玄関の鍵を開けて、引き戸のヘルメットや防空頭巾、避難用具を引き出しているうちに揺れはおさまった。私はただ廊下に立っていた。⇒ 父がラジオをつけると震度4だと言っていた。そのうち震度6だと言い出したが、ベッドが無事かと見にゆくと無事だった。鳥なので逃げることができずに暴れていた。一緒に逃げられるように玄関近くに置いておいた。そして制服を倒れた家具からなんとか取り出して、スリッパをはきガラスの破片の処理をしていた。大きな懐中電灯はこの前私が部屋の片づけの時なくしてしまったのでとても困った。仕方なく小さい方を2、3個ポケットライトを頼りにいろいろ見回った。

【女】まだ布団の中にいて、でもちょっと寒いなあと思って体を起こそうとしていたとき、グラグラと揺れて「あー地震だ」とのんきなことを考えた瞬間、ベッドから落ちそうになったので思わず布団をかぶった。外で“ゴー”といってるみたいな気がした。⇒ しばらくボーとしていたけど、お母さんの声がして気が付き

た。私の部屋はあまり乱れていなかったの廊下に出たけど、また揺れがきて怖くなったので布団の中に駆け戻りました。

下大市東町

【女】寝ぼけていて何が起きているのかよく分からず、とにかくすごい揺れ方だったのでベッドの上で体が跳ねた。地割れの音が聞こえた。(部屋には大きなタンスなどは置いていなかったの、下敷きになったりすることはなかった。)⇒しばらくボーッとしていた。お母さんが「大丈夫?!」と見に来てはじめてハッとしました。自分の部屋を出て懐中電灯でまわりを見たとき、あまりのメチャクチャさに呆然とした。

【女】揺れているときは、なぜか物が壊れたり倒れたりする音が聞こえなかった。コップやガラスがほとんど割れていたのに揺れに驚いて耳に入らなかった。その時はまだ実感がなかったのであまり怖いとは思わなかったし、一緒に寝ていた4才の弟でさえ全然怖がっていなかった。揺れが激しくて酔いそうになった。夜が明けてなかったから、余計に怖くなかった。その時はこの地震が明日の学校での話を持ちきるなあぐらいにしか考えていなかった。⇒揺れがおさまった後、やっと終わったと思って枕をちゃんとさわると枕がざらざらしてて、砂がいっぱい落ちていてはじめてすごいと思った。というのは私のベッドは壁に頭の方をくっつけていたので、古い家のために壁土が思いっきり落ちていたのです。それでだんだん怖くなってきてまずおばあちゃんは大声でわーわー言っているから大丈夫だと思って、私はまずこの4才の弟をしっかり守らないといけないと思いました。

下大市西町

【男】揺れて目が覚めたが、またすぐ布団にもぐって寝ようとした。⇒寝ようと思っていたら、隣の妹の部屋がタンスに囲まれていて父が心配して一階から駆け上がってきた。僕もあわてて飛び起きたら、本箱、その上のテレビが落ちていて、本が散乱しているのに気付いた。妹は部屋の横幅がタンスの長さより小さく、タンスが完全に倒れなかったので大丈夫だった。

【男】クラブの早朝練習のため、起きてパンにマーガリンを塗ろうとして少ないマーガリンをかき集めているときに、いきなりきたので、テロリストにダイナマイトを仕掛けられたのかと思った。急いでテーブルの下にもぐろうと思ったけど、腰が抜けて動けなかった。⇒家族の安否を確かめた後、自分の部屋を見に行った。

上大市1丁目

【男】寝ていて気付かなかった。母に体を揺すられて起こされる夢を見た。⇒姉が叫ぶ声で何となく気が付いて、その後父に起こされた。自分の上にはたくさんのマンガが本棚から落ちていた。布団があったので痛くなかった。姉の上にはタンスが倒れていたが自力で抜け出せたようだ。両親の寝ている部屋はテレビや小さな本棚などが落ちていてぐちゃぐちゃに散らかっていた。でもその部屋のタンスは倒れていなかった。お風呂に入っていた水がこぼれたらしく、お風呂場の前がびしょびしょに濡れていた。家族全員無傷だった。

【女】布団にもぐって寝ていたら、いわゆる“初期微動”が来た。すぐにゆっさゆっさという感じで揺れ始めた。その時ドンというすごい音と地鳴りのような音、上からバサバサ落ちる音、ガラスが波打つような音、音でいっぱいになった。⇒「大丈夫か?」と親に聞かれて「うん。」と答えたけど、聞こえなかったらしい。頭と足に(布団ごしに)物が乗っている感じ。「動くな」といわれたのでじっとしていたけど、みんななかなか出てこれないので布団からにじり出たら、ふすまもガラス戸もはずれかけて動かない状態。机とイスが倒れて、もといた布団の頭の部分。倒れかけてストーブにつかかったタンス。それがストーブがなかったら圧死していた場所だった。そんなことを考えていたらからか、窓がはずれていたからか、ふるえが止まらなかった。

【男】強烈な揺れで下から押し上げられている感じで何もできなかった。⇒外に出た方がいいと思った。ガラスの破片などがいないか確かめながら玄関まで行った。

【女】「最初小さい揺れがあった」とみんなが言うけれど、私は全然気が付かないで寝ていたみたいです。だから気が付いたのは最後の5秒くらいだと思います。でもその揺れはすごいものだった。最初はほんと夢かと思ったくらいでした。ベッドで寝ていても体が勝手に動いてしまって立とうとしても立てませんでした。⇒

急いでベッドから降り、あせっていたのか一生懸命電気をつけようとしていた。実際その時はもう停電していて電気はつかなかったけど。それから部屋を出るとお父さんがタンスの下敷きになっていたので隣のおじちゃんを呼んで助けてもらった。それから外に出た。すごいガス臭かった。

【女】寝ていた。＜ちょっと揺れを感じていた。＞⇒ 寝ていた。

【女】寝ていたら急に横にゆっくり2～3秒揺れて、その後強い横揺れになってからすぐ「ドーン」という音が出てから激しい縦揺れが何秒か続いてから地震がおさまった。⇒ おさまったので布団の中から顔を出すと体の上にたくさんの本と鏡台が乗っていたのでびっくりして布団の中からはい出た。すぐに机の中からラジオを取り出して聞いた。全然ニュースがないのであせった。家の中はめちゃくちゃでなんとか外に出られた。外に出た瞬間空に大きい稲妻が走って辺りがぱっと明るくなった。とにかく異様に辺りが暗かった。

上大市2丁目

【女】何もできなかった。ただ布団の中にいるだけだった。体が動かなかった。ただ「怖い」と思った。縦にも横にも動いた。午前5時46分という時間、外は暗かった。みんな寝ていたので当然家の中も暗かった。何も見えない中、ただ天井を見ていた。動けないだけでなく何も考えられなかった。じっとしているだけだった。⇒ 布団の中でじっとしていた。まず思ったのは「今のは何だ？」だった。目が慣れてきたのでふと天井を見ると電気がなかった。「どこに行ったのだろうか？」と思いながら、頭を枕にのせようとして枕にさわったらチクッとした。枕の方を見ると電気の傘があり、電灯が割れていた。

【女】はじめはすぐに揺れもおさまると思っていたので、布団をかぶっていただけだったけど、そのうちに激しい揺れがきて家の天井とかが、そのかぶっていた布団の上に落ちてきたので何も考えることができなくなった。⇒ 直後はただ崩れてしまった家から出ることにしか考えていなかった。

上大市3丁目

【女】地震だ!!と思ったら、いつものと全然違って、何もできないまま、私と姉はタンスの下敷きになった。下から突き上げるような揺れで、ドドーンという音がした。(今思えば、あの音は新幹線の橋げたが落ちる音だったのかもしれない。)私は何をしたらいいのか分からず、ただ震えているだけだった。地震が起きたら窓を開けるとか言うけれど、寝ていただけにそんなことできなかったし、頭もまわらなかった。⇒ すぐに、父の兄が、タンスの下敷きになった私と姉を助けてくれた。窓の外で何回か光ったのを見た。それから、家族みんなで固まって布団をかぶっていた。でも、ここには危ないと言うことで、学校に行くことになった。犬もこたつの中で寝ていたから助かっていて、一緒に連れていった。後で見た家の中は、トイレは真っ二つ、お風呂は外に突き出ている、ピアノは倒れていて、階段を上がってすぐの所に置いていた荷物は全て落ちていた。

【女】上下に揺れていたような気がした。気が付いたときは、タンスと鏡台が倒れて私の上ののっていた。ガラスが割れる音がして、机など家具は全部倒れてきた。真っ暗で何が起きているのか、よく分からなかった。⇒ ガラスが階段に散らばっていた。私は靴下をはいたけど、両親は裸足でガラスの上を歩いて1階まで降りた。でも、ドアが開けなかったから窓から外に出た。ガラスを上手によけた犬を抱いて外に出た。外に出ると、近所の人が集まっていた。すごくガス臭かった。

【女】ベッドの上で寝ていたから、とりあえず布団を頭の上まで引っぱってじっとしていた。⇒ 二女の姉と2人で2階で寝ていたの下に寝てた母と長女が心配だった。二女の姉と2人でおりていって、ガラスがあったからスリッパはいてコート着て外に出た。でも途中でガス漏れが激しく臭かったから家に戻った。いとこの姉が両親が家の下敷きになっていて自分も兄もけがしてると言ってきた。母と姉2人が救急箱を持って走っていった。ご飯が残っていたので、おにぎりを作ってみんなに持っていった。

上大市4丁目

【女】私は激しい揺れで目を覚ました。揺れている間はベッドの上で、布団をぎゅっと持ったまま硬直してしまっていた。近所の人のキャーという叫び声で地震だと気づき、あー死ぬのかなと思った。⇒ 母の「パパー」と呼ぶ声がしてドアの所へ行こうとしたら本とかが全部出て、転びそうになりました。ガラスが割れていなく

てよかったと思う。やけに寒く感じ、ふるえが止まらなかった。懐中電灯を必死で探した。近所の人が「〇〇さーん、大丈夫ですかー」と外から呼んだので「大丈夫です。」と言った。

【女】お布団の中にいた。最初は少しの揺れだと思い安心していましたが、だんだん激しくなってきたので頭を押さえ、ちごこまりお布団に隠れた。⇒ 立ち上がり、電気をつけようとしたが、つかなかった。その後、父が2階に上がってきて、外に出るように指示したので、急いで下の玄関に行き、出ようとしたが開かなかった。ので別の所から出た。その後車の中に入った。

【男】小さい揺れで目を覚ましてすぐに、大きな揺れがきたので布団をかぶってじっとしていた。ベットごと動いているのがよく分かった。⇒ 雨戸を開け窓を開けて出口を確保していつもの扉から出ようとした。でも暗いしタンスも倒れていて思うように進めなかった。父が僕を呼びに来た階段を下りて、玄関が開かなかった。ので母の部屋から出た。

上大市5丁目

【男】地震発生時は5時46分くらいだ。ガラスが割れ、壁が斜めになるのが分かった。⇒ 家の外に出て、親父がガスの元栓を閉めた。近所数件。メガネを家の中に取りに行った。

【女】自宅の二階で寝ていた。何が起こったか全く分からず、ただ怖いと思った。布団の上に何かが倒れてきて、とても重かったのでひどいことだと思った。一階の両親が心配するだろうと思って揺れている間は、ずっと大きな声を出して生きていることを知らせてと安心させようと思った。⇒ とても重圧感があったが、一階に下りて逃げなければいけないと思い、体中の力を入れておき上がろうとした。布団の上に倒れたものがあつたので起きあがれなかった。そこで無理に動くで倒れかけているものも倒れてきて、もっと逃げれなくなると感じたので、一階の両親を呼んだがその声が届かなかったのか来てくれなかった。どうにかして逃げようと考え、頭の上に手をやると箱らしきものがあつた。それをどけると何もなかった。ので頭からはうようにして逃げ出て一階に下りた。

【女】“空飛ぶじゅうたん”にのっているようだった。じゅうたんが布団で私は枕で頭を押さえていた。自分の家、部屋が信じられないほど左右に揺れて恐ろしかった。パタパタと物が落ちて、私の布団の上にもデッキとタンスが倒れていた。ので動けなかった。30秒ほど揺れていたと言うけど、私は一瞬のように思った。揺れている間、頭を守ること。で精一杯でまさかこれが大死者を出す地震なんて思わなかった。少しおさまった。でもずっと揺れている感じがした。揺れていたとき、左にあった大きなタンスに何度もぶつかった。もうほんとにすごかった。⇒ 父と母の音が隣の部屋から聞こえ、ものに埋まったせいでなかなか返事ができなかった。ベランダの方から父が来てくれたけれど鍵を閉めていて、母もドアを開けようとしたけど、物が落ちていて開けることができなかった。やっとすき間をくぐってベランダからとなりの部屋に行った。そこもすごかった。まずは電気をと懐中電灯を探そうとするけれど、一歩出るとガラスだらけで全く見えないので恐かった。何にも考えられなかった。ラジオではそんなにたいした地震ではないって言ってたからうそ言えと思った。

【男】地震が発生したときには眠っていました。地面が揺れている間僕は眠っていて、地震が小さく鳴り始めたぐらいの時に目が覚めました。はじめは何が何だか分からなかった。後から分かったようなすごい地震とは思わなかった。⇒ 揺れがおさまった直後、その時初めて今さっき起こった地震の恐ろしさを知った。机は倒れて本はめっちゃくちゃ、僕の寝ている頭の横には29インチのテレビとスピーカーが落ちていた。一つ間違えば死んでいた。と思ってその時「ほっ」とした。

段上町1丁目

【男】立ち上がって怖さのあまり気が動転して「もうやめろ!!」ってどなった。それ以外には何もできなかった。⇒ 兄の無事を声で確認してどうしたらいいのか聞いた。「とりあえず外に出ろ」って言われたから二階だったけど窓から外に出た。そして一階で寝ていたおばあちゃんとお母さんとお父さんを探しに行った。「声だして」って僕が言ったらお母さんとおばあちゃんはがれきの中から声を出した。兄にお父さんの部屋を見に行ってもらった。3人とも生き埋めになっていたんだ。「助けてえ、助けてえ」と苦しそうに呼ぶお

母さんとおばあちゃん。家がつぶれて壁がかぶさって僕一人ではどうにもできなかった。・・・少したってお父さんが自力ではい出してきた。救急車を呼んでこいと言われて電話しようと道へ出たら両側の家がつぶれて通れなかった。畑を通してサンクスへ行っても電気も電話もダメだった。⇒ とりあえずサンクスにいた人に「助けて下さい」と言って家まで来てもらおうとしたが、僕の家につくまでの間に「ここに人がいるんです」って言われて他の家に助けに行っちゃって家についたらもう二、三人になっていた。「助けてえ・・・ここだよ」って聞こえた。まわりを見たら真っ黒だった。「誰か助けて下さい！おばあちゃんとお母さんが埋まっているんです。」って当てもなく叫びまくった。つぶれかけて倒れかけのアパートから逃げてきた人たちに助けを求めた。お母さんは二階と一階の屋根の間からはい出してこれた。おばあちゃんは完全に埋まっていたけど十何人かの助けに来てくれた人のおかげで壁をどかし、屋根をつぶし、タンスを持ち上げてなんとか引っぱり出すことができた。そこではじめて、怖さと家族の命が助かったうれしさに涙が出そうになった。⇒ 近所でたくさんの人がまだ埋まっていると聞いて兄と一緒に手伝いに行った。無事だった人もやっとの思いで助かった人も必死になって人命救助にあたっていた。お母さんは脇腹、おばあちゃんは足と腰を痛がっていたので近所の医者を呼んできて診てもらった。中央病院に連れていった。大勢の人がけがをした。おばあちゃんは入院することになった。お母さんは肋骨が折れていたのに入院できなかった。もっとひどい人がいるからだった。お母さんはおばあちゃんに付き添うことにした。夜は兄と僕とお父さんでつぶれた家の中から鍵を探し出して車で寝た。全然寝れなかった。余震がたくさんきた。怖かった。

段上町3丁目

【男】最初は何が起こったか分からなかったが、いきなり縦に揺れるのを感じ、とっさに布団の中にもぐった。それから横に20～30秒揺れていてとにかくおさまるまでずっと布団の中にもぐっていた。それから数分後にもう一度余震があったのを覚えている。幸いマンションの一階であったので上の階よりは揺れは小さかった。⇒ しばらくして母の声が聞こえた。両親は南の畳の部屋に寝ていたが、幸いけがもなく無事だった。それから母が懐中電灯を取りに行き、それを僕に渡してくれた。明かりをつけると本棚に置いてあった本などが見事に下に落ちてばらばらになっていた。僕の部屋はあまり広くないが、物が落ちてこないところに寝ていたのよかった。

【女】“ドーン”って感じの地響きがして目が覚めた。つくりつけの本棚の本が落ちてきて、気のせいかもしれないけど、ちょっとからだが浮いたような気がした。横に揺れるというより上下に動いているような感じだった。下の部屋から食器の割れる音とか聞こえてきて、揺れは自分では結構長く感じた。⇒ 目が暗いところになれてなくて、とにかく起きたら本やらものやらが布団のまわりに散乱しているのが手探りで分かった。電気スイッチをつけてもつかなかった。私の部屋はフローリングだったので机やタンスなどの家具は倒れていなかったがかなり移動していた。姉や両親の部屋は本棚やタンスが倒れて3人ともその下敷きになっていたけどなんとかぬけられた。

【女】揺れている最中に目が覚め、一度起き上がったけれど、危険を感じたので、とりあえず揺れがおさまるまで布団の中でじっとしていた。ベッドの上に寝ていたが、ベッドは上下左右前後に、まさにたてたてよこよこといった感じに大きく揺れ（上下の場合は跳ねてる感じ）、床がフローリングだったため、ベッドが良くすべって壁にガンガン何度もぶつかった。音はすさまじく、ゴウンゴウンと、かき回された気分だった。⇒ 両親の部屋が遠いので、とりあえず大声で叫んで、二人とも生きていることを確認した。手探りでベッドの横に置いて合ったスリッパを見つけてはき、手探りで部屋中の電気器具のコンセントを抜いた。それからベッドの側に置いてあった懐中電灯を探し、自分の部屋を出て家中の電気器具のコンセントを抜いた。両親も大きな懐中電灯を見つけだし、飼い猫の安否の確認（2匹）、ガス等の確認。その後水ものの処理（マンションだからほんとくと下に漏れる。）

【男】はじめは夢かと思っていた。でも目が覚めても揺れていたもので何が何だか分からず、揺れているときはもちろん何もできなかった。布団の上で四つん這いになっていた。⇒ まだ何が何だか分からなかった。しばらくの間、一つも音や声がしなかったので、自分の部屋だけ何かなったのかと思っていた。それと同時にま

ず電気を付けようとしたけど付かなかった。そして親が大丈夫かということをやっていたのが聞こえたので地震だと分かった。そして部屋を出ようとしたけどタンスの上から落ちてきた物でドアが開かなくてあせった。

【女】熟睡していたので、目が覚めたときは何が何だか分からず、とりあえず布団の中にもぐっていた。ちょうど頭の後ろに大きなタンスが並んでいたけど、南北に大きな揺れがあったので、西側に置いていたこのタンスは倒れずにすんだ。そのかわり、そのタンスの上に置いてあった段ボールやスーツケースが全部落ちてきて、布団の上からでも痛かった。食器棚が倒れて食品の割れる音や押し入れの中の物が出る音がすごかった。後で見ると、何百Kgもあるピアノの方向が変わっていた。⇒ たまたま起きていた父が助けにきて、家族全員、まず破片のない布団の上に集まった。すぐに父があるだけの懐中電灯を持ってきて、みんな着れるだけ着込んで（靴下もたくさん）、ガスの元栓を閉めてラジオと車のキーを持ってすぐに外に出た。ドアを開けるとすごいガスの匂いがして、マンションの人たちで1軒1軒確認しあった。うちはしっかりしたマンションだったので地割れだけですんだけど、前にある一軒家やアパートがバタバタ倒れているのを見て、すごく怖くなった。

段上町8丁目

【男】最初どんとどんと上下に揺れて目が覚めて、何秒かして横に揺れるようになって止まるまでずっとベッドの上で揺られていた。⇒ おさまったので家の外に出た。こんなにすごいことになっているとは思わなかった。ので、家のひびとかあるのを発見して結構驚いた。

【男】グーラーグーラーといって揺れた。揺れが大きい。外が光った。早くおさまってくれーと思った。⇒ 眠気が全くなかった。懐中電灯がなかったので追いつけよよかったと思った。この世の終わりを少し感じた。

【女】揺れてすぐ目が覚めて“地震!!”と思ってとりあえず布団の中にもぐってたんだけど、何が何だかよく分からなくて、布団の中で何を考えていたかは思い出せない。けど、ベッドごと前後に床の上をずるずる動いて揺れていたよーな感じ。⇒ 真っ暗で何も見えないし、けどそんなにたいした地震じゃないかなーって思ってた。けど布団の中にちぢこまってもぐってて、おさまったから頭を枕に・・・と思ったら何かつかえてて、さわってみたらベッドの上に置いてたCDラジカセが落ちてきててちょっとびっくりした。そのままぼーっと寝てたら・・・。

【女】5：45と言えばぐっすり寝ている時間。揺れはじめはまだ体自身が目覚めてないので、私には短い地震のように感じられた。でも揺れ方ははんぱじゃなかった。揺れてるときはただひたすら布団にもぐっていた。横揺れと縦揺れが同時で布団の上で体が横にメチャクチャ揺れていた。横よりも縦の方が怖かった。とにかくものすごい音で今でも耳からあの音は消えない。⇒ 揺れがおさまって私の家自体は無事だったが、布団から出ると足の踏み場がなく、あらためて大きな地震だったことに気付いた。食器が全て食器棚から飛び出し割れていた。真っ暗ですごく怖かった。外を見ると向かいのアパートは倒れ“助けて”という声さえ聞こえてきた。まわりの家はななめに傾きつぶれていて、自分の家がつぶれていないせいもありこんなにひどいとは・・・とあ然となった。もし自分の家もつぶれていけばちゃんと逃げれたのだろうか？私の家は被害が少なく、建物の向き関係などでタンスも食器棚も倒れなかった。

田近野町

【男】16日に遊びに行っていたので地震が起こった時はとてもよく眠っていた。家具が布団の上に倒れてきたので目が覚めた。本が顔の上とかに落ちてきて痛かった。目が覚めても30秒ぐらい揺れてる感じがした。揺れは機械で素早く上下に動かされているみたいだった。暗がりの中窓が丸くなっている感じがした。地震が起こっているときは逃げようとか考えられなくてただ布団の中で早く終わってくれと祈るように思っていた。⇒ 地震がおさまってまわりを見ると家具とかが全部倒れてきていた。まず布団から出ようと思ったが家具が重くて出られなかった。手が自由だったのでまわりの物をどけようとしたが倒れた家具がじゃまなようにできず、しかたなく顔のあたりからするするっとうなぎのようにして外に出た。まず親が心配だった。もし無事だったら、ここに入ってくるなり大声で叫ぶとかをしていると思ったからだ。僕はあわててド

アを開けようとしたが家具がじゃまで開かない。ベランダから父の所へ行った。部屋に行くと父の姿はなくもう会社に行ったあとだった。ひと安心した。

仁川町3丁目

【女】自分の部屋のベッドの中で起きていたので、揺れがきたときとっさに地震だとは思ったが、揺れたと思ったとたんつけていた電気が消えた。とても揺れが激しく動けず布団を頭からかぶって、じっとしていた。縦揺れはあまりよく覚えていないが、横揺れは乗り物に乗っていて曲がる時横に投げ出されそうになるようなそんな感じがした。少し揺れがおさまった時に隣の部屋で寝ている父と母の所にいった。⇒ まずは懐中電灯をつけて、私は母と二階でじっとしていた。父は一階にガスの元栓を閉めに下りていった。そしていつでも外に出れるように服を着込んだ。スリッパを出してきてはいた。窓を開けるとものすごくガス臭かった。隣の家に人と無事を確かめあった。

仁川町6丁目

【男】二階建てのベッド上で寝ているときに、ドーンとしたから何かがぶつかってきから揺れはじめて、布団にもぐり込みながら揺れがおさまるのを待っていた。二階のベッドの上だったのでベッドの上から飛び出そうだったから、しっかりつかまっていた。⇒ 揺れがおさまったら、薄暗かったので電気を付けようとした。停電していたから懐中電灯を探しに家族のところに行った。無事を確認して次にくる地震にいろいろと備えた。

屋敷町

【男】恐ろしかった。今まで生きてきた中でもベスト3に入るくらい怖かった。何が起きているのか分からなかった。最初夢の中のできごとだと思っていた。部屋の中のタンスや本棚が倒れる音で目が覚め、現実のことだと分かった。揺れがおさまるまでの間、布団をかぶり体を丸めていた。目が覚めてから揺れがおさまるまでほんの10秒ほどだったと思うが自分にはとても長く感じられた。普段は避難訓練などと言っているがいざこんな大きな災害がくると人間は何もできないのだと感じた。⇒ 揺れがおさまったあとのことははっきり言ってよく覚えていない。とにかくまだ揺り戻しがあるかもと言う不安からしばらくの間は布団の中にもぐり込んだままだった。部屋の中がめちゃくちゃになっていて、いっそう恐慌を感じた。部屋の中と同じように頭の中もめちゃくちゃでどうしたらいいのか考えられなかった。家のまわりがしだいにザワザワしてきた。

川東町

【男】17日午前5時46分、激しい揺れが安眠中の私を襲った。地面から突き上げるショックで私はとっさに布団の中にもぐり込んで丸くなった。その時、私は目を開けることができず、心の中で「これは大きいな…もし家（マンション）が倒れたら死ぬかもしれないな…」などと思った。タンスなどが倒れてきたが、布団のおかげで痛みを感じなかった。揺れは30秒ぐらい続いたみたいだが、私はもっと短く感じられた。ともかく、その時はじっとしているより他に手がなかった。不思議に、死の恐怖は感じなかった。「ああ、これで死ぬんだな…」ぐらいにしか考えていなかった。するとまもなく揺れがおさまった。⇒ 揺れがおさまると、私は起き上がろうとしたが、タンスが上にあった。はい出ようとしたが、体が本調子でない（起きた直後のため）タンスをのける力がなかった。隣で寝てた兄が起き上がるのが見えたので、兄にタンスを動かしてもらって出た。最初はどのようにいいか分からなかったのでもう一としていたが、ともかく明かりを探そうと、懐中電灯のある部屋へ行こうとした。兄はすでに母と妹のいる部屋に行っていた。私は冷蔵庫などが倒れたキッチンを通り抜け（下はガラスが散乱していた）、倒れた本棚の上を通ったりして机にたどり着き、懐中電灯を探し出した。それをつけて、家族全員の無事を確認した。

宝生が丘1丁目

【女】揺れているときずっと布団の中にいた。はじめガタッと言う音がして目が覚めた。そうして天井を見ると電球がすごく揺れていた。その次に右を見ると本棚が激しく揺れていた。そうして本棚が布団の上に倒れてきた。⇒ 本棚が上にのっけていて動けなかった。のけてもらってしばらく廊下にいるとまた揺れていた。階

段は泥だらけだった。割れている花瓶もあった。

【女】地震発生時は、真っ暗で動かれる状態ではなかった。とにかく、身を守るため布団をかぶりじっとしていた。その時、本棚が足元に倒れてくるのに気付き、身を縮めた。足がちょっとはさまれたが、すぐ自力でとれた。揺れがましになると母が私の部屋へ入ってきて、一番物のない安全な部屋へと移動し、そこで地震がおさまるのを家族4人で待っていた。⇒ まず、真っ暗だったので懐中電灯を探した。どこにあるかは母が知っているが、母も興奮していたため、すぐには思い出せない。うっすらとしかまわりが見えなかったが、なんとか懐中電灯を見つけだした。次はラジオを探した。ラジオはどこにしまったか忘れてしまっていたためにすぐに見つけることはできなかったが、15分後にやっと見つけることができた。家族4人でリビングに行き、ラジオを聞いて夜が明けるのを待った。

宝生ヶ丘2丁目

【女】地震が発生したとき、私はベッドの上にいた。ベッドごと揺れていたのだから正確な揺れは分からない。本棚が倒れてきたけれど、私には当たらなかった。激しい揺れだったので、私は必死にベッドにつかまっていた。⇒ 父が隣の部屋から、私と弟の名前を呼んでいた。私は返事をしたけど隣の部屋の弟の返事がないので、私は弟の部屋に行こうとした。私の部屋のドアを開けたらドアを出たすぐの所に置いてた本棚が倒れ、中身が全部出て通れる状態ではなく、しかたなくドアを閉め、壁をたたいて“大丈夫ー？”って聞いたらこんどは返事がありほっとした。

【女】私は17日に社会のテストがあるため起きていた。寒くなってきたので5時頃ベッドに入り、ベッドの中で単語を書いている用紙を見ながら最後の仕上げをしていた。眠くなってきた、うとうとを通り過ぎて寝てしまったちょうどその時に地震が起きました。怖かったけど、すぐおさまると思いました。しかし、終わるところからどんどん大きくなってきて、妹が私の名前を呼んでいるのに、怖くて何がどうなっているのかわかんなくて返事もしませんでした。とにかく布団の中で震えてました。そして何かが倒れるのと同時に、電気の明かりが消えました。⇒ 揺れがおさまると同時にすぐ父がきて、ベッドの下にいなさいと言われたので、私と妹二人はベッドの下に隠れました。普段ベッドの下には小さなタンスなどが置かれてたのですが、全部外に出しました。暗くて何にも分かんなかったです。私はベッドの中にもぐっていたので分かんなかったけど、上から二人目の妹は目を開けてその光景を見てました。鏡台が倒れてきて、電気が消えたみたいで。そんな話をしていると、家の中は危ないと言うことで、外に出ることになり外に出ました。

【女】寝てた時でしかもベッドがすごい揺れてトランポリン状態、身動きできずタンスが倒れてきて、ガラスだらけ……。たんこぶ、打ち身ですんだけど、揺れているときは布団にくるまってわめいていた。布団のおかげでけがは少なかった。ベッドの縁のおかげでタンスのすき間から救出。とにかく怖かったです。⇒ 家族みんなが外に出た、あー、お父さんはガスの元栓を閉めて、近所を調べた。懐中電灯を一人ずつ持った。

生瀬東町

【男】家で起きようとしたとき、まず上に突き上げられて、後は縦横にかなりの間揺れ続けた。僕は何が落ちてきても大丈夫のように布団をマット代わりにしたけど、頭だけ隠せなくて頭を切ってしまった。⇒ 僕が頭を切ったのを父が知って、家のことなどかまわずにすぐに病院に連れていってくれました。しかし、電車の横転でけが人が多数出たため、病院はごった返していました。

【男】“ガタガタ”と家が軽く揺れたと同時に大きく家がきしみ、体が飛び跳ねた。上からはほんだな、ステレオ、テレビ、パソコン、机の上のもの全てが体の上に落ちて僕は身動きがとれなかった。ステレオとテレビが足の上、本棚が体を覆うようにのっかっている。揺れてる間、叫び続けた。自分の家がつぶれてるかと思った。それどころか今生きているのかどうかと思った。⇒ 揺れがおさまったときからだが動かなかった。隣の部屋で両親と兄貴の声が聞こえた。“典”。僕はできる限り大きな声で“動けへん”と言った。兄貴が助けにきてくれた。本棚をどけてくれ、ステレオもどけてくれ、かろうじて動けるようになった。そして懐中電灯を取りに行き、兄貴はガスを止めに行った。台所や客間などはガラスだらけだった。その後すぐ

外に出た。

【女】私はまだ自分の部屋のベッドの中で寝ていた。どうして地震に気が付いたのかよく覚えていないけれど、確か腕に近くに置いていた本箱がほんのちょっと当たったのだと思う。そしてすぐに窓側のベッドの端っこで小さくなっていた。部屋は真っ暗だったけど、窓から入ってくる光で蛍光灯がついているところが、とれそうぐらいグラグラ揺れているのが見えた。とにかく布団をかぶろうと思ったけど、倒れてきた本棚などがのって引っぱっても、ちっとも動かなかった。その時は他にどうしたらいいのか分からなくて、ただ真っ暗な中であのとてつもない揺れと何かが倒れる音が怖くてずっと叫んでいた。⇒ 私の部屋と妹の部屋はアコーディオンドアを挟んで、つながっている。その部屋に入るドアの前にはもうすでに父と母が到着していて、「大丈夫かー」「ますみちゃん」「今、行くからな」と言う大きな声が聞こえた。でも、そのすぐ後に「ドアが開かない」という声で、私は少し開いたドアからの懐中電灯の光を頼りに、床に散乱しているありとあらゆる物を踏みまくり、隣の部屋にたどり着いた。ドアをふさいで倒れ込んでいる本棚の板などを必死に取り除いて、ようやく部屋から脱出でき、家族全員が無事であることがわかった。とにかく助かってよかったと、家族全員が心から思った。

【女】もう何が何だか分からなくて布団の中でうずくまっていた。一瞬にして外の電柱の明かりが消えて真っ暗になってドドドって感じの音が揺れてる間してた。ほんとに死ぬんじゃないかと思った。⇒ もう真っ暗でとにかくベッドから下りて机の横にかけてあった懐中電灯を手探りで探した。それでお父さん達の部屋の方に行ったらお母さんがタンスの上のガラスの人形ケースが落ちてきたと言っていて、ちょっと顔にケガした。(たいした傷じゃなかったけど)それで懐中電灯でいろいろ照らして下に降りていったら、仏壇が倒れてたからお父さんが急いで起こした。その後すぐお父さんは近所のおばちゃんの所にすっ飛んでいった。そしてそのおばちゃん本棚があって出れなくてお父さんが助けてあげた。私はなんかボーと部屋を見て回った。

生瀬町1丁目

【女】ベッドで寝ていて揺れで目が覚め、大きな揺れが感じられたとき、なぜか分からないけど、布団をかぶらなきゃと思い、揺れがおさまるまでかぶっていた。そして親が「大丈夫か?」と聞いてきたのでその返事をした。⇒ 親が「まず下に降りよう」と言ったので、その指図に従った。そして電気が付かなかったのでもうそくを探して火をつけたり、ラジオを探して聞いていた。

【男】最初夢を見ているのかと思うぐらい揺れていた。ベッドで寝ていたので電灯が大きく揺れるなんてもんじゃなく、振り回されていたのをかすかに覚えている。あんなに激しい地震は初めてなので夢だと思って(しかもすぐやんだので夢から覚めたのかと思った)また目をつむってしばらくするといろんな声があったので目を覚ますと机が倒れていた。あまり整理をしていないので非常に重いはずの机が倒れた事実を知って後で恐ろしく思った。⇒ まず家族全員が居間に集まった。電気はつかないがガスと水が使えるのを確認して分かり、次にろうそくに火をつけた。ガスが漏れていると危ないけれどその時はそれどころではなかった。とても落ち着かなかった。

生瀬町2丁目

【男】「すごく揺れているな」と思いながら寝ていた。⇒ お父さんが無事を確認してきた後、寝ていた。

【女】布団の中にずっとうずくまっていた。ベッドが飛んでいるように動いた。いろんな物が上から落ちてきた。⇒ 一番丈夫と思われる部屋に、みんなでいた。父が外へ飛び出して、どうなったか聞いてた。その後ラジオをつけてずっとニュースを聞いた。サイレンみたいのが鳴った。

生瀬高台

【女】朝、5時40分過ぎ、そろそろ起きようかなあと思って少し布団の中でボーとしてたら、カーテンのすき間から、なんか空(外)がピカッと光ったのが分かった。寝ぼけてたし一人で雷か?とか思ってた瞬間・・・ガタガタッと。異様に長く感じた。思わず布団をかぶり続けた。無心になった。いろんな物の倒れる音割れる音が混ぜられ、さらにお弁当を作っている母の悲鳴に、隣の犬の吠える声が聞こえた。これが夢だったらと何度か思った。⇒ 真っ暗。電気を付けても付かない。ヒューズが飛んだというやつやなと思ってスリッ

パまで行こうとしたが、そこまで着くまでに何かガラスとか切りそうな気がして、朝日が出るのを待った。その後「光子大丈夫かー。」と父の声がし、ほっとした。暗闇に目が慣れてぼーとじーと見てたらかなりすごい状態なことが分かった。

【男】寝ていたら突然揺れ始めた。状況がよくつかめなかった。動くことができずに揺れがおさまるまで待った。軽いタンスとスピーカーが落ちてきた。⇒ 電気がつかず懐中電灯が一つしかなかった。ラジオで地震情報を聞いていた。

【女】二階で寝ていたら最初の揺れで目が覚めた。怖くて布団にもぐって目をつむっていると体が大きく揺れて、まるでゆりかごにのって振り回されているようだった。そのうち、頭の上にあった大きなタンスが落ちてきて息苦しくなった。とにかく怖くて、布団の中で小さくなって「どうなっちゃうんだろう。」と考えていた。⇒ タンスをのけようとしたけど重たくて、はいずって横から抜け出た。その後父と母が「大丈夫か。」と走ってきた。その後、1階に下りてたくさん服を着て携帯ラジオをつけた。玄関のドアを開けようとしたけど開かなかったため、居間の窓を開けて、じっとしていた。

花の峯

【男】まずドーンという音がした。本格的に揺れ始めたのはそれからだと思う。上に飾っていた風鈴がチリンと鳴り落ちてきた。ちょうど5時40分に目覚まし時計をかけていて、まだボケーとしていたときのことで、電気が故障したのか外がピカッと光り、大きな揺れがきたのでとっさに布団をかぶった。10秒くらいたったのだろうか、その間電球が揺れカタコト鳴って異様に不気味だった。⇒ 外が光り「こりゃ停電だ」と思った。まだ暗かったので「まあ一階においたら誰かおるやろ」と思っ一階に行くと、あれだけの揺れにもかかわらず、食器も家具も何も壊れていなかった。そして時計を見たときは5:50だったことを覚えている。そしてラジオをつけた。

【女】毎朝6時に起きるので「もう起きな」と思いながらも、3階のベッドの中で寝ていた。そしたらドーンっという音と同時に突き上げられるようになって、何のことか分からないうちに激しい揺れがきた。天井の電気が普段はまっすぐな状態なのに揺れると同時に、揺れにあわせて左へ右へとグラグラしながらぱっと消えた。⇒ 父が部屋にきて、夜が明けるまで父と母と姉といた。揺れがおさまって10分後ぐらいに大きな余震があった。その後も何回もある。家の周りの犬が吠えだしていた。すごく怖かったので地震直後は全身が震えていた。余震が起こってなくてもずっと揺れているような感じになった。

【男】2階で寝ていました。はじめの初期微動のような揺れで目が覚めその後激しい揺れがきました。とっさに布団をかぶりしました。1分ほど続き、途中窓まで行き外を見たら、宝塚の町に火花が散っているのが見えました。⇒ しばらく窓から外を見ていました。下で両親が起きてきたので下に行き、懐中電灯で家の中を見て回りました。電気はつきませんでしたが、ガスはついたのでお湯を沸かしてお茶を飲みました。水も出ました。

青葉台2丁目

【女】寝ていたら棚に置いてあったビンが落ちて割れる音がして、激しく横揺れがあった。しばらく何が起きたかわからなかった。揺れがおさまるまで布団の中にいた。⇒ ビン一つ割れた以外は何もなく、電気が切れていたのでもた寝た。

【女】5:43にはすでに起きていて、ラジオをつけて布団の中だった。なので地震だって分からなくてそのまま寝た。本棚の上の部分が倒れて上の物が布団の上に落ちてきたけど猫だと思っていた。気付けば停電のせいでラジオが消えていて、その時は幽霊だと思ってふるえてた。本当。⇒ そのまま寝たら、お兄ちゃんがタンスの下敷きになりかけていたらしく、叫んだので母が起きてきた。下の部屋におりてラジオを聞いた。全ての暖房がつかなかったので寒かった。

【女】とにかく怖くて茫然としていた。何も考えなくて単に揺れてる・・・とか思ってて“地震”という事すらよく分からなかった。布団をかぶることもできなくて壁のすみっこを見ていた。いつもより長いなあと思っていた。上の電気が落ちてこないかなとも、横の本棚が倒れへんかなとも思った。⇒ 怖くて声が出なかった。

横に寝ている妹に「大丈夫？」とか言ってた。下に寝ている両親の所に行こうかなとも思ったけど怖くていけなかった。しばらくして父が迎えに来てくれて3人で1階に降りた。階段の電気が揺れていて怖かった。1階の安全なところに4人でしばらくいた。余震がくる度に怖かった。犬も怖がってみたいでいつも玄関から上がってくることはないのに何度も上がってきた。

清瀬台

【男】寝ているときだったのでとてもびっくりした。最初何が起こったか分からなかったがとっさに布団をかぶって身を守った。布団の中で突き上げてくるような激しい縦揺れを感じて、この辺でようやくこれが地震であることを確信した。⇒ 布団をかぶる前までついていた部屋の小さな明かりが消えているのに気付いてこれはただごとではないと思って起き上がって、1階に降りた。ちょうど父が2階に上がってくるところで下へ降りろということだった。

【女】ベットの上でガタガタと揺れた瞬間、頭から布団をかぶって揺れがやむまでひたすら待っていた。怖すぎて叫ぶ声も出なかった。⇒ しばらくは怖くてまだじっとベットの上で布団にくるまっていた。しばらくしてから部屋を見渡したけど、どの家具も10cmくらい元の位置からずれていて、その時はっきり「今は地震だったんだ。」と分かった。

東山台2丁目

【男】激しく揺れて立ち上がれなかった。横にかなり揺すられた。長い間揺れていた。⇒ 部屋に置いていたカンなどが全て落ちて水槽から水がこぼれたりした。家具が移動していた。懐中電灯を必死で探して辺りを見た。

名塩

【男】ちょうどこの日はたまたま5時45分に起きて布団をしまおうとしたその時に地震が起こった。僕はたまたま小学校の時に地震の避難訓練のことを覚えていたので、比較的安全な学習机の下に入って地震が終わるのを待った。(この行動に関しては、自分がとても冷静であったと思っている。)そして、地震が終わると同時に停電したので(原因は変電所が落ちたので)しばらくの間、その場でじっとしていた。⇒ 地震が終わると同時に停電したので、しばらくの間その場でじっとしていた。4～5分すると母が僕の部屋に来て1階に下りて朝食を食べよう忠告をしたのでそのようにした。そしてテレビやラジオ、電話が使えないので震度が全く分からなかった。しかし、自分のウォークマンがラジオ付きなのに気付いて、そのラジオでなんとか情報をつかんだ。その地震の規模がとても大きいとは分かったが(自分のこのぼろ家が壊れなかったぐらいだから南の方は全く大丈夫だろう。)そう思って懐中電灯を使ってのんきに学校の仕度をしていた。

【男】17日はクラブ活動があったので、5時46分にはもう起きていた。地震発生時にはまだ布団の中にいたので、布団を頭までかぶってじっとしていた。20秒ぐらいずっと揺れていた。今まで生きてきた中で体験したことのないような揺れだった。最初は地震だとは思わなかった。まだ寝ぼけていたのでその他のことはあまり覚えていない。⇒ 揺れがおさまって布団から出ると、本棚から本がほとんど落ちていた。すぐに親がきて「布団の中に入っとけ」と言ったので、それから長い間布団に入ってじっとしていた。とりあえず学校は休もうと思った。電気も流れてないし、水も出ないし、自分が思っているほど大変なことになっているなと思った。

山口町

【女】ベットで寝ていて激しい揺れにおそわれ目を覚ました。机の棚の本が全て落ちた。何秒下の揺れだけどもっとも長いように感じた。私はずっとベットの中でじっとしていた。すごく驚いた。⇒ 部屋の中がむちゃくちゃになってしばらくしてから下におりていった(1階へ)ピアノや机が20～30cmぐらい移動していた。死ななくてよかったの思った。家も無事だった。

【女】そろそろ起きようとしていた。布団の中でじっとしていた。タンスが近づいてくるのや、物が落ちて割れるのが分かった。⇒ 部屋の中がむちゃくちゃだった。停電したのでそのままもう少し寝た。

学校現場に於ける危機管理について

教頭 平 源 光

阪神・淡路大震災で本校の生徒・職員に一人の犠牲者も出なかったことは何よりの幸運だった。しかし、校舎の損壊状況を見ると、もし、あの大震災が教育活動の最中に起こっていたらどんな状況になっていたか。僥倖というか誠に不幸中の幸いだったとしかいいようがない。大地震が起こったとき、学校はどんな状況になるのか、周りはどんな状況になるのか、我々は阪神・淡路大震災ではじめて知った。また、震災の被害を少しでも小さくするためには、様々なレベルでの様々な対策が必要なのことも痛感した。今回のような大地震が教育活動の最中に発生した場合に備えて、学校に於ける日常の対策はどうあるべきか、大地震が起こったときにはどう対応すべきか。学校に於ける危機管理について考えてみたい。

1. そのとき学校では

平成7年、1995年、1月17日未明5時46分に兵庫県南部地震、阪神・淡路大震災は起こった。地震発生時に学校にいたのは警備員のY氏だけである。Y氏から聞いた地震発生時の様子から述べてみる。

Y氏は、いつものように午前5時過ぎには校内巡視を終え、異常がないことを確認したついでに、校門を開け、校舎出入口のシャッターを上げ、職員室・事務室などの鍵を開けた。警備員室に戻りシャワーを浴びようとしている時だったという。突然、地鳴りというか不気味な轟音とともに床に叩きつけられた。「あれ？」と思う間もなく大きな横揺れに襲われた。食器戸棚など周りの物が倒れ、火のついたガスストーブが床を激しく動き回った。追いかけるようにしてガスストーブを捕まえ、後はガスストーブとの格闘だったという。揺れが収まりしばらく呆然としていたが、職員室の方で崩れ落ちるすごい音がしたので思い出し、職員室の方へ行ってみた。大きな連絡ボックスが倒れて入り口を塞ぎ、中に入ることはできなかったが、奥の方に天井が落ちてきているのが見えた。大変なことになっていると思い、らせん階段を降りて外に出た。渡り廊下の両側が沈み大きな段差ができていた。A棟東側の1階部分が崩れ、2階から上の階が半階ずつ下にズレ落ちた形になっていた。B棟も東側が大きく損壊していた。校門では、先ほど開けたばかりの門扉が倒れていた。その時、近隣住民と思われる男の人数人が走ってきて「体育館を開けてくれ」と言ってきた。「みんなこんな状態ですよ」と言いながら体育館の方と一緒に走ってみた。体育館の周りにはガラスの破片が散乱し、西側の支え柱がはずれて今にも倒れそうな状態だった。「これはダメだ」と言って男の人たちは校門から出て行った。グラウンドには近隣住民14、5人が集まっていた。そうこうしている内に7時頃か、近くに住む本校の職員3人が駆けつけてきた。それからしばらくして、校長をはじめ一般の職員が次々と登校してきた。Y氏はやっと気分が落ちつき、事務職員に業務を引き継いで8時過ぎに帰宅した。

Y氏が帰った後だったか、グラウンドから「毛布はないか」と叫ぶ声が聞こえ、職員の一人が警備員室の毛布を届けてあげた。校長はどこか部屋をと思い、グラウンドで避難している人たちをB棟1階部分の教室に案内しようとしたが、周りの損壊が酷く余震が続く中恐かったのか、誰も教室に入る人はいなかった。

8時半頃から事務室前の中央廊下で職員打ち合わせを行った。そのときいた職員は、半数足らずの35名だった。「学校もこんな状態になってしまった」という校長の嘆きの言葉から始まり、しばらく休校措置をとること、生徒・職員の安否確認、生徒への連絡方法、重要書類の持ち出しなど当面必要な措置について打ち合わせた。グラウンドに避難してきた人たちは、いつの間にか中央体育館や広田小学校などの避難所に移動していた。

2. 学校に於ける日常の対策

(1) 建物の保守点検

学校は災害時には近隣住民の避難場所にもなる所であるだけに、校舎は丈夫に作られているはずだが、潰れて

しまった。しかも肝心の柱が何本も折れた。何故折れたのか素人には全く分からないが、いくつか気になったことがある。新池の東端からグラウンドを通りテニスコートの北まで延びていた断層状の割れ目のこと、進路指導室の北東角の割れた柱の中が空洞状になっていたこと、調理室などの特別教室が廊下を取り込んだ構造になっていたことなどである。それにしても、あの太い鉄筋が束ねられてグニャッと曲がった形で柱から飛び出しているのを見ると地震の力の凄さを感じずにはいられなかった。

校舎についての日常の対策としては、専門業者による建物の定期的な保守点検と必要な補修・補強及び改善を行うことを主張したい。改善という点で言えば、今回の地震で、窓枠をアルミサッシに替えた管理棟・教室棟・図書館棟の窓ガラスは、損壊した所以外は1枚も割れなかったのに対し、鉄枠のまま残されていた体育館の窓ガラスは一枚残らず全部割れてしまったことを指摘しておきたい。また、渡り廊下と校舎が激しくぶつかり合い、繋ぎ目の部分が損壊し、大きなコンクリートの塊が中庭に落ちていたことが気になった。恐らく、揺れ方の違う校舎と渡り廊下は、地震が起こった場合にその繋ぎ目の部分がわざと潰れるようにしてあると思うが、そのような所の下は植え込みなどをして人が入れないようにしておくべきではないだろうか。

専門業者による点検とまではいなくても、コンクリート壁の剥離は無いか、落下しそうな危険な掲示物などはないか、防球ネットの付け根は腐食したりしていないかなど、施設設備の日常的な点検整備を怠りなく行うことが大切であると思う。

(2) 備品類の設置方法の再検討

今回の地震では、ロッカー、棚、保管庫などの備品が殆どすべて転倒した。教室では後ろに置いてあった二段積みの生徒用ロッカーの上の段が教室の中央近くまで突き飛ばされていた。事務室では大型耐火金庫まで倒れた。各教科の準備室ではロッカーや本棚が入り乱れて倒れ、出入口を塞ぎ、全く無茶苦茶な状態だった。そこに人間がいるときだったら大変なことになっていたと思う。

日常の安全対策としては、日頃あまり使わない物は倉庫にしまい、部屋に置く物は必要最小限の物にとどめることである。特に、薬品類は薬品庫の中にしまい、外に出して置くことは避けるべきである。今回の地震でも薬品庫の中の作り込みの棚に並べられていた薬品は無事だったが、外の棚に並べてあった薬品は殆どすべて床に散乱しこぼれていた。設備・備品の設置については、地震があっても、転倒・落下・移動しないように、また、転倒しても避難経路を塞ぐことがないように、設置場所・設置方法の工夫をすることが大切である。たとえば、教室の生徒用ロッカーは二段積みをやめるとか、グランドピアノのキャスターは固定しておくとか、壁掛け時計ははずれても落下しないように紐を付けておくとかの工夫である。

(3) 火気の管理

今回の地震で、警備員のY氏は揺れが収まるまで「ガストーブとの格闘だった」と言っていたが、「ガストーブにキャスターが付いていなかったら、火事になっていただろう」とも話していた。キャスターが付いていたために、ガストーブはあちこち激しく動き回ったが転倒はしなかったということだと思う。現に、特別教室や準備室のガストーブはみんな転倒していた。当然のことながら、暖房器具などの火気は、ちょっとトイレに行くときであっても、部屋を空ける時には必ず消してから出ることを習慣化しておくべきである。また、火気を使う授業をする理科や家庭科の教室では、器具の設置方法を再考するとともに、必ず複数個の消化器を設置し、生徒にも折にふれてその使い方を指導しておくべきである。さらに、発火性のある薬品の保管管理についても、散乱したり発火したりしないよう注意が必要である。

(4) 学校に於ける常備品の例

今回の震災では校舎が損壊したため出入口の扉が開かない部屋が多かった。その時扉を開けるのに役だったのが、パール・ハンマー・大型マイナスイドライバーである。部屋の中に生徒や職員が閉じこめられて出られないでいる場合もあり得るから、これらは救出用具としても必要である。ロープは危険箇所を明示するために張ったり、

大きな備品類を危険箇所から引き出すのに役立ったが、これも救出用具にもなる。危険な箇所からロープに捕まってもらい、引き上げることができる。また、暗いときには避難誘導用にも使える。以下思いつくままに常備品のいくつかを列举しておく。

大型バール、大型ハンマー、ロープ、ドライバー、ペンチ、ナイフ、ヘルメット、懐中電灯、乾電池、タオル、毛布、救急箱、ビニールホース、ハンドマイク、メガホン、笛、旗、軍手、携帯ラジオ、トランシーバー、緊急連絡表、生徒・職員の住所録、筆記用具、ビニールシート、ポリバケツ、ポリタンク、カセットコンロ、電動ポンプ等。

(5) 避難訓練と防災教育

これまでは火災を想定した避難訓練を毎年1回冬季休業前に実施してきた。消防署の指導の下に、梯子車による救出訓練、消火訓練、煙体験などもその中に取り入れて実施してきた。大地震が起こることなどは全く考えていなかった。今回の大震災は12月の避難訓練を実施してから1カ月後に起こった。大地震は起こったら最後、全く逃げる時間を与えない。大地震が起こった場合は、まず各自が自分で判断して落下物やロッカー類の転倒から身を守ることが大事である。そのためには身を守る訓練が必要である。また、大地震発生時には、その場にいる者にしかその場の状況が分からない。職員自身が冷静に的確な指示ができるように、いろんな場を想定して考えておくべきだろう。さらに、どの程度の地震が発生したときに、たとえば「机の下に潜りなさい」と指示するかという問題がある。私は学校では震度4（中震）か震度5（強震）じゃないかと思っている。しかし、震度3（弱震）でも構わない。ただ、一人の生徒が震度3で机の下に潜ったりしても笑ったりせずに、「みんなで身を守る訓練をしよう」と言って、一緒に練習するようにしたらと思う。恐らく震度6（烈震）や今回の大地震のような震度7（激震）の場合は職員の指示どころではないと思う。震度は地震が終わってからしか分からない訳だから、わずか1分程度のことであるし、毎時間身を守る訓練をしてもいいのではないか。

学校に於いてはあらゆる場面を通して職員・生徒自らの防災リテラシーと緊急事態への対処能力を高めていくことが何よりも重要である。年1回の避難訓練もその一つの場面であると考え、これまでの「訓練火災発生、生徒は直ちにグラウンドに避難せよ」と放送して一斉にグラウンドに集合する形を改め、地震・雷・火事をはじめ風水害が起こった場合に、一人ひとりが自分の身を守るためにどんな行動をすればよいか、担任や授業担当者などその場にいる者が指導してから、グラウンドに避難させる形にしたらどうだろうか。

今回の地震では中央廊下と校舎の繋ぎ目部分が損壊して通行不能になった。避難経路については、かねてから幾通りかの経路を設定しておく必要がある。また、校内の防災組織には、若い男性の職員を中心とした救助係を追加しておくべきであろう。蛇足かもしれないが、災害時のサイレンは、災害があったことをみんなに知らせて避難させる意味では重要だが、逃げ遅れて救助を求めて叫ぶ声が聞こえなくなる場合もあることを考えておきたい。

(6) 各部署・各部屋に於ける対策

本校では、総務部が中心となって防災計画を作り、防災訓練を実施してきたが、今回の大震災は、各部署・各部屋での防災対策の重要性を認識させるものであった。震災後の復旧作業、3年生の進路指導、被災転校生の世話、引っ越し作業、被災備品の整理、心のケアなど、それぞれの部や委員会が主体的に積極的に動いてくれた。各部署では、震災時にどう対応してきたかをまとめて後生へ引き継いでいく必要がある。また、各準備室や特別教室、体育館、図書館、食堂など各部屋での災害時における対応や備品類の設置方法などを再検討するとともに改善を図っていかなければならない点も多かった。日常の対策は安全第一を考えた部屋の整理整頓につきるが、中には経費のかかるものもあるかと思う。図書館などでは実務を担当している立場から防災対策のための予算化を要望していくべきであろう。

(7) 生徒・職員の動静把握

今回の大震災では、生徒・職員の安否確認に膨大な手間とかなりの日数を要した。教育活動の最中に今回のような大震災が起こったならば、こんなに手間取ってはいは救出など後の対策が全く打てなくなる。当たり前のことであるが、毎時間毎時間その時間にいた生徒、いなかった生徒が誰か分かるようにしておくべきである。生徒に対しては、欠席や遅刻をする場合は学校に連絡すること、無断外出・無断早退をしないことなど日頃からきちっと指導していることがいざというときには非常に大事である。職員についても、周りの誰に聴いても、いたか、いなかったかが分からないようではどうしようもない。特に、今回の震災では各教科の準備室が一番危険な所のように感じたが、私ひとりだろうか。職員の生命の安全と動静の把握のために、準備室にいるのは授業の準備のときだけに限定し、職員室常駐も考える必要がありはしないかとも思った。しかし、今回の震災では職員室そのものが潰れてしまい最悪の状態だった。とにかく、周りの者に動静が分かるようにしていただきたい。

それにしても、日頃欠席がちな生徒が真っ先に電話してきて、本人自身と友達の安否を知らせてくれたことはとても嬉しかった。

(8) 避難所の開設・運営

前にもふれたように、当初、近隣住民 14、5 人がグラウンドに避難していたが、校舎の損壊状況があまりにも酷く他の避難所に自主的に移っていった。震災後しばらくは何故か 11 人の避難者がいるという情報が流れ、最初の救援物資であるパンと牛乳パックも 11 人分が配られてきた。各地からのボランティアも市西に派遣されたといって尋ねてきた。後になって、NHKなどの放送で訂正されたが、以後も知人の安否問い合わせの電話が全国あちこちからかかってきた。今回の震災では避難住民の受け入れはできなかったが、西宮市の新しい防災計画によると、本校は収容予定人数 1,070 人の上ヶ原地区指定避難場所になっている。平生から避難住民に開放する施設の優先順位を定めておく必要がある。体育館、食堂、ホームルーム教室の順が妥当であるが、食料など救援物資の保管場所や医務室も必要になる。昼間の時間帯に災害が発生すれば、生徒と住民と一緒に学校に避難するということが想定しておくべきであろう。今回の震災では避難所となった各学校の職員が活躍し住民から感謝されたが、避難所の設置・運営については全職員の協力が求められる。

(9) その他

修学旅行、オリエンテーション合宿、遠足など学校外での教育活動の下見をする際は、ホームルーム活動の場所をどこにするかなどだけでなく、災害が発生した場合に避難経路はどうなっているか、近辺に危険な所はないかなど防災の観点からも十分な下見を行い、引率職員全員に周知徹底することが大事である。

3. 大地震発生時の対応

周囲の柱が全部折れて、天井が落ちてきた、いやもっと正確に言えば、2 階から上がみんな落ちてきたあの家庭科の調理室で、自分が授業をしているときだったら、と誰しもがチラッと考えたのではないだろうか。調理実習であれば火を使っていたかも知れない。頭の上からは展示用のミラーが落ちてくる。自分が立っている所は滑り台のように斜面になる。窓は押しつぶされ、ガラスの破片が飛んでくる。出口も押しつぶされて開かない。第一出口まで斜面を登っていくこともできない。自分はようになっていたか。生徒にはどんな指示ができたか。生徒はどんな状態になったか。よくも昼間の授業中でなく未明の時間を選んで大地震は起こってくれたものだとしか言いようがない。

前にも書いたが、大地震は起こったら最後逃げる時間がない。慌てて逃げようとするとかえって危ない。まず各自の判断で机の下に潜るなどして落下物やロッカー類の転倒から身を守りながら、揺れが収まるのを待つ。揺れが収まってから、周囲の状況をよく確認して脱出を図る。自力で脱出不可能ならば、自分だけの小さな空間を確保し、エネルギーの消耗を抑えて、救出を待つ。これしか方法がないのではないか。この調理室の調査に来た大学教授は、一緒に連れてきた学生達に「腰窓（窓から下が壁になっている窓）がなかったら、天井がもっと下

まで落ちてきていただろう」と腰窓の重要性を話していた。腰窓のお陰で自分だけの小さな空間は確保できた訳である。しかし、ケガをしたり、恐怖のあまり泣いたり喚いたりする生徒が出るだろう。職員の役割は、「大丈夫だ、そのまましばらく待ちなさい」などと声をかけ、少しでも精神的に落ちつかせてやることである。

私は今回の大地震が発生したとき、別々の部屋に寝ている息子や娘に、名前を呼んで「大丈夫か」「大丈夫」と確認すると、「布団を被って収まるまで待て」指示した。私も布団を被ってじっと揺れが収まるのを待った。後から同僚の職員に聴くと「それはかえって危ない」と言われた。布団で窒息する場合もあるということだった。なるほどと思った。しかし、その時は頭の上からいっぱい物が飛んできていて、まず、頭をかばうことだと判断した。机の下に潜ろうにも、机の所まで行くことができなかった。指示や対応はその場その場に依拠して的確に行わなければならない例である。

大地震が起こった場合の対応の原則は、まず各自が自分で判断して落下物やロッカー類の転倒から身を守ることである。慌てずに、揺れが収まってから、周囲の状況をよく確認して、火災などの二次災害から避難することである。また、避難できた者は、ロッカーや棚の下敷きになって救出を待っている生徒、体が不自由で自力脱出ができないでいる生徒などの救出を急がなくてはならない。今回の大震災では、救急車は呼ぶこともできなかったし、また、救急車は道路が寸断されてなかなか現場まで行けなかった。近くにいる者で力を合わせて救出することが重要である。

4. 最後に

今回の大震災で本校は施設設備に壊滅的な打撃を受けたが、仮復旧・仮設校舎の建設など西宮市教育委員会の素早い対応に心から感謝申し上げたい。へとへとに疲れきった体でヘルメットを被り、懐中電灯を持って被災調査に見えたのは、確か、地震のあった翌日の夜10時過ぎだったと思う。インスタントラーメンを作って出したら美味しそうに食べていたのを思い出す。仮設校舎は、2階建て3棟40教室分は1月末に着工し、2月末に完成、3月1日に引っ越し作業、3月2日からホームルーム単位の正規の授業が再開できた。6月末には特別教室棟3棟40教室分も完成、7月からは実験実習の授業も出来るようになった。

また、震災直後からの復旧業務、引っ越し業務などに家庭を犠牲にしてご苦労いただいた多くの職員に心から感謝申し上げたい。中には自分の家が全半壊した職員もたくさんいた。さらに、今回の震災で、本校の運営協議会の素晴らしさを今更ながら痛感した。こうした緊急時に、多くの職員の協力を得ながら組織的に対応できたのは、運営協議会のお陰だったと思う。連日の運営協議会はまさに本校の災害対策本部だったと思う。各部主任・各学年主任の先生方が、一般職員が帰った後や日曜日にも学校へ出てきて危険な所からの重要書類や保管庫などの運び出しを黙々としていたことにも頭が下がる思いがした。

震災後の心を支える学校保健活動

北 口 和 美

I. はじめに

1995年1月17日に襲った兵庫県南部地震は、瞬時にして夥しい数の家屋の倒壊と5,500人以上の死者を出した。

この災害の大きさが明らかにされるにつれ、生命や身体への影響が一段落すると、その後には心の面への影響が生じてくだろうと盛んに警告が出された。しかし、地震が子供に及ぼす精神医学的影響について、これまで我が国ではほとんど報告されておらず、保健管理活動をどのように展開すればよいのか暗中模索の状態であった。幸いにも本校では、自動精神科医師の協力のもとに、災害後の精神的混乱や悪化を予防するための積極的な精神保健的介入を試みる事ができたので、その取り組みについて述べる。

II. 学校及び生徒の状況

校舎の大半が、全・半壊し、学校施設はほとんど使用不可となり、避難場所に指定されていたが、その役割を果たすことができない状況であった。

生徒は、1/5程度が自宅の損壊等により避難生活を余儀なくされた。幸いにも生徒の死亡者はなかったが、肉親を亡くした生徒が3名いた。また、授業料の免除生徒は実に全校の生徒のほぼ1/3にものぼっている。

III. 地震後の保健管理活動の実際

災害に遭遇し、著しい恐怖を体験して、肉親や愛着対象や家を失い、また避難生活などの過大なストレスにさらされた時、高校生にも当然精神医学的問題が生じることが予想された。そのような問題に対処するために、生徒の心身の健康実態調査、特に心的外傷後ストレス障害（PTSD）を考慮した調査を実施した。

(1) 調査対象及び人数

	学 年	1 年		2 年		3 年	
	性 別	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1 回 目	在 籍 数	165	153	158	163	180	173
	調 査 数	165	152	144	154	173	166
	調 査 数 合 計	317		298		339	
2 回 目	在 籍 数	166	153	152	166	178	166
	調 査 数	160	147	135	154	174	167
	調 査 数 合 計	307		289		341	

(2) 調査期日

調査は、地震2ヶ月後の1995年3月8日（一部は3ヶ月後の4月10日）と8ヶ月後の同年9月12日～14日の2回にわたって実施した。

(3) 調査方法

調査は2回とも同一調査票（表1）を用いて実施した。調査票は症状に関して、「はい」「いいえ」で答える項目の質問21項目であり、記名式とした。

調査にあたり、幼児や児童を対象にしたモデルは様々に提示されていたが、思春期・青年期を対象にしたものは皆無の状態であり、そのため京都市児童福祉センター児童精神科医の門眞一郎先生のご協力を得て、調査票を作成した。その際生徒の一般的な傾向を把握するだけでなく、個別指導につなげていけるよう、心的外傷後ストレス障害（PTSD）が心配される生徒がピックアップできるよう、DSM-4（米国精神医学会、精神疾患の分類と診断の手引き第4版）とICD-10（WHO国際疾病分類第10版臨床記述と診断ガイドライン）によるDCR-10（研究のための診断基準）を用いて、その診断基準に相当する項目を入れ、独自の調査票を作成した。

(4) 調査結果

① 全体的傾向

心の問題は個人差が大きい、ある共通の傾向も認められることが知られている。生徒の地震後のストレス状態について、全体集計したものを（表1）に示している。

（表1） 質問項目別回答状況

項 目	学 年		1 年						2 年						3 年					
	性 別		男			女			男			女			男			女		
	回 答		1回目		2回目	1回目		2回目	1回目		2回目	1回目		2回目	1回目		2回目	1回目		2回目
	回 答		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
1.地震の夢や思いを繰り返し見る。			0.6	0.6	2.0	2.0	1.3	1.0	4.9	0.7	6.5	0.7	5.7	0.7	2.9	1.7	6.0	1.2	4.4	1.5
2.地震のことが、何度も思い出されて怖い。			4.8	3.7	11.2	4.1	7.9	3.9	3.5	0.7	17.5	4.6	10.7	3.2	5.8	2.9	16.9	2.4	11.2	2.6
3.地震がまた起きたかのように錯覚することがある。			23.0	11.9	30.3	18.4	26.5	15.0	26.4	4.4	47.5	23.4	37.2	14.0	16.3	10.9	44.6	16.2	30.4	13.5
4.地震を象徴するような事や、地震に似たようなことがあると、 とてもつらい。			12.1	8.8	17.7	10.9	14.8	9.8	7.9	1.5	28.6	14.3	18.5	8.5	7.5	4.0	19.3	9.0	13.3	6.5
5.地震を象徴するような事や、地震に似たようなことがあると、 ドキドキしたり汗が出たり、めまいや吐き気がしたりする。			7.2	6.8	10.5	6.8	8.8	6.5	9.0	4.4	15.6	5.8	12.4	9.7	5.8	0.6	6.6	4.2	6.2	2.4
6.地震に関係する考えや気持ちや話は、避けようと努力している。			9.1	6.3	5.3	2.0	7.3	4.2	3.5	1.5	7.8	4.6	5.8	3.2	4.6	2.7	4.8	2.4	4.7	2.4
7.地震を思い出させる場所や人は、避けようと努力している。			6.1	2.5	4.6	2.0	5.4	2.3	4.9	3.0	7.1	4.6	6.0	3.9	3.5	1.7	3.6	4.2	3.5	2.9
8.地震の時のことで思い出せないことがある。			3.6	8.8	4.6	4.1	4.1	6.5	11.8	3.7	16.2	2.6	14.1	3.2	0.6	3.5	0.0	4.2	0.3	3.8
9.勉強や部活動などに興味もなくなり、やる気がなくなった。			7.3	6.3	8.6	4.8	7.9	1.5	36.1	14.1	31.2	8.4	33.6	11.3	28.9	10.9	22.3	5.4	25.7	8.2
10.他の人と心が通わなくなった。			0.6	0.0	0.0	0.7	0.3	0.3	4.9	0.7	0.6	0.0	2.7	0.4	2.9	2.3	1.2	0.6	2.1	1.5
11.地震にあうまでは愛情を抱いていた人や動物に、地震後愛情を 持てなくなった。			0.6	1.3	0.7	1.4	0.6	1.3	2.1	0.7	0.6	0.7	1.3	0.7	0.0	1.7	1.2	2.4	0.6	2.1
12.将来のこと（進学等）を考える気がなくなった。			4.2	3.8	2.6	3.4	3.5	3.6	14.6	5.2	7.8	2.0	11.1	3.5	8.1	5.2	12.0	4.2	10.0	4.7
13.食欲が落ちてきた。			5.5	3.1	2.6	4.1	4.1	3.6	4.9	2.2	5.2	2.0	5.0	2.1	6.9	5.8	4.8	0.6	5.9	3.2
14.以前よりも寝つきが悪い。			12.7	8.1	15.8	5.4	14.2	6.8	15.3	8.2	19.5	5.2	17.4	6.7	10.4	5.8	14.5	8.4	12.4	7.0
15.以前よりもいらぬように思われ、怒りっぽくなった。			10.3	3.8	9.9	3.4	10.1	3.6	15.3	3.0	15.6	2.6	15.4	6.3	9.2	5.8	11.4	4.2	12.4	5.0
16.以前よりも注意集中することが難しくなった。			7.9	5.6	10.5	6.1	9.1	5.9	25.0	6.7	22.1	2.6	23.5	4.6	15.0	6.9	18.1	6.6	16.5	3.8
17.すぐくしゃみをするようになった。			16.4	11.3	10.5	6.1	13.6	8.8	18.8	3.7	28.2	5.2	24.2	4.6	8.7	6.3	23.5	7.2	15.9	6.7
18.ひどく驚くようになった。			3.6	2.5	9.2	4.1	6.3	3.3	7.6	1.5	14.3	2.6	11.2	2.1	4.0	2.3	11.1	3.0	7.7	2.6
19.自分が生き残ったことで申し訳ない気持ちになる。			3.6	4.4	5.3	1.4	4.4	2.9	5.6	3.0	9.1	0.7	7.4	1.8	2.9	1.5	2.4	0.6	2.7	0.9
20.気持ちが沈んだり、ゆううつになることがよくある。			5.5	4.4	0.6	8.8	6.0	6.5	13.2	4.4	18.8	5.8	16.1	9.7	12.1	6.3	15.7	4.8	13.9	5.6
21.生きていてもおかしくないと思うようになった。			0.6	3.1	0.0	0.0	0.3	1.6	3.5	2.2	1.9	0.0	2.7	1.1	4.6	2.9	1.8	1.2	3.2	2.1

1回目の調査で訴えの多い項目は、(3)地震がまた起きたかのように錯覚する。(9)勉強や部活動に興味をもてなくなり、やる気がなくなった。(16)以前よりも注意集中することが難しくなった、をはじめとした、(17)(4)(20)を多く回答している。

2回目の調査では、(3)地震がまた起きたかのように錯覚する。(4)地震を象徴するようなことがあるとつらい。(20)気持ちが沈んだり、ゆううつになることがよくある。次いで(9)(14)(15)をあげている。

災害についての鮮明な記憶が意識の中に割り込んでくること、身の回りの危険を極度に警戒したり、災害に関する場面を回避すること、注意集中困難などがみられた。

男女の特徴をみると、「はい」と回答した数は女子の方が高い傾向を示している。男子は、外界に対する反応の低下・感情の麻痺、精神活動全体の麻痺、女子は緊張・不安状態の持続・錯覚や必要以上の警戒心をあげている。

学校・家庭生活が以前より正常化した2回目の調査では、勉強や部活動に関する意欲の減退、注意集中困難な状況を訴える生徒が大幅に減少している。

② 「はい」と答えた平均的回答数

(表2)に示す通り、同時期に調査した2・3年生では、2年生の方が多く回答している。震災後10週目にあたる入学直後に調査した1年生は、2・3年より少なく平均1.6項目であった。

2回目の調査では、各学年とも同じ平均1.0項目と、その訴えは減少し、明らかに全体傾向として、時間の経過とともにストレス反応は減少していくことを裏付けている。

(表2)「はい」と答えた平均回答数

学 年	1 年			2 年			3 年		
	男子	女子	平均	男子	女子	平均	男子	女子	平均
1回目	1.5	1.7	1.6	2.4	3.2	2.8	1.6	2.5	2.1
2回目	1.0	1.0	1.0	0.8	1.0	0.9	0.9	1.1	1.0

③ 住居環境別にみた回答状況

(表3)

平均回答数

学 年	性別	自宅外通学者	自宅通学者	学 年	性別	自宅外通学者	自宅通学者	全体
1 年 (49回生)	男子	17人	127人	1 年	男子	3.4	2.2	2.4
	女子	21	133		女子	4.5	3.6	3.2
	計	38	260		計	4.0	2.6	2.8
2 年 (48回生)	男子	36	131	2 年	男子	1.6	1.6	1.6
	女子	36	126		女子	3.5	2.2	2.5
	計	72	257		計	2.6	1.9	2.1

1回目の調査を、自宅の損壊等による自宅外通学者と自宅通学者の回答を比較してみると、自宅外通学者で、現2年生4.0項目、現3年生2.6項目。自宅通学者は現2年生2.6項目であった。自宅外通学者により高いストレス状態がみられた。

④ 「はい」と答えた回答数別人数

(表4)

1回目 上段人数・下段%

		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	…21
1年	男子	82 49.7	31 18.8	17 10.3	10 15.4	6 3.6	8 4.8	4 2.4	1 0.6	1 0.6	2 1.2	2 1.2	1 0.6				1 0.6
	女子	64 42.1	26 17.1	22 14.5	18 11.8	9 5.9	4 2.6	3 2.0		1 0.7	3 2.0	1 0.7	1 0.7				
	合計	106 46.1	57 18.0	39 12.3	28 8.8	15 8.8	12 3.8	7 2.2	1 0.3	2 0.6	5 1.6	3 0.9	2 1.6				1 0.3
2年	男子	47 33.1	21 14.9	20 14.2	23 9.2	14 9.2	9 6.4	7 5.0	2 1.4	4 2.8			2 1.4	1 0.7			1 0.7
	女子	26 17.3	27 18.0	21 14.0	18 12.0	13 12.0	16 10.7	8 5.3	9 12.2	6 4.0	1 0.7	2 1.3	3 2.0			1 0.7	
	合計	73 25.0	48 16.4	41 14.0	31 16.2	27 8.6	24 8.6	15 5.1	11 3.8	10 3.4	1 0.3	2 0.7	5 1.7	1 0.3		1 0.3	1 0.3
3年	男子	80 47.9	27 16.2	24 14.2	13 7.8	4 7.8	6 3.6	1 0.6	3 1.8	1 0.6	3 1.8	2 1.2	2 1.2	1 0.6			
	女子	39 24.1	33 20.4	27 16.7	17 10.5	12 10.5	11 6.8	11 6.8	6 3.7	1 1.2		3 1.9		1 0.6			
	合計	119 36.2	60 15.3	51 15.5	30 9.1	16 9.1	17 5.2	12 3.6	9 2.7	3 0.9	3 0.9	5 1.5	2 0.6	2 0.6			

2回目

		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1年	男子	102 63.8	21 13.1	12 7.5	7 4.4	4 2.5	7 4.4	2 1.3	3 1.9	1 0.6	1 0.6						
	女子	88 59.9	23 15.6	14 9.5	10 6.8	5 3.4	4 2.7		1 0.7		1 0.7	1 0.7					
	合計	190 61.9	44 14.3	26 8.5	17 5.5	9 2.9	11 3.6	2 0.7	4 1.3	1 0.3	2 1.3	1 0.3					
2年	男子	88 65.2	26 19.3	9 6.7	4 3.0	3 2.2	1 0.7		2 1.5		1 0.7	1 0.7					
	女子	88 57.1	26 16.9	20 13.0	7 4.5	5 3.2	5 3.2		2 1.3		1 0.6	1 0.6					
	合計	176 60.9	52 18.0	29 10.0	11 3.8	8 2.8	6 2.1		4 1.4		2 0.7	2 0.7					
3年	男子	122 70.0	21 12.0	11 6.3	5 2.9	4 2.3	2 1.1	4 2.3	2 1.1			1 0.6			1 0.6		1 0.6
	女子	101 60.5	29 17.4	10 6.0	10 6.0	6 3.6	4 2.4	1 0.6	2 1.2	1 0.6	2 1.2	1 0.6					
	合計	223 65.4	50 14.7	21 6.2	15 4.4	10 2.9	6 1.8	5 1.5	4 1.2	1 0.3	2 0.6	2 0.6			1 0.3		1 0.3

特に気になることはないという項目全てに「いいえ」と回答した生徒は、1回目1年生46.1%、2年生25.0%、3年生26.2%であり、2回目では、1年生61.9%、2年生60.9%、3年生65.4%で、8ヶ月後には、半数以上の生徒が平常の状態が維持できた。

⑤ PTSDが心配される生徒

2回の調査で、DSM-4、ICD-10のいずれかでPTSDの可能性があると判定された人数は(表5)の通りである。

<PTSDピックアップの基準>

ICD-10の診断基準

- イ、Q1～Q3のうち1つ以上
 - ロ、Q6、Q7のうちどちらか、あるいは両方
 - ハ、Q8又はQ14～Q18のうち2つ以上
- のいずれも該当する者

DSM-4の診断基準

- イ、Q1～Q5のうち1つ以上
 - ロ、Q6～Q12のうち3つ以上
 - ハ、Q14～Q18のうち2つ以上
- のいずれも該当する者

地震の2～3ヶ月後に行った1回目の調査では、3学年の合計が30名、対象生徒数が954人に占め

る割合は3.14%であり、8ヶ月後の2回目の調査では3学年合計して9名、対象生徒数937人に占める割合は0.96%であった。2回とも男女の差は認められなかった。また、2回とも該当した生徒は3名であった。

(表5)

(単位人)

1回目 (3月)	1 年		2 年		3 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
ICD-10	6	2	4	9	0	2
DSM-4	2	2	5	2	2	1
両方に該当	1	2	3	1	0	0
合 計	7	2	6	10	2	3

2回目 (9月)	1 年		2 年		3 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
ICD-10	1	0	1	1	2	1
DSM-4	0	0	1	0	2	2
両方に該当	0	0	1	0	1	0
合 計	1	0	1	1	3	3

(5) 調査結果を踏まえた保健指導の展開

学級担任には、2回にわたり生徒の回答状況を一覧表にして、当面の教育相談の資料として活用するとともに、学級指導等で体験等を通して相互理解の場を設定するよう依頼した。

1 回目

ご協力ありがとうございました。

調査結果について、各生徒の状況を一覧にしましたので配布します。生徒の置かれている生活環境と照らし合わせながら回答状況をご覧ください。なお、この調査は地震体験後の心的外傷後ストレス傷害（PTSD）についての調査を目的としています。回答数の多い生徒は、ストレスが高いことになります。1年生は入学して間もないので心身の状況が十分に把握できておりませんので、日常の健康観察（欠席・遅刻・早退等を含め）をお願いします。個別指導の必要な生徒は、別途保健室で健康相談を行います。

2 回目

2回目の調査結果を一覧しましたので、1回目の回答状況や生活環境とあわせてご覧いただき、日常の教育相談の資料として活用してください。心的外傷後ストレス傷害は、著しい心的外傷体験によって起こるものでありその意味では、あくまでも心因性、反応性の傷害です。様々な恐怖やつらい体験を自己から引き離して自分を守る心の働きは、精神の緊張によって維持されますが、それが長期に及ぶと様々な弊害が身体や精神機能に表れてきます。一般にPTSDは体験後1～6ヶ月後に表れると言われていますが、しばしば遷延化して慢性の経過をたどり数ヶ月から数年維持するケースもみられます。前回の回答状況と比較しながら、増加している生徒、また親を失うという喪失体験をした生徒については特に留意してください。また、(9)(12)(16)(20)等の精神活動の低下や無力感を訴える項目は、地震によるPTSDだけではなく思春期、青年期に多くみられる不安ストレスと関連している場合もありますので、日常の生活及び学習活動との関連とも比較してみてください。保健室においても、PTSDの心配される生徒は別途健康相談を実施しますが、その他心配される生徒についても共にサポートをしていきたいと思っておりますので、ご相談いただければと思います。

さらに、養護教諭としては、心的外傷後ストレス傷害が心配される生徒に対して健康相談を実施した。

心的外傷後ストレス傷害の心配があるとされた30名のうち、医療機関への紹介が必要であると判断したケースはなかった。

2回目の調査結果で心的外傷後ストレス傷害の心配される生徒9名の中には、親の死亡という深刻な喪失体験をした3名が含まれていた。また、家屋の損壊という家庭生活の大きな変化からくる両親のイライラや不和、父親の飲酒に関する問題からくるストレス、仮設住宅でピアノの練習ができないための進路決定上の不安など、相談の中で生徒の訴えは様々であった。

1回目の相談では、震災の直接の衝撃からくるストレスが目立ったが、2回目では震災による2次的問題からくる影響が、生徒の不安・ストレスとして表れてきていた。

しかし、高校生は幼児や児童と異なり、自分と同じ体験をした仲間と出会うことも多く、集団での相互援助がうまく行われ、リスクも思ったより多く克服しているといえた。

IV. おわりに

この調査独自の調査票とスクリーニングの基準から判断した場合、PTSDの「可能性がある」と考えられる生徒の割合は幸いにも予想を下回っていた。

しかも、精神科医が該当生徒の面接を行った結果、専門機関の受診を要すると判断された生徒が皆無であったことは幸いであった。

しかし、今回の調査を通して、医療ベースにはのらなかったが、様々な問題を抱えていることがわかった。震災による混乱から地域社会が表面的には平常さを取り戻し、震災で失ったものを自分たちの力だけで復旧させなければならない時に、被災者の悲しみや苦しみは個別化し、本当のつらさが始まるといわれる。

生徒を取り巻く大人社会の問題が生徒の心の問題として影響することを考えれば、社会全体の危機管理能力の向上による根源的なストレスケアがされなくてはならないように思う。

生徒達は、この震災を体験し多くのものを失いはしたが、この体験を通して、人間として生きていく上で、最も本質的なものを学んだことは間違いのないと思われる。

しかし、この体験が、様々な形で生徒の生活環境や情意面に影響していることを考えれば、よりきめ細かな学級指導や生徒指導の在り方を考えていかなければならない。

そして、学校保健面からも、生徒の心身の状態が、教育の効果を大きく左右する要因であることから、震災後の長期的、継続的な保健活動を展開させていく必要性を強く強く感じている。

震災後の心の変化についてのアンケート調査結果

PTA会長 榊 井 猛
学 校 長 大 森 良 剛

・アンケート項目 20項目

1 人間としての生き方	11 ボランティア活動
2 生命の思い	12 物の価値観
3 自然の力への思い	13 高齢者問題
4 水などへの価値観	14 近所付き合い
5 阪神地域へのイメージ	15 集団生活について
6 行政への見方	16 友人・親類との関係
7 公共施設について	17 家族の仕事の分担
8 学校が避難所だった事についての認識	18 進路について
9 家族愛について	19 学校生活について
10 食生活について	20 余暇の過ごし方

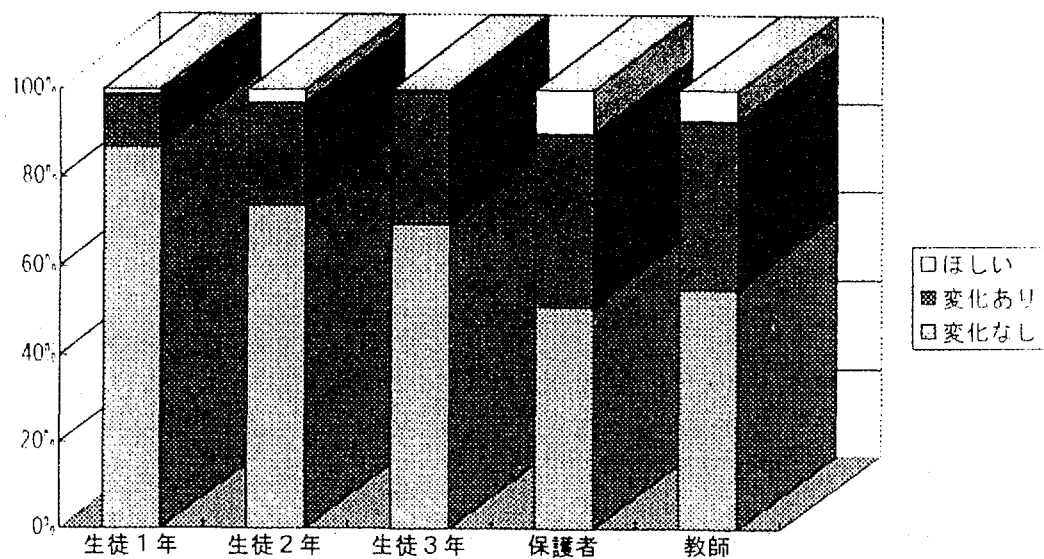
・回答 三者択一方式

- ① 変化なし
- ② 変化あり
- ③ 変わって欲しい（グラフでは『ほしい』と表示）

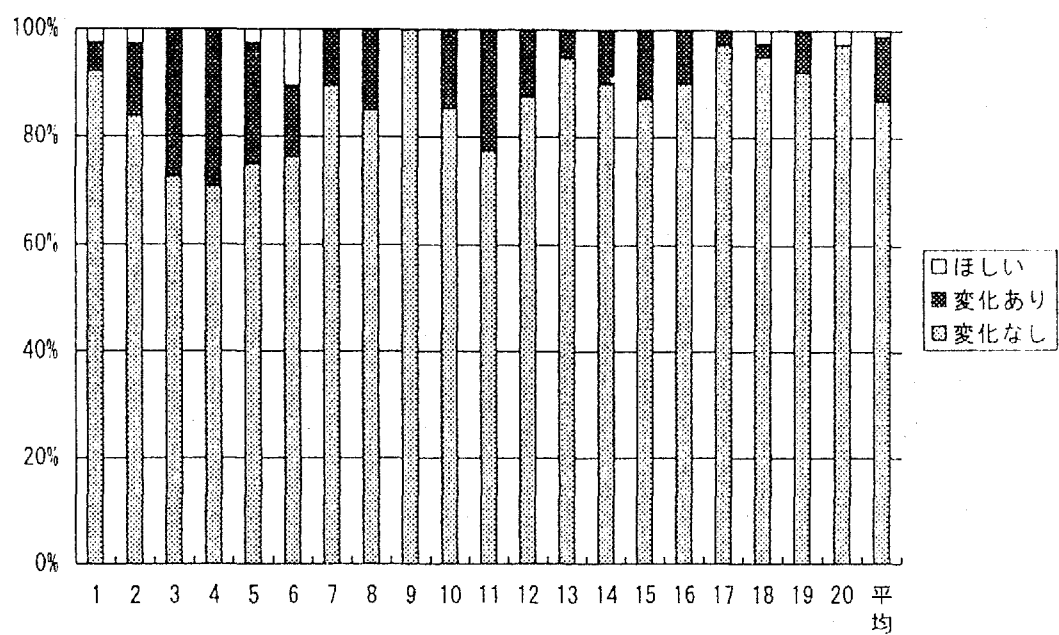
・アンケート回答者

西宮市立 西宮高等学校	生徒（1年）	41名
	生徒（2年）	35名
	生徒（3年）	38名
	保護者	38名
	教員	21名

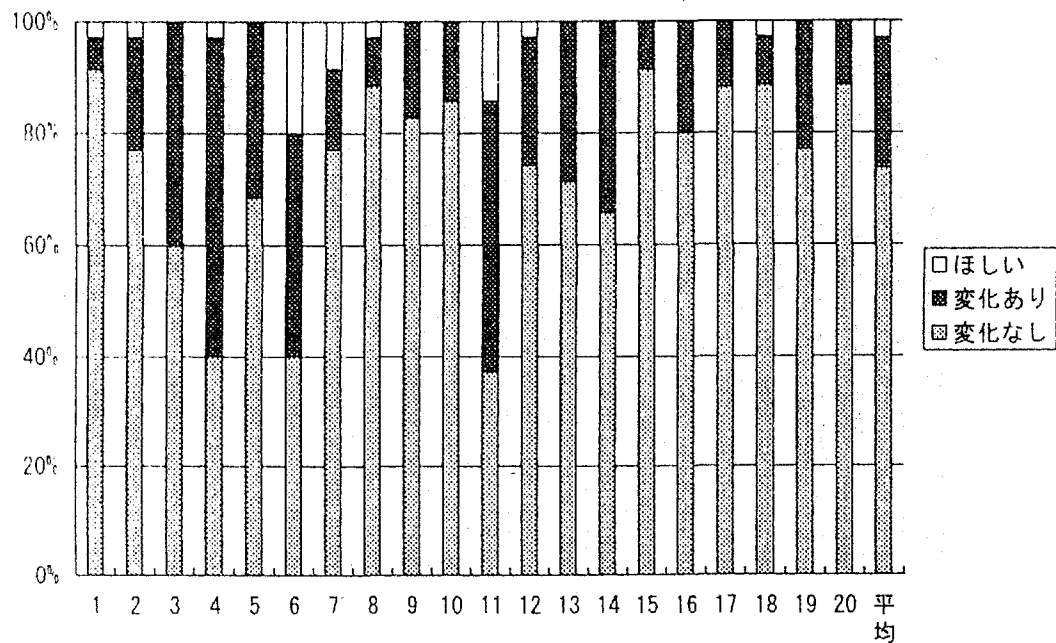
・回答者の傾向（それぞれの平均の比較）



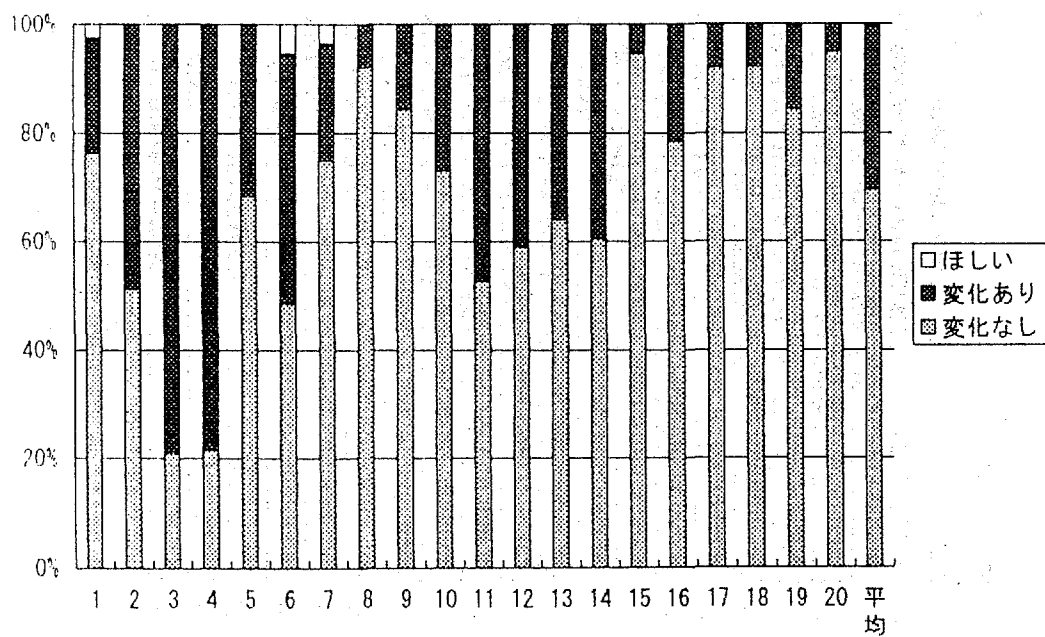
・生徒1年の回答



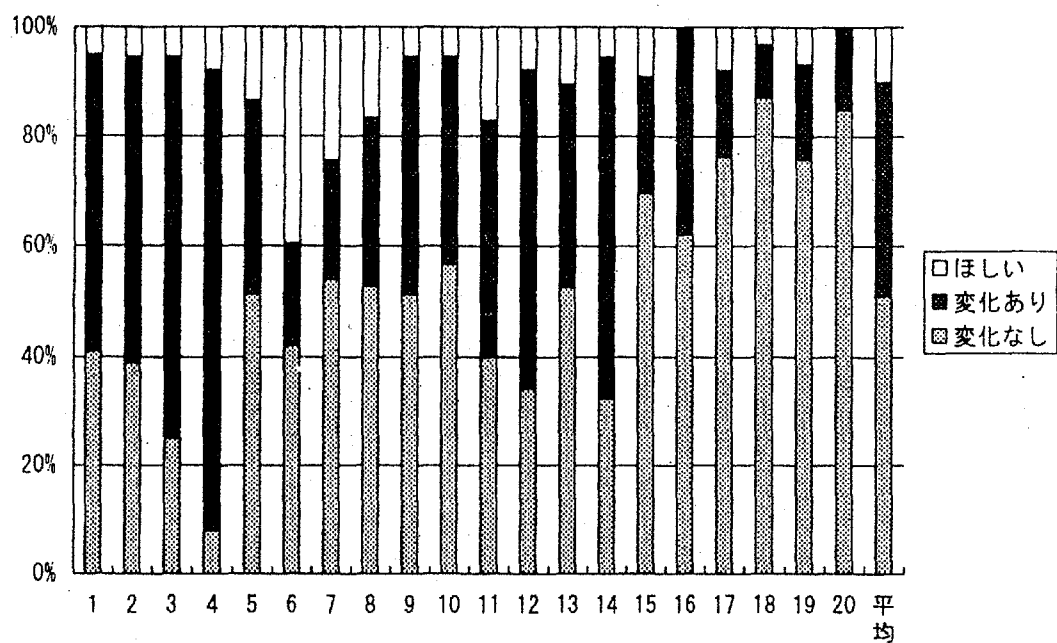
・生徒2年の回答



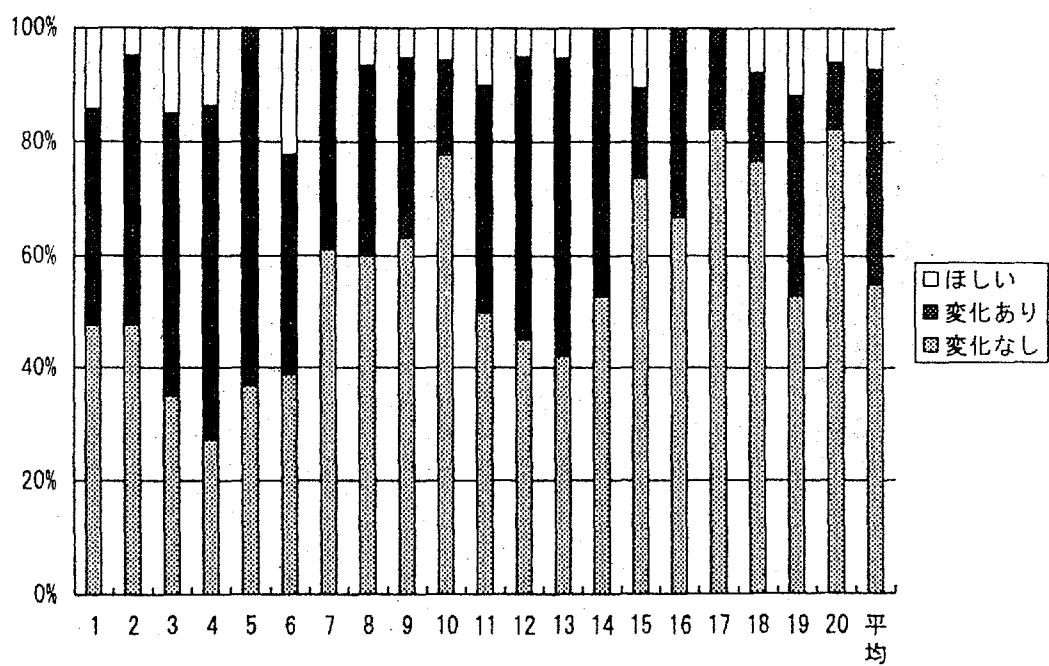
・生徒3年の回答



・保護者の回答



・教師の回答



震災後の心の変化についてのアンケート結果

回答者〈生徒1年〉

①…変化なし ②…変化あり ③…変わって欲しい ④…②③の主内容

	項 目	②または③と答えた人はその内容
1	人間としての生き方	たくましさを感じた。
2	生命への思い	大切なもの、はかなくもろいものと痛感した。
3	自然の力への思い	自然は恐ろしくすごい物、人間の力などおよびもしない物、常に要注意。
4	水などへの価値観	生命にとっていかに大切にすべきか、大事なものか思い知った。節水を痛感。
5	阪神地域へのイメージ	阪神地区にも地震があると知った。ボロボロになった。埃っぽい。
6	行政への見方	全く役に立たない。何もしてくれない。自衛隊のことも一考すべき。頼りない。
7	公共施設について	もっと必要だと思う。とても役だった。車椅子対応のエレベーターをつけるべき。リゾ鳴尾浜は無料にすべき。
8	学校が避難所だった事についての認識	今まで学校が避難所である事を知らなかった。日本の福祉や教育は貧しい。これからは冷暖房完備にすべきだ。
9	家族愛について	大事だと思う。大切にしなければいけないと思う。
10	食生活について	
11	ボランティア活動	素晴らしい事だと思う。一回やってみたいと思う。若い人達がボランティアに積極的だった。助け合う力の大切さを知った。
12	物の価値観	なにげない物でもいざというとき役立つ。
13	高齢者問題	とても関心を持った。
14	近所付き合い	近所とは仲良くしておこうと思った。以外と暖かかった。
15	集団生活について	見直さなくてははいけない。
16	友人・親類との関係	登校拒否していた子と遊んだりできるようになった。
17	家庭の仕事の分担	仕事が増えた。
18	進路について	
19	学校生活について	プレハブがいや。
20	余暇の過ごし方	

震災後の心の変化についてのアンケート結果

回答者〈生徒2年〉

①…変化なし ②…変化あり ③…変わって欲しい ④…②③の主内容

	項 目	②または③と答えた人はその内容
1	人間としての生き方	人の気持ちを思いやりたい。 後悔のない人生を送りたい。
2	生命への思い	生命の尊さ、生きることの素晴らしさを実感した。
3	自然の力への思い	自然の力の恐ろしさは想像以上である。
4	水などへの価値観	水の大切さを思い知らされ、節水を心がけるようになった。
5	阪神地域へのイメージ	活気がなくなり残念だ。安心感が薄れた。
6	行政への見方	規則にとらわれず、すみやかに対応して欲しい。
7	公共施設について	災害時の備えを万全に、また施設を増やすべきだ。
8	学校が避難所だった事についての認識	学校に通う者だけの物でない。
9	家族愛について	家族のきずなが深まり大切に思うようになった。
10	食生活について	好き嫌いをなくし、粗末にはいけないと思う。
11	ボランティア活動	自分の為にも積極的に参加すべきだ。
12	物の価値観	大切なものの捉え方が変わった。
13	高齢者問題	一人暮らしは危険。
14	近所付き合い	日頃の交流がいざという時の助け合いにつながる。
15	集団生活について	人の助け合い、協力の大切さを知った。
16	友人・親類との関係	友人の大切さがわかり、親類とも会う機会がふえた。
17	家庭の仕事の分担	家族が助け合い、自分の分担をふやした。
18	進路について	真剣に考えるようになった。
19	学校生活について	クラブ活動をする場所が狭くなった。
20	余暇の過ごし方	ボランティア。

震災後の心の変化についてのアンケート結果

回答者〈生徒3年〉

①…変化なし ②…変化あり ③…変わって欲しい ④…②③の主内容

	項 目	②または③と答えた人はその内容
1	人間としての生き方	生き方を考え直すことができた。
2	生命への思い	はかなさと尊さを感じた。
3	自然の力への思い	偉大さと恐ろしさを感じた。
4	水などへの価値観	大切さがわかり節約するようになった。
5	阪神地域へのイメージ	安全性のイメージが壊れた。
6	行政への見方	対応が遅く信用できない。 冷たさを感じる。
7	公共施設について	役立つ。
8	学校が避難所だった事についての認識	
9	家族愛について	大切さを感じた。
10	食生活について	
11	ボランティア活動	やってみて大変ではあったが大切である。
12	物の価値観	物の大切さがわかった。
13	高齢者問題	ひとり住まいの高齢者は特に気の毒である。
14	近所付き合い	仲良く協力的である。
15	集団生活について	
16	友人・親類との関係	助け合うことが大切である。
17	家庭の仕事の分担	
18	進路について	
19	学校生活について	プレハブ校舎になったが学ぶべきものがいっぱいある。
20	余暇の過ごし方	

震災後の心の変化についてのアンケート結果

回答者〈保護者〉

	項 目	変化した、または変化して欲しい主な内容
1	人間としての生き方	今を懸命に生きるようになった。 生命の大切さを痛感した。 本当に大事なことがわかった気がする。 時の経過とともにだらしのない生活に戻ってしまった。
2	生命への思い	家族などが生き埋めになり命の尊さを感じた。 生命の大切さとはかなさを感じた。
3	自然の力への思い	自然との共生を真剣に考えないとしっぺ返しがある。 自然の力の恐ろしさを改めて認識した。
4	水などへの価値観	水の大切さを痛感した。 無駄水をしなくなった。
5	阪神地区へのイメージ	地震は無いものと思っていたのに。 住みよい町と思っていたのに。 見知った情景が変わってしまった。
6	行政への見方	震災後の対応は良くしてくれた。 今後の対応の仕方をしっかりと考えて欲しい。
7	公共施設について	少ないことを改めて考えさせられた。 受け入れは良かったがもっと広い施設が必要だ。 避難所が倒壊する建て方は許せない。
8	学校が避難所だった事についての認識	学校が長期間避難所になり子供達が気の毒だ。 学校関係者が被災者の面倒を親身に見てくれて感激している。
9	家族愛について	家族の絆が強くなった。 家族が一つになって行動でき満足している。
10	食生活について	保存食を蓄えるようになった。 食物の大切さを感じた。
11	ボランティア活動	自然な形でできる社会が望ましい。 若い人達、また全国からのボランティアに感謝する。 自分にできることがあれば…と参加した。 子供達も休校の間ボランティア活動をしていた。
12	物の価値観	不要なものを持ちすぎていた。 物にこだわらなくなった。
13	高齢者問題	お年寄りの弱さが浮き彫りになった。 これから高齢者が増え、問題も多くなり考えさせられる。
14	近所付き合い	今までより親しくなった。 精神面・経済面で人間の嫌な面を見てしまった。
15	集団生活について	参加してみたい。
16	友人・親類との関係	友人・親類その他多くの人のお世話になり、有り難さが身にしみた。 今まで以上に交流が深まった。
17	家庭の仕事の分担	みんなが仕事を分担して働いた。 震災直後の家族の協力も今は無くなった。
18	進路について	学歴への意識が薄れた。
19	学校生活について	クラブ活動の場所が無くなり子供達が困っている。 休校期間が長く心配したが、子供達はボランティア活動等人生勉強をして却って良かったかも。
20	余暇の過ごし方	友人や家族同士で余暇を大切に過ごすことが多くなった。

震災後の心の変化についてのアンケート結果

回答者〈教 師〉

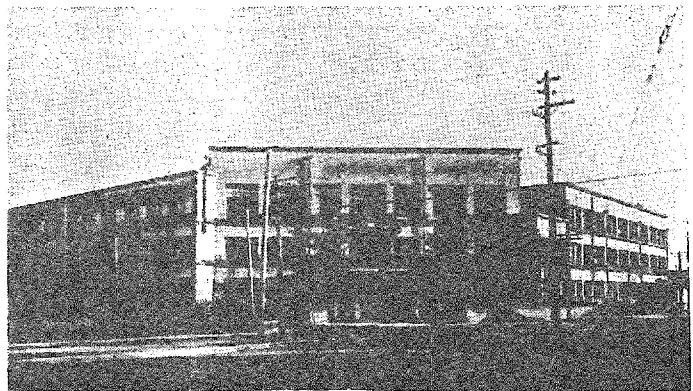
	項 目	変化した、または変化して欲しい主な内容
1	人間としての生き方	一日一日を大切に、真に大切なもの、心の豊かさを求めるようになった。 生き方が淡泊になった気がする。 価値観に以前とズレが生じた。
2	生命への思い	身近に多くの人命が失われ、現実でない気がする。 大自然の中の人間を再認識し、命の重みを感じる。
3	自然の力への思い	人間の非力さを痛感し、常の備えの必要を感じた。 自然保護や自然との共生の大切さを改めて認識した。
4	水などへの価値観	水などを失って、その大切さを痛感した。 水が蛇口から出ることの有り難さを知った。
5	阪神地区へのイメージ	災害が少ない地域とのイメージが無くなった。 郷土愛が強まった。 あまりにもバラバラ行政。国や県との連携を密に。
6	行政への見方	アスベスト対策など多くの点での対応が遅れた。 NGOを含む民間との連携の遅れを感じる。
7	公共施設について	安全総点検が必要。 有事の時に転用できる施設が必要である。 避難所が倒壊する建て方は許せない。
8	学校が避難所だった事についての認識	学校が避難所として大切なことを避難して知った。 学校が地域に役立つのは当然だが、問題や影響も大きく、「学校しかないから」というのではダメだ。
9	家族愛について	以前にもまして家族を大切に思う。 家族がお互いに気遣うようになった。
10	食生活について	浮ついたグルメブームを再考すべきだ。 日頃何気なく贅沢していると感じた。
11	ボランティア活動	ボランティアの重要性を再確認した。 若い人達への見方が変わった。 ボランティアする側、受ける側の感性を見直すべき。 日常のネットワーク作りが大切だと思う。 年少のころから訓練して身につけさせたい。
12	物の価値観	物より心の大切さを思うようになった。 自然の力の前での形あるもののはかなさを感じる。
13	高齢者問題	一人暮らしの年寄りの多さと問題の深刻さを知った。 弱者の側にも甘えやはき違えはなかったか。 心のケア不足を感じる。 ボランティアで少しでもお手伝いしたいと思う。
14	近所付き合い	声を掛け合うようになり、情報交換も多くなった。
15	集団生活について	年少より、集団生活のあり方を訓練する必要がある。
16	友人・親類との関係	友人・親類・知己の有り難さが身にしみた。 今まで以上に交流が深まった。
17	家庭の仕事の分担	助け合う大切さが身にしみて分かった。
18	進路について	背伸びしない（適材適所）と思うようになった。
19	学校生活について	落ち着かない状態だが、平常の学校生活を愛校心をもって送れることに感謝している。 学校が休校となったが、学校生活への認識を改めた。 知育も大切だが、人間教育の大切さを感じる。
20	余暇の過ごし方	限りある人生を認識し、余暇を有意義に過ごしたい。 人のために過ごしたい。

建石から高座へーそして今

森本 宏

1月17日5時46分、阪神・淡路大震災。多くの貴い命が失われ、建造物が崩壊した。我々の失ったものは余りにも大きい。我が母校市立西宮高校の校舎も被害を受け、建て直しを余儀なくされている。私にとって、学生時代（建石）を過ごし、教師として教鞭（高座）を執った思い出多き学び舎である。今、その校舎がなくなろうとしている。万感胸に迫る思いがある。私の教員生活も後一年を残すところとなった。震災で校舎を失った今、新しい校舎が建設され、市西が新たに生まれ変わろうとしている時、市西の更なる発展を願う気持ちは大きい。しかし、同時に己の過ごした学び舎が無くなってしまうのも寂しものである。本校の校舎は、建石町・高座町、そして新校舎と三つの校舎になる。新しい校舎ができ、古いものが忘れ去られようとする時、市西（当時は西高）で学び、市西で教鞭を執った者として、ひとりの語り部として、西宮高校の学生時代からの43年間を語っておきたいと思った。僭越ではあるけれども筆を執らせていただきたいと思う。

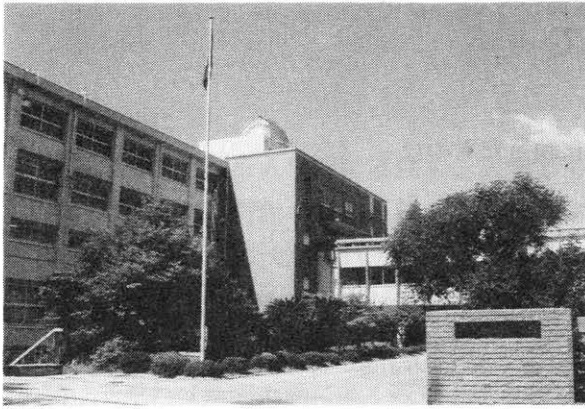
昭和27年、学生として市西の校舎に第一歩を踏み入れた。終戦後の混乱がようやく落ち着きを見せはじめ、復興の時期であったがまだまだすべての面で不自由な時代であった。市西の校舎は戦争で焼け残った元建石小学校の校舎であった。特に、玄関を入った所は昼間でも薄暗く、常に明かりが必要であった。建物としてはどっしりとして重厚な感じを覚えたが高等学校としては設備が十分ではなく、今から思えば随分不自由な学習の場であったと思う。窓ガラスもなく、風の吹き込む冬の寒い授業と、倉庫を改良した小さな食堂は、20人も入れば満員になるというものであった。メニューもうどんとパンだけの寂しいものであったが、あの温かいうどんの味は忘れられない思い出である。そんな学生生活であったが、不充分だとも感じず、それなりに楽しい高校生活であったように思う。震災後の教育環境を思うとき、生徒達にはかわいそうだと思うが、同時に、恵まれすぎたこれまでの環境を顧みて、不自由な中でも向日的な逞しい生き方をして欲しいと願わずにはいられない。



今も残る建石校舎（現西宮西高等学校）

卒業後8年を経て再び市西の校舎に通うことになった時は、特別教室（理科・芸術）が増築され、体育館も建設されており、PTAが毎年、西宮戎（十日戎）に「ぜんざい」などを販売して、資金をためて作られた松柏図書館も建っていた。現在では、たとえPTAでも学校が商売をして施設を建築することは許されないかもしれないけれど、PTAと教師が子供達の教育環境を整えるために力を併せ努力したものだ。当時を懐かしく思い出していると、行政に、その他何かに求めることに慣れている今の自分達を反省させられてしまった。特に震災で不自由になった今だからこそ、求めるのではなく、自分達で切り開く活力を思い出して欲しいと思う。

こうして設備も整い、すっかり高等学校らしくなった。新しく建てられた部分は明るく近代的な感じがしたが、その分、元の古い校舎がみすぼらしく感じられるという面もあった。しかし、まがりなりにもこうして高等学校らしい建物になり、設備も充実したのであった。それも慣れてくると、やはり元は小学校として建てられたものであるから、教室も狭く何かと不自由を感じるようになってきた。そこで新校舎の建設が計画され、昭和45年に新校舎が竣工され、この高座の地に移転が行われた。



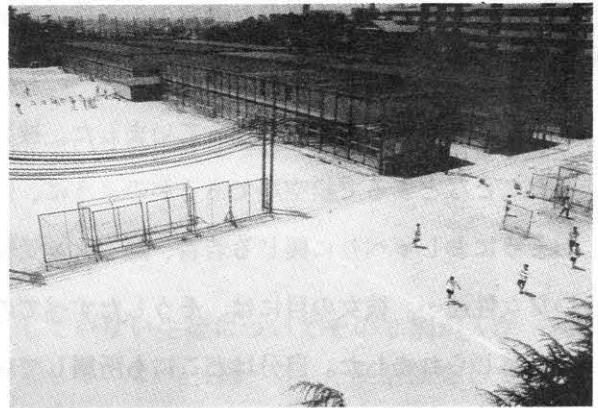
震災前の高座の校舎

浜手の地から山手の地に移転したのである。

新しい校舎は、短期大学にも匹敵する建物として、評判になった。特に廊下は大変すばらしいものであった。それは、無駄とも思えるスペースを大きくとり、精神的なゆとりを重視したものであった。昨今の功利的・合理的な考え方が横行する中で、そうした考え方は、時代を先取りするものであったと思う。体育館は、昭和46年に竣工されたが、これ一つとってみても規格にはまったものでなく、独自に設計されたもので、ゆったりとした造りになっている。新校舎は、どの学校と比べてもひけをとらない、正に堂々たる校舎建築であった。設備面に於いても当時としては十分に配慮さ

れたものであった。

そのすばらしい校舎がこの度の阪神淡路大震災により瓦礫と化したのは実に悲しい思いがする。そして現在仮設校舎での不便な高校生活を余儀なくされているが、新校舎建設の設計図も完成し建設への槌音が聞かれる毎日である。希望に胸ふくらむ思いである。仮植えされている蘇鉄の苗木は、建石の校舎から移植されたものであるが、建石から高座へ、そして仮設校舎、プレハブ校舎新校舎建設と、三代の学び舎を体験した今、この蘇鉄が新校舎の玄関をうるおしてくれる日を楽しみにしている。校舎は変わっても市西の心は変わらない。玄関の蘇鉄が市西の歴史を見つめている。



プレハブ校舎



新校舎完成予定図

再生への一步へ向かって

—あの頃彼女の心に映ったものは—

正田 慎

「電車に乗るのがとても嫌なんです。朝早く起きるのがつらいとか、満員電車が苦痛だとか、そういう問題じゃないんです。ただ家を出てから西宮に着くまでの時間がとても長く感じられて落ち着かないんです。…いろいろと考えてしまって、何か疎外感っていうか、孤独で耐え切れない気持ちになるんです。帰りも同じです。西宮を離れるにつれて、だんだん気持ちが沈んできて、何だかとてもやり切れない気持ちになるんです…。」

彼女は住んでいた西宮の家が全壊し、遠方から電車を乗り継いで通学していました。通学時間はかかるものの、不自由を強いられる西宮の生活に比べれば、それは大変恵まれた生活だと、彼女自身感じていました。住み慣れた西宮の街の悲惨な情景の中で過ごす時間よりも、被災地を離れている時間は、安らげるひとときになるはずでした。しかし、その時間はむしろ、地震によって受けた心の傷を再確認する苦痛な時間となっていました。被災地を離れてから、彼女の目に映るものは、地震が起きたことなどまるで絵空事であるかのように、普段と変わらない穏やかな街並みや人々の暮らし、楽しそうにおしゃべりに興じる若者、熱く大学受験について語る高校生、素敵な服を身にまとったきれいな女性達…。彼女の目には、そうしたすべての光景が、決して踏み入ることのできない別世界のものに感じられました。自分はどこにも所属していない。しかし、被災地のために何か役立つことをしているわけでもない。地震前にはごくありふれた光景であったものが、彼女を次第に疎外感と無力感の闇の中へと追いやり苦しめていたのです。

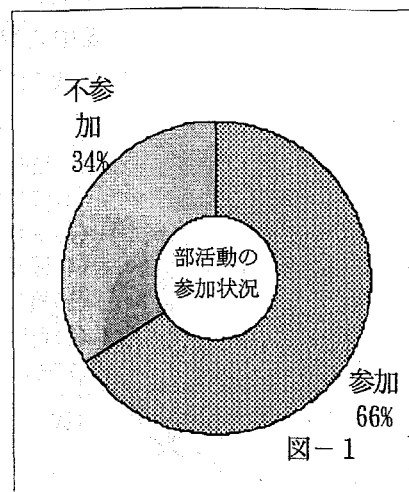
あれから一年、彼女も笑顔で卒業していきました。あの頃、彼女を苦しめていた光景の中に、今では彼女もすっかりとけ込んでいることでしょう。そして当時、通学時に目にした無神経にも思える人々の背中の上にも、実は様々な想いが背負われていたことに気づいた時、彼女は本当の意味での再生への一步を踏み出すことになるでしょう。その日が一日も早く訪れることを、震災を経験した一教師として心から願い続けています。

部活動の活動状況について

飾 森 宏

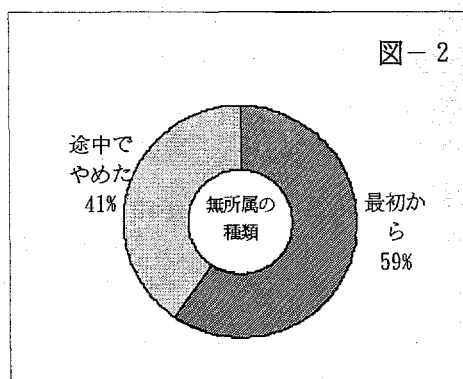
(1) はじめに

兵庫県南部地震を入学前に経験し、入学してきた生徒達（50回生）にとって体育館が使用不能、グラウンドが本来の三分の一以下になった本校の状況を目の当たりにして1年生が放課後の部活動（以下「活動」という）に高校生活の意義をどれだけ見だし、参加してくれるかが4月、5月当初の不安材料だった。ふたを開けて見れば新聞紙面に多く取り上げられているJリーグのサッカー、伊達・沢松氏等が活躍のテニス、漫画人気のバスケット、そしてバドミントンに入部者が集中し、他の部には入部者が極端に少なく、部活動そのものが危ぶまれる部もあった。年度末を迎える現在、入っていた部をやめ、「帰宅部」となる生徒が増えてきたように感じる。2月の最終週に1年生の担任の先生方にご協力をいただいて、1学年の部活動参加状況のアンケートをとっていただいた。回答数は296（男166、女130）であった。年度末のこの時期で部活動に参加していない生徒が1年生で34%（図-1）もいるのには多いと見るべきか少ないと見るべきか。ただ気になるのは女子よりも男子の参加率が高い（男37%、女30%）ことである。



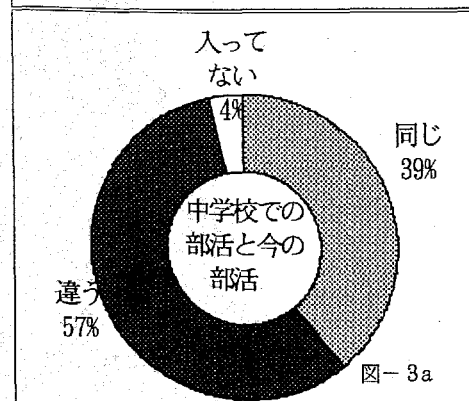
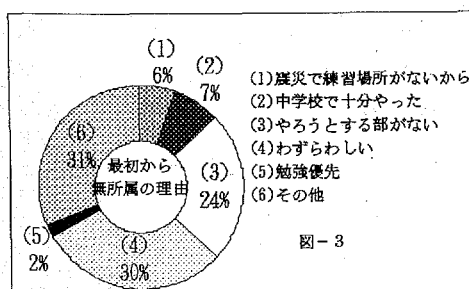
そこで年度末（平成8年2月末）で部活動に参加していない生徒についてアンケート結果を基に考えていきたい。

(2) 部活動をやめた生徒について



活動をしていない生徒についてその6割が入学当初より活動に参加していない。（図-2）一度活動をしてみて、いろいろな事情からやめたのではなく、高校入学当初より放課後の活動をしていないことになる。その理由を調べてみると、当初心配していた震災の影響で参加していない者は、わずか6%であった。しかし、部活動が「わずらわしいから」が30%、「やろうとする部がないから」が24%には少し驚いた。前者はやる気のなさ、後者は、新しいものに挑戦する意欲のなさと考えるべきか。（6）のその他で多かったのが「自分の時間を有効に使いたいから」と言うもので、次に多かったのが「身体的理由」であった。「自分の時間…」は学外で自分のやるべき何かを見つけているのだろう。「身体的理由」は別に運動部でなくとも文化部の方で活躍する事を考えればと思うが、見方を変えれば放課後の学校での活動に魅力がないことになる。（図-3）特に「やろうとする部がない」については活動に参加しているものの60%近くのもが中学校とは違った活動に参加している。（図-3a）新しいものにチャレンジしよう

活動をしていない生徒についてその6割が入学当初より活動に参加していない。（図-2）一度活動をしてみて、いろいろな事情からやめたのではなく、高校入学当初より放課後の活動をしていないことになる。その理由を調べてみると、当初心配していた震災の影響で参加していない者は、わずか6%であった。しかし、部活動が「わずらわしいから」が30%、「やろうとする部がないから」が24%には少し驚いた。前者はやる気のなさ、後者は、新しいものに挑戦する意欲のなさと考えるべきか。（6）のその他で多かったのが「自分の時間を有効に使いたいから」と言うもので、次に多かったのが「身体的理由」であった。「自分の時間…」は学外で自分のやるべき何かを見つけているのだろう。「身体的理由」は別に運動部でなくとも文化部の方で活躍する事を考えればと思うが、見方を変えれば放課後の学校での活動に魅力がないことになる。（図-3）特に「やろうとする部がない」については活動に参加しているものの60%近くのもが中学校とは違った活動に参加している。（図-3a）新しいものにチャレンジしよう



という者が少ないわけではない。また、いったんは参加したものの途中でやめた生徒について、そのやめた理由を調べると、クラブ内での人間関係が24%、おもしろくないからが22%で、両者でほぼ半分に達する。(図-4)つまり協調性のなさ、そして活動に自分なりの目標を見いだせない生徒が多いということであろうか。(7)のその他で多かったのが怪我などの身体的理由をあげている者が複数あった。また、途中でやめた生徒のやめた時期を見ると夏以降にやめた生徒が半数に達する。(図-5)何とか活動についてきても夏の練習が疎かになり、技術的にも他の者との差ができ、その

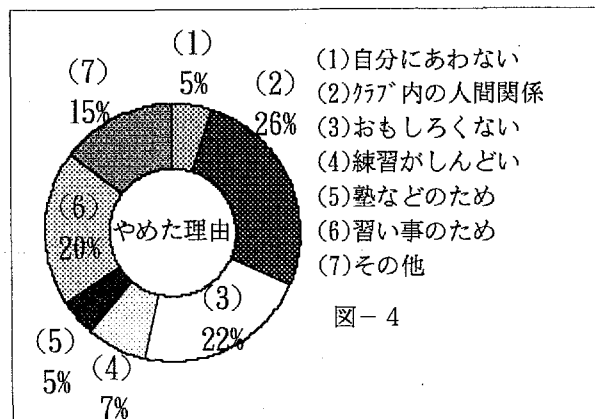


図-4

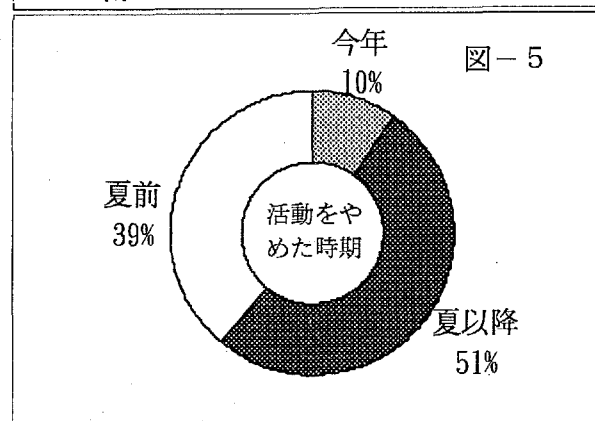


図-5

結果、練習がおもしろくなり、またさらには、休みが続き、クラブ内の人間関係が悪くなってきてやめてしまう、と推測できる。

(3) 活動に参加している生徒

活動に参加している生徒の「不満な点」の最も多かったのは「練習場所の狭さ、なさ」である。これは当然予想出来たことで、「やはり」という感がある。練習場所に移動するのに時間がかかりすぎる。(テニス) 体育館がないので外で走ってばかり(バスケ、バドミントン) 場所が狭い(野球、サッカー) 等々。

(4) これからの部活動のありかた

放課後の部活動に参加していない生徒の大半は、活動をすること自体に魅力を感じていないわけである。部活動を教師の本務であるかないか、社会体育に移行すべきかどうかという議論は別にして、少なくとも現状では顧問教師が活動に何らかの形

で参加しなくてはいけないことになっている。直接指導できないにしても試合のための事務処理、公式試合、練習試合等への引率、震災後の練習場確保など活動のための援助等、生徒が教師のすることを目にする機会は多い。その教師の姿を見て、活動に魅力を感じたり、やる気をなくしたりするのではないだろうか。また活動に参加している生徒の不満をそのままにしておくと、2年生になってまた活動をしなくなる生徒が増えるのではないだろうか。1年生の中には、「市西が授業とテストばかりで予備校みたい。」「行事もなくおもしろくない。」という感想を持っている生徒がいる。今まではそのような不満も放課後の活動で解消されていたところがある。しかしそれもできなくなると生徒にますますストレスがたまり、今までになかった不満が出てくるのではないだろうか。2期制になって以前より授業時間は増えているはずである。震災の後だからこそ、放課後の学校活動を充実させなければならないと思う。だからこそ場所の確保については個人や一つの部としてではなく、学校全体で取り組まなければならないだろうし、何らかの魅力を感じさせるような工夫をしていかなくは生徒に活力がなくなってくるのではないだろうか。時代が違えば、学校を取り巻く環境が大きく違っているので比較は出来ないが私が現役の頃は、授業より授業外の活動に魅力があった。(魅力を持てるように見えないところで諸先生方が頑張っておられたのだらうと思う。) だから学校に愛着があった。だから無事卒業出来るよう学習もそれなりに頑張った。だから今でも市西には誇りを持っている。はたして今の生徒にそれがあろうか。放課後の活動に魅力を感じているだろうか。それらを持たない生徒が増えていることが、荒れている学校、荒れていた学校の初期の状態に似ている。いま教師が頑張らねば、生徒は駄目になっていくような気がする。

阪神大震災 生徒の住居の損壊状況

(1・2年は3月9日現在、3年は2月28日現在)

年	組	担 任	在籍数	無事	半壊	全壊	合計	不明	休学	留学
1 年	1組	竹 下	40	25	9	6	15	0		
	2組	池 田	41	27	8	6	14	0	1	
	3組	橋 本	40	24	12	4	16	0	1	
	4組	小 川	41	22	8	11	19	0	1	
	5組	大 路	40	27	10	3	13	0	1	
	6組	神 鳥	39	25	12	2	14	0		
	7組	井 上	40	28	5	7	12	0		
	8組	河 野	41	32	4	5	9	0		
	小 計		322	210	68	44	112	0	4	0
2 年	1組	矢 野	40	29	6	5	11	0		
	2組	川 中	42	31	6	5	11	0		
	3組	野 崎	40	18	9	13	22	0	1	
	4組	正 田	38	30	6	2	8	0	1	
	5組	大 濱	40	26	5	9	14	0		
	6組	大 森	39	23	9	7	16	0	1	
	7組	寺 岡	38	25	8	5	13	0		1
	8組	北 田	38	24	8	6	14	0	1	
	9組	東 郷	39	25	8	6	14	0	1	
	小 計		354	231	65	58	123	0	5	1
3 年	1組	坂 本	40	32	5	3	8	0		1
	2組	西 澤	39	27	6	6	12	0		
	3組	松 本	39	27	12	0	12	0		
	4組	飾 森	44	38	2	4	6	0		
	5組	石 井	39	24	11	3	14	0		
	6組	竹 中	39	35	3	1	4	0		
	7組	吉 坂	38	30	4	4	8	0		
	8組	堂 元	39	26	9	4	13	0		
	9組	寺 野	39	28	8	3	11	0		
	小 計		356	267	60	28	88	0	0	1
合 計			1032	708	193	130	323	0	9	2

震災後の生徒の状況調査（集計）

H 7. 4 月末現在

地域	住 居	1 年	2 年	3 年	合 計
校区 内	自 宅	2 6 2	2 6 6	2 6 8	7 9 6
	仮 設	4	3	1	8
	避 難 所	5	2	4	1 1
校区 外	自 宅	1 6	1 1	1 9	4 6
	親 類 等	4	4	5	1 3
	仮 設	1		3	4
	避 難 所	1		2	3
阪神 神戸 地区	自 宅	6	9	1 9	3 4
	仮 設		1	1	2
	親 類 等	5	3	2	1 0
遠隔 県外	自 宅	8	1 4	1 3	3 5
	仮 設		1	1	2
	親 類 等	2	2	5	9
合 計 人 数		3 1 4	3 1 6	3 4 3	9 7 3

評 林 第17号

— 震災の記録 —

発 行 1996年9月1日

編 集 者 図書館教育部、「評林」編集委員会

発 行 者 西宮市立西宮高等学校
〒662 兵庫県西宮市高座町14-117
TEL 0798-74-6711 (代表)